



を掘り下げ、社会的課題と向き合う実験の場」として考えていました。界に向けた社会的課題の提起とアートによるアプローチ」と「市民が地域芸術祭を参考にしながら、「地域の創造」「都市の再生」をコンセプトに、「世称)あきた芸術祭」の開催について検討を始めました。当初は、他都市の2年前、固い言葉で言えば「地方創生に資する取り組み」として、「(仮

今年度(平成29年度)は、「あきたを学ぶ。あきたで創る。〜人と土地とアート〜」のテーマのもと、たくさんの方々の力をお借りし、秋田の暮らしや人・活動など「日常」を学ぶ「夜楽」と、アートを切り口にまちに積み重なっている、普段気付かない歴史や文化などの「超日常」を考える「シンなっている、普段気付かない歴史や文化などの「超日常」を考える「シンケーを対して、利田の暮らしやり着いたと感じています。

「文学」、そして「場所の力」や人を含めた「まちの物語」までを多様な「(複私達の日常にあるもの、例えば芸術・文化・歴史に限らず、「食」、「音楽」、自分がこれからも暮らしていくまちを考え、関わる場をつくるため」に、「何のためにやるのか」「なぜ芸術祭なのか」。関わっていただいた方々

性の高いまちが見えます。と捉え、それをベースに表現し、伝え、つな数の)アート=文化的資源」と捉え、それをベースに表現し、伝え、つな数の)アート=文化的資源」と捉え、それをベースに表現し、伝え、つな数の)アート=文化的資源」と捉え、それをベースに表現し、伝え、つな数の)アート=文化的資源」と捉え、それをベースに表現し、伝え、つな

ントブックです。 
度の検討から「アーツ秋田」にたどりつくまでの経過をまとめたドキュメ 
度の検討から「アーツ秋田」にたどりつくまでの経過をまとめて、平成28年 
くるための取り組みのスタートになるようにとの想いをこめて、平成28年 
この冊子は、これからも脈々と続いていく、「私達が暮らすまち」をつ

トをみなさんと一緒につくり上げていければと思います。巡らせ、「楽しい人が集まることで楽しいまちになる」ようなプロジェクことで、「このまちに関わりたい」「自分も何かできるのでは」など思いを「誰がやりたいのか」。その答えは、これから。冊子を手にしていただく

第	第 5 章	第 4 章	第 3 章	第 2 章	第 序 1 文 章 ·
1章 平成28年度 シンポジウム ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	部活プロジェクト始まる ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	辺縁と創造のネットワーク〜地域芸術祭を超えて〜 ノート ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	「夜楽」《秋田のリアル》から未来を考える対話シリーズ   15   17   17   17   18   19   19   19   19   19   19   19	「あきたを学ぶ。あきたで創る。」 〜職員勉強会からの学び〜 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	「夜学」第0回「秋田市での芸術祭? 開催を考える あきた豊醸化計画」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

#### 平成28年度 シンポジウム 〜秋田市での芸術祭? 開催を考える

の3名をお迎えしました。 にはアドボカシープランナーの佐藤裕之氏(羽後設備(株)代表取締役)、美術史家の山本丈志氏(秋田県)、「のんびり」編集長の藤本智士氏((有)Re:S 代表) 倉敏明氏(同大学)の進行のもと、会場となった秋田市川尻にある「高清水『仙人蔵』」に、市内外から70名を超える方々にご参加いただきました。パネリスト 平成28年11月11日(金)、「シンポジウム 〜秋田市での芸術祭? 開催を考える〜」を開催しました。美術家・藤浩志氏(秋田公立美術大学)と人類学者・石

クセッション」として、会場からのご意見やご質問をもとに意見交換するという内容でした。 前半は「パネリストが醸してきた秋田」と題して、パネリストの皆さんからご自身の活動紹介や「(仮称)芸術祭?」への想いをお話いただき、後半は「トー

酵していくように、元の姿を何かに変え、持続可能な価値が内側から生み出されていくというようなイメージでしょうか。 この当時は、人口減少社会の中、秋田市を豊かに醸そうという想いを込め、取り組みのテーマを「あきた豊醸化計画」としていました。微生物の力で食材が発

決めつけなしに、柔軟な視点でこれからの秋田と芸術のあり方を考えてみたいと思っていたのです。 既に秋田の中でもいろいろな活動をしている多くの人達が、これからどのようにつながり、豊かで味のあるモノになっていくのか、「アー トは難しい」という

を改めて考えるスタートだったのです。少し、振り返ってみます。 ウムは、私達がじっくりと「(仮称)芸術祭?」の意味を考え、そして今回、まちの将来を見据えたプロジェクト「アーツ秋田」として整理し直し、 結果、ゲストの方々からの厳しい指摘と、その一方で「やるのであれば必要な視点」について様々なキーワードをいただけました。振り返ると、このシンポジ その必要性

商売も市民活動も、 いるのであって、その『遊び』というのは、今の自分を別の場所に動かしていくこと、言い換えれば日常と非日常を行ったり来たりすること」という考え方を教 佐藤さんはいろいろなまちおこしに関わっていることから、「もっと単純に自分達のまちを知ろう」ということを話してくれました。佐藤さんのスタンスは、 ある意味面白さとか遊び心があるからやれる。ヨハン・ホイジンガ(社会学者)の「遊ぶということが人間は本質的に体の中に埋め込まれて

の人材をきちんと育成して、 山本さんは、ご自身が「あきたの美術」という事業を担当されている経験も踏まえて、これからやるべきことは、アートイベントやプロジェクトをやるため 5年、 10年先のことを見越した上で準備していくことと示してくれました。

るのは誰なのか? ち(秋田)にあるものに対して、もう少し「編集」という視点でどんどんアプローチできれば、もっ て、それがきちんと大衆に響くということをすごく大事に思っているそうです。だから、既にこのま ごいですよ、これ!』と思うことがたくさんある」との発言は重みがありました。 を通して秋田を見てきた立場から、「皆さんが普通だと思っているようなことが、県外の人にしたら『す と人が寄るし、もっといろんなものが生まれる。こういうことをやるべきでは? そして藤本さんです。冒頭、「秋田市で芸術祭やらなあかんのかな?」と一言。「のんびり」の取材 ということを提示してくれました。 伝えたいことがあっ そういう熱意があ

げかけて、 術祭?」ということが先に立つよりも、もっとやるべきことがあるんじゃないの? という疑問を投 私達のスタンスをもっとしっかり持つべきというありがたい指摘と受け止めました。「(仮称) 芸 私達が本当にやるべきことを考えさせてくれたのだと思います。

知りたいという気持ちや感覚を大事にしたい」「日常の中の小さな変化を発見する喜び、それが継続 ても大事。日常を大切にしなければ、非日常というお祭りはできない」……。 することで芸術祭のようなことに育っていくと良いのでは」「秋田にあるものを大事にすることがと 世界と向き合う面白さ」「個々人がわからないことはとても多くて、だからこそ興味を持ち、見たい、 20年後の新しい価値や風景を思い描きながら、まだ見たことのない、出会ったことのな

後半のパネリストの方々の言葉です。

私達の日常に根付けば、 気付かされました。ということは、いろいろなまちの誇りとか、場所の力を再発見すること、それが 年度)の取り組みのベースになりました。 私達も、改めて地元にある資源を編集する、自分達にはこういうものがあると知ることの大事さに より豊かで楽しいまちになるのではないでしょうか。これが今年度(平成29



#### 「夜学」第0 口 「秋田市での芸術祭? 開催を考えるあきた豊醸化計画」

ゲストには、シンポジウムに引き続き「のんびり」編集長の藤本さんを迎えました。 2月9日(木)18時30分~20時30分、にぎわい交流館AU研修室1で、26人の方にご参加いただきました。進行はシンポジウムと同じく、藤さんと石倉さん。 平成28年度は、シンポジウムにおけるゲストの方々の意見を踏まえ、 私達の悩みや疑問を整理する意味も含めて、「夜学」第0回を開催しました。平成29年

想いを述べたもの)に対して、藤本さんから「熱が伝わってこなかったし、芸術祭に対して、誰に熱があるんだということが謎になった」と一言。さらにその ですよ」。真正面から考えますよね、こんな言葉をいただいたら(今まで考えていなかったということではなく、 あとの言葉が響きました。「僕は全否定している訳ではなくて、熱量があって、こういうことがやりたい! という明確なものがあった時に協力したくなるん 階だという意味からです。このプレ「夜楽」が我々にとってのエポック・メイキングになりました。冒頭、秋田市長のビデオレター(市長が芸術祭についての 5年、10年経ったら、新しい価値の創造につながるような「芸術祭?」の先を見据えた流れをどうつくるか? 何を目指しているから、やりたいんだ! 回としたのは、平成29年度から始めたいと思っていた「夜楽」のスタンスを探ることと、まだ「(仮称) 芸術祭?」に対する疑問・指摘を整理する準備段 今まで以上にという意味です)。 と

いうこれまではっきりとした言葉になっていなかったものを担当職員が明確に意識し始めたのだと思います。まさに感謝でした。

をつくることとしました。二つ目は「夜楽」。おぼろげな感覚でとらえている秋田の日常にスポットを当て、様々な活動者をゲストに、切り口を変えながら活動の につなげたのでした。まず、一つ目は「職員勉強会」。市職員でこうした取り組みに熱意のある人とつながりたい。そして、何のためにやるのかを一緒に考える場 この後の議論で、私達は組織の枠を超えて、もっと一緒に考える仲間を増やしていくこと、熱量を持った人を巻き込んでいくことを考え、平成29年度の取り組み







Facebook、Twitter などに地道に取り組むきっかけとなりました。 次に関われる場をつくりたい。そんな想いからです。あわせて、「告知が足りん」というアドバイス。行政の弱点ですが、 世の中の潮流も知ろうと画策。三つ目は「部活プロジェクト」。「夜楽」からまちや日常に興味を持ってもらえたら、 視点やまちを見るための気付きを得る場をつくることとしました。そしてシンポジウムで外からのゲストもお招きし、

きの場、まちに関われる軸につながるように。まさに藤本さんが言ってくれた「まちを編集する視点」なのかも しれません。では、この三つの取り組みについては、次の章で。 秋田のまちにこれから何かが生まれるような仕組み、枠組みをつくりたい。まちの懐となるような学びと気付



# |「(仮称) あきた芸術祭?」 を考える勉強会

との関わりなどからどう捉えているか、そして業務のみならず個人としてはどんな受け止めをしているのか、積み上げていきました。 取り組みを本当に知っているか? 各課所室毎に予算を確保し、事業を進めることが一般的で、 平成29年度、最初は市職員が「芸術文化によるまちおこし」や「(仮称)あきた芸術祭?」という市の取り組みについて考える機会を設けました。 普段、私達職員は、 – クセッションや意見交換により、課所室の垣根を越えて市の施策への関心を高めることとしました。この勉強会で、「(仮称)芸術祭?」を職員が自分の業務 という疑問と悩みがあります。そこで、本市の「芸術文化によるまちおこし」について知る職員勉強会を開催し、 例えば「芸術文化によるまちおこし」という施策の方向性を知っていても、それに関わる全ての市の 職員同士の

### 第1回 日常について考えよう

術文化によるまちおこし」の取り組みについて説明を聞いた後、意見交換をスター 第1回は平成29年6月2日(金)に開催し、33名の職員が参加しました。「(仮称)芸術祭?」開催を考える担当でもある企画調整課・齋藤課長から、本市の「芸

意見を出し合いました。 テーマは「『日常』について考えてみよう!」です。例えば「自分は何に豊かさを感じる?」「秋田らしい暮らしを感じる瞬間は?」という問いかけにみんなで

秋田での暮らしは、「五感・心の余裕がある」「季節の移り変わりなど場面の変化が感じられる」、そして「まちの規模が適度で、じっくり歩くと発見があり、 いろいろな体験や体感がある」ということでした。次に、こうした日常をベースに、日常と超日常のつながり(関係性)について考えました。 「豊かさ」は、参加者の多くが自然や季節、そして食に感じているようです。あわせて、「何故それに豊かさを感じるのか」という発言も寄せられました。

日常」を考えることにしました。 「超日常」は「視点を変えると気付く、日常にひそんでいる新たな価値」、「非日常」は「普段存在しない異なる世界」として整理し、「日常」とつながる「超

け込んでいくものもあるのではないか、という逆方向からのベクトルも意見として出ました。この話し合いが私達の考えを整理する土台となりました。 はないかと考えました。そして、文化をベースに何らかの表現や活動が立ち上がり、新たな価値として認められると「芸術」となるのでは?という整理をしました。 「日常」は私達個人個人の「暮らし」そのものです。その中の何かに私達が共通の意味や価値を認めたり、広く知られてくると「文化」として認識されていくので 一方、「つくられるもの」「見たことのないもの」である芸術は、「不要だけど必要なもの」であり、時間の経過とともに、文化として根付き、暮らしの中に溶

## **弗2回 芸術祭は何のためにやるのか**

まちの活動と人をつくっていくことが大事であること、そうした中から日常の「豊かさ」やまちの「隙間」が浮き立ち、「超日常」に気付くことで新たな価値が第2回は、7月3日(月)に開催し、17名の職員が参加しました。前回の話し合いをもとに、「日常」では、今あるものを再発見・再認識して編集することで、 生まれるのではないか、という仮説を共有してスタート。

市民が楽しむまち」でした。その中に、「まち歩きを楽しめる」「歩きたいと思わせる」「ゆったりとした時間の中にスパイスがある」など、まちへの意見が見え どんなまちであってほしいのか? 次に「何のためにやるのか?」を考えるために、その先にある「まちの姿」について意見を出し合いました。私達は、将来秋田市をどんなまちにしたいのか? その姿を思い描いたときに、「(仮称)芸術祭?」をやる意味が見えてくると思ったのです。共通していたのは、「住んでいる

「見えない、知らない価値に気付かせて欲しい」し、「今ある見えないものを可視化する」のがいいのではないかという意見がありました。まちのいかがわしさも 必要というまさにまちの「スパイス」につながる意見も……。 踏み込んで、じゃあ、どんな手法でやったら良いのか? という問いかけには、「まち並みや歴史、自然など今あるもの、見えるものを編集する」ことと、あわせて、

#### 職員勉強会から

り組みに、ボランティアとして協力したいという職員も現れ、今後に光明が見えてきました。本当は、秋田公立美術大学の「AKIBI Plus」や、障がい者ア 際に、市の考え方として皆さんにご説明するベースとなっています。また、「夜楽」、シンポジウム、そして部活プロジェクトといった今年度(平成29年度)の取 どアートによる活動実例をそれぞれの担当職員から紹介し合うなど、今すでに日常で行われているアー を深めることができれば、 以上が、職員勉強会でまとめた「日常と超日常」です。内容の詰まった職員勉強会。この議論のまとめは、今年度(平成29年度)の「夜楽」やシンポジウムの よりよかったと思います。平成30年度も、熱量のある職員を巻き込んでいけるよう、こうした機会を続けたいと思います。 トを切り口とした取り組みを知り、超日常が生み出すもの トな

#### 日常と超日常

感」「日常から離れた時の新たな発見・成長」のように、 「日常と超日常」「暮らしの中の豊かさ」。その意味は一人ひとり違います。でも「豊かさ」という意識の根底にあるのは、 自分の感性や精神のあり方なのではないでしょうか。 「日常(生活)における充実感・満足

常」を知ること。 人、活動、今の秋田のまちをかたちづくる様々なレイヤー(層)を感じる機会をつくり、「日

ダーを超越することで見えてくるものがあります。二つの「日常」と「超日常」の間には、豊かで混沌 き、市民一人ひとりがどんなメッセージを受け取り、どんな反応をするのか。そうした切り口としてアー とした領域があるのです。日常(生活空間)に異物を放り込んで、想像していなかった刺激が生じたと ようにしたいのです。そして「日常」と「超日常」は、単純な二項対立ではなく、その境界線に立ち、ボ まちや社会を構成する大勢の「人」が主役となって動いた結果、多様なアートがつくり上げられている トに触れ、私達が日常(生活空間)について考え直す機会をつくることが大事だと考えます。 もちろん、「超日常」を知るための切り口は様々なものがあります。このプロジェクトが実現したときに、 ここに住む私達が一緒になって、一人ひとりが持っている感性や才能を発揮できる時間をつくり、 そして、アートを切り口に日常を見る視点を変え、「超日常」に気付くこと。 10年後に、まちとしての創造力が伸び、豊かさを感じられるまちになっていれば良いと思います。

の姿を描いていくことが、これからの時代には必要なのだと思います。 いる場所のこと、そういった物事に意識を向ける機会や場所をつくる。私達が普段触れている日常の した観点から、自分が暮らすまちの成り立ちだけでなく、自分が生まれ育った時代のこと、自分が今 まちには、場所と移動という「空間軸」と、過去・現在・未来という「時間軸」があります。こう もっと深くて遠い世界や時間があるということを多くの人と共有し、住み続けるまちの将来

が入るとまた違った意見が飛び出したり、職場・年代を超えた新たなつながりができたりという、 員勉強会でした。参加した職員からの感想レポートもどうぞご覧ください もちろん、終わってからは秋田の文化(しきたり?)として欠かせない懇親会がありました。 お酒 職



# 「秋田市職員勉強会レポート」(職員T・K : 30代男性

置づけや、他の計画との整合性を確認しながら、芸術文化やまちづくりの考え方を共有。 その後、「あきたし豊醸化プロジェクト」として参加職員と意見交換 するため、プロジェクトを検討することとなったきっかけ、昨年度(平成28年度)行ったシンポジウムや「夜学」第0回の振り返りを聞きました。 した。参加者は33人。講師は齋藤企画調整課長。最初に秋田市の政策の一つ、「芸術・文化によるまちおこし」について説明があり、 平成29年6月2日 (金)、午後6時から7時30分まで中央市民サー -ビスセンター -において、「あきたし豊醸化プロジェクト」を考える職員勉強会が開催されま 市の総合計画における位

分が暮らすまちの豊かさとは?」「本当に自分は秋田の日常を知っているのか?」といった疑問も持ったのではないでしょうか。 この段階で参加者のみなさんも「なぜ豊醸化プロジェクトをやるのか?」ということを考え、それぞれ想いを巡らせたのではないでしょうか。その一方で、「自

れをもとに意見交換です。 成29年度は「日常」をしっかり見つめ、知ることがベースであり、その上で「超日常」を表現する部分にアートが関われるのでは? 当日の意見交換のたたき台として、「日常と超日常」というイメ ージが示されました。平成28年度は芸術・ア トという言葉にとらわれすぎたことから、 としました。後半は、 ح

てるものでした。これらは、現在秋田市で働く私達大人(今回は公務員)が感じている秋田市の魅力だと思うので、これを次世代にどのように伝えていくかを 考える必要もあるのではと感じました。 るキーワード(食材=産地の近さ、体感、季節、自然、夕日、場所の変化、まち歩き=発見、まちの規模=距離感、なべっこ=ローカルイベント)は共感が持 ファシリテーショングラフィックで参加者の意見を書き出しながら、意見交換となりました。参加した皆さんの日常における「暮らし」や「豊かさ」と感じ

楽しいまちは、日常のすぐ裏側に超日常があるのでは、とも感じました。 自分は、芸術はホワイトボード(模造紙)のはるか外にあるものでは? イントしたり、みんなで食事できるようにする)や Naked Bike Ride(車依存社会に抗議するために裸で自転車に乗る、裸で自転車に乗って走る)などを見ると、 また、日常と超日常をつなぐ過程を、暮らし(Life)→文化 (Culture)→芸術(Art)と仮置きして、どんな変化があると過程が変わるのか、意見交換をしました。 という気もしました。逆に、例えばポートランドの City Repair(道路の交差点をペ

どんなまちにするためのプロジェクトなのか。参加者それぞれが様々な想いを抱いたのではと思いました。 勉強会を終え、少し落ち着いてから考えると、まだ、「なぜ豊醸化プロジェクト」をやるのか? という疑問がありました。受益者は誰なのか(役所っぽい)。 次の機会がまた楽しみです。

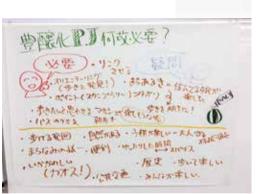
013

## 一職員勉強会からの学び~「あきたを学ぶ。あきたで創る。」

職員勉強会を終えて、次の段階として私達は、「日常」と「超日常」の二つの面を、なりました。

先を考えました。 たを考えました。 たを考えました。 たで割る。」は、(広義の)アートが普段、自分達がいる場所、時代を批評的に振りきたで創る。」は、(広義の)アートが普段、自分達がいる場所、時代を批評的に振りある機会を与えてくれることから、一人ひとりがアートに触れ、見えないものを見る、返る機会を与えてくれることから、一人ひとりがアートに触れ、見えないものを見る、返る機会を与えてくれることがら、一人ひとりがアートに触れ、見えないものを見る、返る機会を与えてくれることができなくなることがある、と感じることがあります。「超日ではなるシンポジウムでは、「辺縁と創造のネットワーク」をテーマに、地域芸術祭のと連なるシンポジウムでは、「辺縁と創造のネットワーク」をテーマに、地域芸術祭のと連なるシンポジウムでは、「辺縁と創造のネットワーク」をテーマに、地域芸術祭のと連なるシンポジウムでは、「辺縁と創造のネットワーク」をテーマに、地域芸術祭のと連なるシンポジウムでは、「辺縁と創造のネットワーク」をテーマに、地域芸術祭のと連なるシンポジウムでは、「辺縁と創造のネットワーク」をテーマに、地域芸術祭のと連なるシンポジウムでは、「辺縁と創造のネットワーク」をテーマに、地域芸術祭のと連なるシンポジウムでは、「辺縁と関係の表情になった。」

代、未来への気付きを積み上げる機会になったと感じています。う一つの世界や選択肢を、私達が暮らしの中に垣間見えるようにすることで、次の時その意味で職員勉強会は、日常の中にある豊かさや深さを学び、目の前にはないも









#### 「夜楽」 《秋田のリアル》 から未来を考える対話シリー

プロジェクトにより、何らかの刺激、 「日常」と異なる視点を提示する。「超日常」という気付きを得て、もう一つの道を指すことで、行動や発想を自由にしたい。

がないものを出会わせる回路をつくる、という面が少なからずあると思います。 例えば、私達は、音楽や美術を通して、 普段「聴こえないものを聴いたり、見えないものを見る」ことができると思います。 他都市での地域芸術祭も、 出会うは

これからの新しいまちづくりや場所づくりに生かしていくか、という視点で、コーディネーターの石倉さんから三つのテーマを提案していただきました。 そうした中、「夜楽」では、これまでの取り組みを通して、歴史や文化、まち並み、風景など、先人が積み上げてきたものを、私達の普段の生活とどのように結びつけ、

- ・「もう一つの場所」をつくる
- ・「食と自然」をつなぐ
- 「土地の記憶」を継承する

深く知ることで新たに見えてくるものを探ることができたと感じています。ゲストの方々のお話から私達(担当職員)が受け止めたキーワードやメッセージを「ノー ト」としてまとめてみました。「ドキュメント」とあわせてご覧いただき、今年度の取り組みの意味を感じていただければと思います。 「『夜楽』《秋田のリアル》から未来を考える対話シリーズ」では、いずれのテーマにおいても、興味深い活動をしているゲストの方々をお招きし、秋田の日常を考え、









上から第1回、2回、3回の「夜楽」とシンポジウムの

打ち合わせ。

第 口 もう つの場所」 をつくる

平成29年10月18日 (水) 18時30分~20時30分 エリアなかいち にぎわい交流館AU2階 展示ホール

出演者 田村 氏 (陶芸家)

高橋 希 氏 (写真家・オジフェス主宰)

佐藤 氏(新政酒造 社長)

服部 浩之 氏(インディペンデントキュレ

コーディネーター 石倉 敏明 氏 (人類学者·秋田公立美術大学准教授)

や活動が生まれ、 「場所」。私達が日常的に使う言葉ですが、深く、大事な言葉だと思います。「場所」にはそれぞれ歴史があり、文化があります。その中で芸術など様々な表現 風土と相まって土地の個性が育まれます

をつくっていくのか、と思いを巡らせました。 「場所」とは「人が生きていく空間」。ゲストの方々のお話をうかがって、私達が今いる「場所」は誰がどうつくってきたのか。そしてこれからはどんな「場所」

きます。まちに新たな化学変化をもたらす機会をつくること。そして、そのためにはどんな将来像を見据えて取り組んでいくべきなのかも常に考えていくこと。「場 所」をつくるということに対して、軸足の置き方をしっかりと認識することができた、「夜楽」第1回を振り返ってみます。 私達が取り組むプロジェクトにおいても「場所(私達が住むまち)」の成り立ちや日常を知り、 まちを楽しむ様々な人と活動がつながる「場所」を意識して

### つのジャンルで括れない面白さ

ていて、 友人も少なく、 (のぞみ)さんは、秋田に戻ってきて5年目。その前は東京でカメラマンをやっていました。戻ってきたときは、高校時代までのつながりも<br />
一旦途切れ 仕事もない、 八方ふさがりな状況と感じていたそうです。

と変化していくユニークなテーマ設定ですね。 トを実家が所有する元事務所の建物で展示したのでした。テーマは、 これを打破するために始めたのが「オジフェス(オジモンフェス)」。 1年目(2014年)が「つながる」、2年目が「ひろがる」、3年目は「まじわる」。 20年間過ごした東京を去るとき、お別れの意味を込めて撮った大事な友人達のポ 次々

面白いのは、本当に「場所」づくりをやってきたことです。2年目の会場は、今、秋田市でも人気のスポット「KAMENOCHO STORE」が入居するヤマキウビル1階。 潟上市にある小玉会館。いずれも眠っていた「場所」をまちに開いています。小玉会館は30年使われていなかった小玉醸造さんの宿舎だった建物。 ほ

ぼ仲間だけで改装したそうです。その結果、いずれの建物も、今、使う人が現れているということ。オジフェスの2017年、第4回のテーマは「つきぬける」で、 一つのジャンルがどんどん広がっていて、最後は突き抜けるということで一段落となりました。

れない面白さを持った「場所」をつくり、次につなげています。 --クショップを入れたり、来場者と一緒に作品をつくったり、人を巻き込んで、「場所」をつくって、そこに人を集める。一つのジャンルで括

本当に意識が広い方と感じました。 高橋さん自身もア -ティストなのですが、「場所」をつくるという立場で、マネジメントのノウハウを自然体でやっており、さらにはリトルプレスも編集するなど、

### 境界をまたぐ 磁場をつくる

インディペンデントキュレーターをされています。 服部浩之さんは、 10年ほど美術館のアートセンターで学芸員をしていました。今は、文化施設に所属するのではなく、個人で展覧会やプロジェクトを企画する

その時の人脈が今も続いていて、自分の活動の基盤になっているとのことです。 と考えたのだそうです。結果的に、自分のやっている仕事をちょっと他の視点でこっちに持ってくるみたいな感じで、別の道(回路)をつくるような形になり、 ないか」とか「そういう人達をもっと別の視点で紹介する方法はないか」という視点を持っており、ご自分でも「自分の住んでいる家を開けば良いんじゃないか」 つくったのだそうです。そのきっかけは、 公共施設で働いていると一つの取り組みをやるにはすごく時間が掛かると感じ、自分でアートスペースをつくればいいんじゃないか、ということで「場所」を 当時一緒に仕事をしていたアーティストが「このプロジェクト、今の形ではできないけれど、何か一緒にできる方法は

増えたとのお話には、非常に参考になるものがありました。 芸術祭みたいなことが起こることによって、できていく磁場があることが感じられ、プライベートとパブリックの境界はどこにあるのかなど、気になることが

## 境界を曖昧にする 間口を広くとる

あるということでいろいろな話をお聞きすることができました。例えば「縁側」のように境界が曖昧な「場所」への意識。やっていることは狭くても、 くとることで、外の人を入りやすくするとか、一般人とアーティストの境目をなくすような参加の仕組みとか… 服部さんのつくられた「場所」には、自然に子ども達が立ち寄るようになったそうで、高橋さんのオジフェスと「子どもが遊べる余地、余白」という共通点が 間口を広

するかを考える必要があります。意図や向いている方向さえ合っていれば、コミュニケーションが取れるので、そういった一緒に巻き込まれる「場所」、 そのためには会話をしたり、アイデアを交換したり、コミュニケーションが必要になります。何かやるときは、 相手がいないと成立しないのですが、誰と対話 同じも

のが好きな人を見つける「場所」があったらいいのでは、と感じました。

くかという視点のお話をお聞きできました。 髙橋さん、服部さんのお二人からは、自分のやりたいことを実現するための人の巻き込み方や、 自分自身の生活を開いて、 いかに新しい実験の場をつくってい

## 秋田の磁場 地域の化学変化が見えてくる

高に通われたそうです。田村さんが友人に新政を勧められて「お酒として明らかにおかしい。変な奴、若い子が造っているんだろうな」なんて思っていたところ、 通のバックグラウンドを感じて一緒に飲むようになったそうです。 お父さんから親戚であることを聞いたとのこと。その後、とあるところで顔を合わせる機会があって話したところ、酒の話ではなく音楽の話で盛り上がって、 次にご登場いただいたのは、 田村一(はじめ)さんと佐藤祐輔さん。このお二人は親戚なのだそうです。そして年齢は田村さんが一つ上なものの、

と経営を同時にやれたことで、自分の好きなものをいち早く実現できたということでした。 わからない宇宙的な色合いに惹かれたのだそうです。新政とのコラボレーションで御自分の器と組み合わせたお酒を造るなど、お二人での活動も目が離せません。 そのお酒を造っている佐藤さんは、東京で物書きの仕事をしていて、日本酒という素晴らしいものを誰も知らない、もっと知ってもらわないといけないという 最近は、ご自分の思考の中に「秋田の秋田らしさ」という新しい部分がでてきて、阿仁のカラミという素材を埋め込んだ作品を創っています。できてみなければ 田村さんの作品は、器でもあり、アー お二人に対して、私達が共通して感じたのは、「遊び」と「まじめ」の連続性、そして柔軟に境界をまたいでいく引き出しの多さです ターになって、「土地に縛られない」という視点で他県で創っている作家を秋田で見せる「辺境地展」を開催したり、その活動はつかみどころがありません。 酒造りをしたくて秋田に帰ってきました。戻ってみると実家の会社は経営状況が厳しく、 -トにもなり得る。大きなフィールドの中でいろんな場所を渡り歩いていると思います。音楽と合わせて制作したり、ご自身がキュ 立て直すために経費削減ではなく敢えて投資をして、

めているとのこと。自分の暮らしているまちの問題、 るけれど、江戸時代に仕込みに使った大きなものはつくれないし、大阪のメーカーも木桶づくりをやめてしまう。そこで自分も木桶づくりができないか、と考え始 佐藤さんは、「みんなが嫌がることは、自分にとっては競争相手がいないから面白い」と思うそうです。例えば、秋田は秋田杉の産地で、桶屋は小さい桶はつく これから課題としてやらなければいけないことを遊び心をもってやっていくのがユニークだと思いました。

と文学的なところの両面から、広い意味でのアートを捉えており、 二人の活動の共通点は、土地に根ざしているものをしっかりと見つめながら、もう一方で他の地域とのシャッフルで化学変化を起こしていること。科学的なところ 大きな秋田の磁場というか、大きな地域の化学変化が見えた気がします。広い意味でのアートが、まちにどんな化学変化をもたらすのか考えさせられました。 同じ山を異なるルートで登って頂上で出会うようなイメージを見ることができました。器から酒造

# 「良い加減でこれからの秋田が見える場」をつくりたい

点で、 ゲストの発言を引き出してくださいました。 ゲスト4人でのお話です。 コーディネ・ -ターの石倉さんは、 「秋田という場所でクリエイティブなことをやるにはどんな条件が必要なのか」という視

を覚えながらお聞きしていたそうです。 てきた技術みたいなものを否定するわけではなく、前提としつつもどういうものを疑っていけるかとか、何が生まれるかということをやっていて面白い」と共感 服部さんは、「前提条件を疑うことからスター トするのは、美術やア トがやってきたこと。そういう意味では、田村さん、佐藤さんの実践は、今まで築かれ

想定できない範囲が入ってくることが良いものになる。これからのまちにも、こうした「人による化学変化」があると面白いと感じました。 佐藤さんも「思った通りにできてきたらたちまち飽きてしまうけれど、もしかしてこうなったらという思いが酒造りを進化させてきた」とお話されていました。 田村さんの「最初に想定していたものとは、結果的に違うものができるけれど、それが正解だと思うことがある」という言葉も印象的でした。これに関して、

また、高橋さんは、「服部さんが自分にとってのメイン(仕事)の場所のまわりで自発的に余白をつくることで、自発的に動く人が増えてきて、面白いものになっ 自分も同じ思いでオジフェスに取り組んでいた」ということをお話してくれました。

とお話されていました。「余白」や「隙間」。この言葉は深いですね。 服部さんは、「アートのマイナーなところにも良いところがあって、隙間であるとか、誰もがいいと思わないとか、わからないみたいなことが重要じゃないか」

民の方々も巻き込み、参加できる仕組みだったら面白い」と高橋さん。 た時にどうやって次のステップを考えるか」と服部さん。「無名なひとでも面白く感じられる仕組み」「有名な作家さんばかりではなく、もっと場を求めている市 「いろんなタイプの方がいて、誰かが何か失敗したときに、誰かが違うところで何か新しい視点を引き出したりする、そんなことが起こる場が良い」「何か起こっ

ゲストの皆さんには「秋田での再発見」という共通項がありました。 してきたのだと感じました。服部さんからは、トリエンナーレとかいわなくても、もっとユニークに違う形を考えた方が生産的ではとのご意見もいただきました。 お二人とも、「良い加減な」部分を見つけ、あいまいな何かを実現していく。そして、過程や結果において関わった方々お互いが感謝し合えるプロジェクトに 佐藤さんの「秋田には宝物があるのに、なかなか生かされていない」「帰ってくるとすごいと思うことが実際にある」という言葉に象徴されるように、

ちの将来を見据えたプロジェクトであるべきと痛感しました。秋田にしかないものとか、一度外に出て、 つながる場をつくりたいと思います。 私達も、「芸術祭をやりました。その結果は?」ということを考えれば、「終わった後に何かが始まる」とか「別の方向に展開していく」という、私達が住むま 秋田に戻ってきて発見する何かを見いだしながら、

# |夜楽||第1回「もう一つの場所」をつくる ドキュメント

という言葉で、美術や芸能に関わるイメージを共有できたら、と考えています。 ラックスした雰囲気で語り合っていきたいと思っています。そこで、「学」という言葉に換えて、音楽や能楽で使われている「楽」 を企画いたしました。これから何回か、仕事や学校が終わる夜の時間に、秋田に関するリアルなトピックをとりあげて、 **石倉敏明(以下、石倉):**「≪秋田のリアル≫から未来を考える対話」についてですが、「夜楽」というタイトルでこのシリー 少しリ

場所を失って生活が続けられなくなってしまうということも起こり得るわけです。この場合、場所とは、まちに暮らす人々にとっ ジしていますが、それは単なる無機質な空間ではなくて、歴史や文化が生まれ、記憶が伝えられていくような認識の枠組みのこ も表れてきます。つまり、人間は場所がないと生きられないといってもいいくらい、場所という問題は大事だと思います。 その第1回目が「『もう一つの場所』をつくる」というテーマです。ここでは、場所とは人が生きる具体的な空間のことをイメー 生活の現実そのものです。そして場所の中でこそ、芸術が生まれたり、ユニークなその土地にしかない人々の暮らしの特徴 たとえば、あるまちで暮らしている人が、災害や事故で人や土地とのつながりを失ってしまう時、 自分の居

これから必要な場所をいかにイメージしたり、つくり上げていけばよいのか、どのように場所づくりをしていけるのかという話 を深めていきたいと思っています。 までどういう場所づくりをしてきたのか、という具体例を紹介していただきます。お二人の話から、与えられた場所ではなく、 今日は、実際に「場所づくり」を実践されているゲストをお呼びしました。初めに高橋希さんと服部浩之さんのお二人に、 今

ていらっしゃいます。 スティバルを企画・運営したり、「ユカリロ」という出版とウェブ発信のプロジェクトを続けたり、 髙橋さんは「オジモンカメラ」という屋号で、カメラマンとして活動をされているほか、「オジフェス」というユニークな地域フェ とにかく多彩な活動を続け

**高橋希(以下、高橋):**私は秋田に戻ってきて5年目です。大学進学で上京して、 い。家族も一緒に来たんですけれども、半年くらいは八方ふさがりで、この状況を打破しようと思ってはじめたのが、 メラマンだったので、秋田に戻っても同じことをしようと思っていたのですが、友達とのつながりは途切れていたし、 20年間東京にいました。東京ではフリ オジフェ 一のカ

思ったのが、オジフェスをやろうと決心したきっかけです。実家が所有する小さな空き家でやろうと、自分達で改造したんです。 イベントは3週間くらいやりましたが、来場者自身に正の字を書いてもらうことで、何人来たかを確認していました。また、 20年過ごした東京から引っ越すときに、大事な友人100人のポートレートを撮ってきました。秋田でこれを展示をしたいと



石倉 敏明/人類学者

CD +神話集)』『Lexicon 現代人類学』など。 CD +神話集)』『Lexicon 現代人類学』など。 CD +神話集)』『Lexicon 現代人類学』など。 に野生の科学研究所の新・包括図説』 に野生の科学研究所の新・包括図説』 に野生の科学研究所の新・包括図説』 に野生の科学研究所の新・包括図説』

白いと思ったら投げ銭をしてくださいとお願いして、額じゃなく数で、毎日投げ銭日記を公開しました。

**石倉**:入場料はなかったんですか?

潟上市にある小玉醸造さんが所有する、30年間使われていなかった小玉会館に場所を移し、改装はほぼ全て仲間達で行いました。 **高橋:2回目までは無料です。2年目は秋田の人や風景を撮った作品を展示して「ひろがる」というテーマで開催しました。こ** のときは前年同様、広面と、現在は「KAMENOCHO STORE」さんが入ってるヤマキウビルをお借りして会場にしました。3年目は、

**石倉:**あの時は改装工事から会場の掃除まで、本当にあらゆる準備を自分達でやっていらっしゃいましたよね。

**石倉:実際にオジフェスに参加してみると、地域の美術作家・工芸作家の作品展示があったり、カフェスペースや出店があった** 一感と、作品展示に対する配慮やセンスも感じました。 り、子どもが遊べるスペースがあったり、かなり「ごった煮」のイベントだということを感じました。それなのに、 いただいて、来場者の方と一緒に作品をつくり上げてもらったり。ただ、オジフェスは4回目でいったん区切ろうと考えています。 **高橋:**床が腐っていたので、畳を捨てて床板をはがし、 参加アーティストのギャラリー ークを行ったり、 根太(ねだ)を組みなおすところから工事しました。 陶芸家の田村一さんと安藤郁子さんに公開ワークショップをやって 4回目のオジフェ 不思議な統

「つながる」、2年目が「ひろがる」、3年目は? と思います。高橋さんはアーティストでもありますが、もっと意識が広いんですね。場所をつくるという立場で、 ノウハウをたくさん持っていて、ひとつのジャンルで括れない面白さがあります。各年度のテーマもユニークで、2014年が たとえば地域芸術祭と呼ばれるプロジェクトでは、アーティストの視点と「祭り」の視点がちぐはぐになってしまう例も多い 運営に関わる

高橋:「まじわる」、そして最後の4年目が「つきぬける」です。

落したところですが、もちろん普段は撮影の仕事を続けていらっしゃると思います。 のジャンルがどんどん広がっていって、最後は突き抜けてしまうという、壮大なプロジェクトだったわけですね。 **石倉:**最初は写真展示からはじまったプロジェクトが、 4年間で思いもよらない複合的なフェスティバルに発展していく。 。それがひと段していく。一つ

編集部を立ち上げて、今現在3冊ほど出版しています。 ています。やりたい場所がなければつくればいいのと同様に、やりたい雑誌をつくろうということで、 高橋:そうですね。そのほか、同時期に秋田に来た、編集者の三谷葵(あおい)さんと一緒に、ユカリロ編集部という活動もし 自分達で出版社というか

を見張るものがあります。 石倉:ありがとうございます。 自分のやりたいことを本当に実現してしまう高橋さんのパワーとアイデアの豊富さ、 実行力は

デントキュレーターです。とても刺激的なアイデアとユニークな展示経験をお持ちなので、ぜひご紹介ください。 さて、続いてご紹介する服部浩之さんは、2017年の春に、秋田公立美術大学の大学院に赴任されたばかりのインディペン



実施)や、〈普通の人の普通の暮ら 家として活動しながら、インディペンデン 『yukariro』を仲間とともに制作している。 そむ面白さ〉をテーマとしたリ 後、写真家・河村悦生氏に師事し独立。 高橋 希/写真家・オジフェス主宰 たが、2013年4月に秋田へ戻る。写真 ランスのカメラマンとして活動してい 4年秋田市生まれ。明治大学卒業 「オジフェス」(4回

服部浩之(以下、服部):僕は10年くらいアー クトなどのディレクションやキュレーションをしています。施設に所属せず、 トセンターで学芸員をしていましたが、今は個人でいろんな展覧会とか、プロジェ インディペンデントキュレーターとして活動して

デンスといって、ある地域にアーティストが滞在して作品をつくり発表するという創作と交流活動の企画運営をやっていました。 者に開いていきました。 すが、できないときにフラストレーションを感じてしまい、 公共施設などでなにかやるには、 学生の頃は建築設計の勉強をしていましたが、縁があって今は現代美術の仕事をしています。主にアーティスト・ すごく時間がかかることが多いんです。若い頃は、思いついたことをパッとやりたくなるんで 自分でアー トスペースみたいなものをつくっちゃおうと、

**石倉:**その活動は公立の施設で働きながら、 同時にやっていたんですか?

ていて、 **服部:そうです。公立の文化施設に対して窮屈さを感じていましたが、一緒に仕事していたアーティストが面白** とにしました。 「このプロジェクト、 この形じゃできないけど、 ほかにできる方法はないかな」とか考え、 住んでいる家を開放するこ い考え方を持っ

をつなげることは、 になったり、アーティストと飲み会をするようになりました。 美術の仕事をしている友人と家をシェアしていて、とてもオープンな空間でした。近所の子ども達が縁側から入ってくるよう 視点を変えると、様々な資源や能力を解体し改めて組み立てることで、 公共のアートセンターでの仕事とプライベー 別の道 (回路) を生み出すことでも トな場で起こること

ろうとか、今ある資源をどうやったら別の方法で活用できるんだろうとか、そういうことを考えるきっかけをこの場所で培いま 考え方として、予算がないからやらないとか、場所がないからできないではなくて、その時、その状況でできることはなんだ

石倉:そうすると、 ある意味ではパブリックな仕事の領域と、 自分自身の生活というプライベー トな領域が混ざっていくことに

暮らしている意識と特別な空間の境界をまたぐことをやられていたのかな、 服部:そうですね。 **石倉:**お祭りのような要素もあって日常とアートの境界だったり、日常と非日常の境界であったり、「ハレとケ」とか、普通に プライベー トとパブリックの境界を曖昧にすることで、 という印象を持ちました。ただ、高橋さんも服部さ 可能性を拡張しようとしてたんだと思います

**高橋:**私の場合は展示を通して秋田でまだ出会ってない、趣味が同じ人、感覚が似ている人と出会いたいというシンプルな動機 場所づくりの最初の動機がすごくシンプルですよね。

がありましたが、 知り合いだからオジフェスに出てもらうことは極力しないようにし、 気になる方には面識がなくても連絡をし



SEA」(マレーシア国立美術館、APW ほか 県美術館ほか/16年)、「ESCAPE from the 和田市現代美術館、奥入瀬地域/13年)、 近年の企画に、「十和田奥入瀬芸術祭」(十 早稲田大学大学院修了(建築学)。09年 「あいちトリエンナ 会やプロジェクト、 [ACAC] 学芸員。アジア圏を中 服部 浩之/インディペンデン -16年青森公立大学国際芸術センタ 978年愛知県生ま ーレ 2016」(愛知 れ。 2006 展覧

うのが、その理由です。またオジフェスは、巻き込まれ、巻き込んでいくのが特徴となっています せんか?」という声がけをしました。趣味が似ている人とか、やりたいことが似ている人とシンプルにつながっていきたいとい て出店依頼するやり方を続けてきました。参加してもらいたいアーティストには、「あなたの作品が素敵なので一緒に展示しま

**石倉**:場所づくりの形としての巻き込み型ですね。でもそれは一方的ではなく、高橋さんが巻き込んだというよりも、今度はこっ ちが別のプロジェクトをやりたいから、 互いに新しい実践の文法をつくっていく、 というような相互的なプロセスになっている

もうひとつ、子どもがたくさんいる、というのも特徴的でしたね。

**高橋:**子どもが集まってきて、 ターが多かったですね 見守る大人が増えてきて、 違う日にもまた来ちゃったみたいな。 振り返るとオジフェスはリピ

**服部:**僕は子どもに向けて家を開いていたわけではありません。子どもや猫は不思議に鋭い空間認識能力みたいなものをもって みたいな感じで! 心地よい場所に自然とひきつけられるんですね。川遊びしていたら、気持ちよさそうな縁側を発見したから入っちゃおう そのうち一緒にワークショップもやり始めていました。

う認知マップを持っていたり、 **石倉:**子どもは自然発生的に自分で遊びを開発したり、出入りしたり、自分達で発明して何かやったりしますね。大人とはちが 想像力で何もない場所をつくりかえたりできる。

というイベントです。 とで、外の人が入りやすくなる。境目をなくしたいということで、毎年オジフェスの最終日にやっていたのが「0円マー **高橋:**境界を曖昧にするというのは私も重要視しています。場所とか受け入れ態勢とか、いつでもどうぞっていう感じにするこ -ケット」

換できる市場、ということです **石倉:**0円マ ケットというのは、 ą なにか物を出品するときに、 対価としてお金ではなくて、 モノやパフォ ーマンスによって交

高橋:そうです。 気軽に喋れる場があればいいなと思い、0円マーケットを企画しました。 苦しくて。そこで救われたのが、個人商店の人と喋ることでした。その繰り返しがすごく気分転換になった経験から、 東京の葛飾区に引っ越したんですけど、暮らし始めた当初は友達がいないし、それまで住んでいた世田谷区と文化が違うために 一芸交換でも物々交換でもいいけれど、 やりとりから話すきっかけが生まれるじゃないですか 私は出産後に 秋田でも

ンを深める、という側面があると思うんですけど、その辺りはどうですか? いく仕組みが残っていますね。服部さんの仕事にとっても、言葉やアイディアを交換したり、いろんな人間とのコミュニケーシ **石倉:**大型の商業施設とかチェーン店では、 お金だけの交換になってしまいがちですが、 個人商店には一人ひとりが対話をして

服部:大きな作品とか展覧会は一人じゃできないもので、 いろんな職能の人と関わりながらつくりあげられます。僕は何かやる



「0円マーケットオシラック最終日々へこん

ズレが認識できてさえいれば、 向けている相手とやってることがずれるとすごく不幸なことになってしまいます。芸術祭では多数のボランティアの方から外国 人のアーティストまで様々な人と対話をするわけですが、お互いの見ている方向が共通していたり、たとえそれがズレていても 対象は誰だろうとか、誰に向けてるんだろうというのがすごく気になります。展示って相手がいないと成立しませんが、 コミュニケーションは大抵の人と取れるような気がします。

りって立場が溶けてなにか混ざったり、巻き込まれていったり、 石倉:パブリッ は、地域の人とア それは個々の作品の質や鑑賞体験にも直結しますね。 クな仕事って、役職とか立場から話をしたり、 トとアーティストが一緒に巻き込まれていく場所をつくるということが芸術祭の企画にとっては必須だと思 立場同士でなにかつくったりすることが多いと思いますが、 一緒に盛り上がり、盛り下がりの連続ですね。そういう意味で お祭

て思っていました。 のは結構あるんですけど、年齢を超えた趣味のつながりなどは見つけにくい。そういう共通項を見つける場所があったらいいなっ 高橋:18歳まで秋田にいたので、 昔のつながりがそこかしこに点在しています。 例えば中学、 高校、 生まれ年とか。 そう いうも

でどうでしょうか。 くる予算がない、ということが問題になっています。何かやっただけ、やりっぱなしではなくて、 **石倉:**高橋さんは活動の記録というか、あとに残る形というのは考えています か? 秋田では、 公立の美術館に記録や図録をつ その後に続けるっていう意味

三谷に「1万字インタビューしてほしい」とお願いして取材してもらった記事などを集めて。手づくりすることでオジフェスら しさが増すかなと思っています **高橋:オジフェスをやるに至った経緯や全活動を記録した手づくりの本をつくろうかなと思っています。** ユカリロの同僚である

**石倉:**それは楽しみですね。服部さんはどうですか? 今までの活動をどのようにして後に残していくか考えていらっしゃいま

テキストでは、作品や展示に対する距離や認識のあり方も変わってきますね。 石倉:レビュー 会を自分が言葉にすることもあるし、 服部:写真とか映像より、 しか分からないわけですが、当事者の意見や想いだけではなく、客観的な他者の視点で見えてくるものも重要な気がしています。 -は大事なポイントだと思います。 残るものと残らないものの関係を考えるという側面もありそうです。 もう少し手掛かりの少ないと思われる言葉で残るものは面白いと思っています。 別の人にレビューみたいな形で書いてもらって残すこともあります。 たとえば作家が自分で展覧会のために書くテキストと、第三者が批評的に書く キュレーターの仕事は、そうしたいろんな人の言 何が残るかは後世に 例えば関わった展覧

**服部:**何も残らないことも重要だと思っていて、 かたちに残らない価値をどう考えていくのかを最近特に考えてます

**石倉:**お二人の話から、とてもおもしろい論点がいくつも出てきました。





025

てくると思いますが、モノを創るという作者の立場からはどんなふうに意識されているのでしょうか? ティストとしての作品を発表されていますね。工芸と現代美術では、それこそ展示場所やオーディエンス、批評のあり方も変わっ さて、次に登壇します田村一さんは陶芸家で、器を創ってますが、同時にかみこあにプロジェクトや秋田県立美術館でも、アー

田村一 (以下、田村):僕の中では、器とオブジェは同じ感覚で創っていて、そんなに分けてはいません。器を創るにしても になるかの違いだと思っています。 単純な曲線を連ねていくという感覚がどこかにあって、それを複雑にするか単純にするかで、器になるのかアーティスティック

示活動は日本全国、そしてアジアやヨーロッパのギャラリー うな活動をされてますね。 石倉:田村さんは、 漫画の「へうげもの」のプロジェクトに関わったりという、サブカルチャーとクラフト、 他で見たことがないタイプの作家です。 -などにも広がっています。秋田でも「辺境地展」という展覧会をやっ 太平山の麓で工房を営み、 自分の物づくりの場所を持ちながら、 アートの境界をまたいでいくよ

田村:自分の活動に区別はないんです。やりたいか、やりたくないかを考えてふるいにかけ、やりたいんだったらやる、ちょっ となっていうんだったらやらないっていうだけですね。

**石倉:**意識としてはモードを変えたり、自分の中で立場を変えるってことではなく、同じような大きなフィールドのひとつとし いろんな場所を渡り歩いているという印象でしょうか?

のになってしまいます。それに関しての思いだったり、思いをどう入れるかで作家の違いが出たり、作家の面白みだったりする 田村:そうですね。器を創る、アーティスティックなものを創るのは、意識も手間も違います。例えば、作家は創ったものがど う使われるかに積極的に関われないと思っていて、それが自分の手もとにある期間は短いし、先方に渡ってしまえば使い手のも

田村:ジンギスカン鍋やご飯が炊ける鍋、焙烙(ほうろく)とかを創るのは僕が料理好きのためですが、きっかけはかやき鍋です。 化と深くつながっていますよね? を磨いたり、というインターローカルな地域性も感じますが、他方で日本酒用の酒器や「かやき鍋」などの作品は、 **石倉**:田村さんの活動でもうひとつ面白いな、と思うのが、土地との関係のつくり方です。天草の陶土を使ったり、 日本各地の料理が、場所性として作品に映し込まれているように感じられます。 秋田の食文

センチのホタテの貝殻って見たことないけど、見立てというのは陶芸ですごく大事なんで、じゃあホタテっぽいやつ創ろうとな 今のホタテの殻なんか小せくて、 下浜にいる祖父が、 形は磁器のモードで創ってみようとしてもできないんです。 り、楽しいので自分の器にもフィードバックするんだけど、 「一(はじめ)は知らねど思うども、昔はよー、 かやぎ食った気さねがら、おめまずでっけぐ貝殻創ればいいねが」って言われたんです 耐熱調理器具の形って、僕の器の形とまるっきり違うんです。あの 30センチくらいのホタテあって、かやぎの鍋さ使ったんだ。



田村 一/陶芸家 入学。 3年秋田市生まれ。 美術研究会陶芸部にて

益子へ。11年秋田市仁別に戻る 触れる。2000年大学院修了後、自作 を世に問い、陶芸家になる。02年縁を辿り 「陶芸」に

地展」や秋田公立美術大学のギャラリーでの展覧会に展開していると思います。 演するような、音楽とのコラボレーションも精力的に行っています。誰もやっていない実験的なクラフト、アート、音楽をやっ てるという意味では、秋田の地域性を背負ったワン・アンド・オンリーだと思います。そういう試みが若手作家を集めた「辺境 **石倉**:田村さんは他にも轆轤(ろくろ)の音をサンプリングして、その音をエフェクターにつないで音響体験とともに制作を実

ういったことから今のスタイルとか、他にないような活動をされるようになったのかお聞きしたいですね 続いての佐藤祐輔さんは、新政酒造の社長さんで、日本酒をはじめ、秋田の発酵食品文化を発信するお一人でもあります。ど

事をしていて、雑誌の記事書いたり、 佐藤): 基本的には酒造りをやりたくて、2007年に東京から秋田に帰ってきました。 自分の本を編集したり、 本をつくったりをかなり長くやってました。 東京では物書きの仕

物書きをしてるときの意識と、お酒を造ろうと思って帰られてからの活動というのは、どうつながっていますか。

刊SPA」や「月刊サイゾー」などに芸能記事書いたりとか。漫画の原作なんかも大事な副収入でしたね。 者問題とか、悪徳企業とか、格差問題とか、 佐藤:ほとんど同じなんですよね。僕がかなり前にやってた仕事は、食品添加物とかに関する記事がメインでした。 な、ちょっと硬目な雑誌だったりしましたね。でも、それだけじゃ食べていけないから、すごいゆるい仕事もいっぱいあって。「週 結構硬い記事ばっかりですね。一番収益の柱になっていたのは「週刊朝日」のよう ほかに消費

**石倉**: 意外ですね。芸能記事も書いていたんですね。

日本酒に対する誤解を解きたいというのは昔からありましたね。酒造りの前にそういう方向性があって、実家に帰って蓋開けて ですが、酒造りしたくなったのも、日本酒という素晴らしいものをもっと知ってもらいたいと。私は純米酒が好きなんですけど、 で驚きました。懐かしいですね。なんでもやるから、お前これやってこいみたいな。そういうのがバックグラウンドにあったん みたら赤字が結構ひどくて、経営もやらなきゃいけなくなったんですけど。 -ね。政治記事も多かったです。総裁選の時に、谷垣さんの実家に取材に行ってみると、廃業寸前の酒蔵だったの

佐藤:うまくいっていない会社というのは、追い込まれて経費削減とかに走って、ヒット商品とかができなくなります。どうせ ころに専念しそうなものですけど、そうではなかったっていうことでしょうか? **石倉:**なるほど。ただ、そういう状況の会社を立て直そうとすれば、まずは経費削減とか、規模の縮小に走ってしまいそうです 普通だったら立て直すことに追われて、遊び心を忘れたり、一切のものを自分に与えることは我慢して、 経営を立て直すと

潰れるからいいやってことで、 どんどん銀行から金借りようと思いました。無理にその場で投資しても、 命まではとられないか

石倉: 大胆な作戦です

佐藤:まぁ独立志向が強くてほぼフリーランスのように生きてきてたから、会社が潰れても怖くはないというか、 一人でも生き



に新政酒造(株)の代表取締役社長となり 政酒造(株)に入社。10年には秋田の蔵元 酒に目覚める。2007年に家業である新 学文学部卒業後、編集プロダクション、ウェ 本酒の新たな可能性の追求を始める。12年 圧倒的な完成度と存在感に心打たれ、 ブ新聞社を経てフリ 佐藤 祐輔/新政酒造 社長 ・4年秋田市生まれ。9年に東京大 とともに「NEXT5」を結成し、 島の居酒屋で飲んだ日本酒の -ライタ

それは避けなくてはならないということはわかっていました。ただ手をこまねいているわけにもいかない。それより、 績が悪かったからですから。 ていけなくもないんです。もちろん、倒産なんてことになったら、社員にとっては大問題ではあります。彼らの生活のためにも 結果論ですが、実家が業績の良い会社でなくてよかったです。私が大手を振って好きなことをできたのは、まずは会社の業 リスクを背負って新しいことにトライすべきだろうと思いました。その上で、潰れたらしょうもないわけで

ところと、遊び心というのはどういうふうに連結しているんですか。 **石倉:**僕から見ると、佐藤さんの魅力というのは、遊び心とストイックなところが連続してるところですね。農業もやられてい お米をつくる環境の問題として、 地域の稲作の継承についても考えていらっしゃると思うんですけど、 そういった真面目な

がやらなきゃいけないわけだし。むしろ僕は、人があんまり見ないようなことに頭を突っ込んでみるタイプかもしれません。だ 佐藤:だいたいみんな嫌がることって、僕にしてみると、かえって競争相手がいないから面白いんじゃないかって思っ から誰かがやめると、じゃあ僕やるみたいなことを急に思いますしね。 んですよ。農業なんかも、みんな儲からないって悲観的だけど、だからといって世の中からなくなるわけでもないし、結局誰か たりする

構大変なことで、 だけど、ビジネスベースに乗らないから無理、難しいって言われました。 六尺桶っていう、 で、どこの蔵も戦後からまったく使っていません。けれども、うちの蔵は木桶が大好きなんですよ。だから木桶をどっさり買って、 しまいました。2020年にさっき言った大阪の木桶メーカーが、木桶づくりをやめちゃうことになったんです。これって、結 いずれ木桶だけの酒造りをしようと思ってるんです。ちなみに、こうした木桶は大阪のメーカーがつくってくれているんです。 秋田は秋田杉の産地ですから、木材加工業もある程度残っているんですけど。秋田の桶屋さんは、小さな樽はつくるんだけど、 取り組みを始めているのは、農業。あと、 酒造りの道具なんかもつくってくれるんですね。そこで先日、ちょっと説得して、でっかいのつくってよって話したん 江戸時代から連綿と続いてた、 でっかい、 江戸時代に仕込みに使ってたようなやつはつくれないみたいです。能代の製樽屋さんが、 日本酒とか味噌とか醤油とか作る木の桶がこの世からなくなっちゃうというこ 木桶づくりです。メンテナンスは大変だし、毎回味が変わるし、 でも、誰かがつくらなければならない事態が発生して 樽ばかり

**石倉:**僕は美術大学の教員や学生も、そういう「かっこよさ」に目覚めてほしいなあ、 と思う時があります

もっと農業とか。

**石倉**:実は美大で一番欠けているのはそこですね。農業であり、「食べもの」の問題であり、自分の暮らしている場所の問題であり、 藤さんのユニークさでもあると思うんですけど、田村さんもそういう意味で、切実な北の環境の中で、器づくりをやっていますね。 植物や動物、素材になっている自然といった問題。僕はそういう根本的な問題に対して、遊び心を持って取り組んでいるのが佐



るんですよ、益子でやる意味がないと。 たところで、土地の土を使って、 田村: 秋田に帰る前は、栃木県の益子にいました。益子は陶芸家の濱田庄司(はまだ しょうじ)が来て民芸の里として活動し 僕は天草の土で磁器を創っていたんで、 土地の石を釉薬にして、器を粛々と創る産地です。出会いがあって東京から益子に行ったんで 「益子の土でやらないなんて、何のために益子に来たんだ」、 みたいなこと言われ

石倉:益子スタイルでやりなさい、という。

寒いし、 田村:じゃあ益子の土で1回創ってみるかってやってみたんですけど、僕にはできないんですよね。無理しててもしょうがない ちょっとした出会いがあって、 ので、益子で磁器を創り始めました。益子にいたときから秋田に帰る、帰るって言っていたんですけど、秋田になんで帰るのか、 雪降るし、不便だし。益子は東京に近いし、益子にいたほうが作家としては楽だという話を何人にもされたんですけど、 2 14年の夏に仁別に場所を決めました。

見えるけれども、 **石倉:**仁別は秋田市の中心から見ると少し雪深いし、 力に溢れている場所です。 田村さんにぴったりくる何かがある。 田村さんの作風にぴったり。 駅からは離れている。でも、 不便なエリアでもありますよね。 太平山という聖域とつながっていて、 自分で自分を追い込んでいるようにも 自然の

田村:僕は青白磁という青白い器を創っています。益子にいた頃に、この色ってなんだろうと考えたとき、雪積もった時の色じゃ んってすぐ思ったんですよ。雪って塊になると青く光ることに気付いてしまったら、秋田に帰らなきゃだめだと思って。

「辺境地展」の話をしましょうか。僕がある種キュレーターになり、 よその作家を秋田で見せようという展示を、

**石倉:**「辺境地展」の作家には、器を創る方もいれば、 美術寄りの方もいます ね

田村:自分でテーマを毎回設定して、5回やりました。辺境地展という名前は、その土地で産したものを使って作品をとらなきゃ て。だからその産地に対する言葉として「辺境地」って言葉を選んだんです。第1回の時は、 いけないっていう考えに対して、アンチの答えを返したかったんです。土地に縛られてない作家を秋田に集めてやってみようっ 創ってるジャンルもバラバラ。 その時はもうほんとに産地の端でやってる人達を集めるというのがテーマでし 千葉と鹿児島と大阪で創ってる子

作品に向き合う姿勢や意識の持ち方として、 石倉:今ではグループというよりも「アー ト・コレクティブ」という言い方が多くなりましたが、 「辺境地」というコンセプトが新鮮でした。 単なる仲良し集団ではなく、

田村:作家をそこに絞ったんで、 作品としては統一感がないんです。 大きいけどすごく緻密な作品を作る方です。 でかいオブジェを作ってる女の子や、 2回目は秋田県出身の世界的な作家の今野朋子さんを紹介したくて。今野さんは本荘 朋子さんと話してたら、 釉薬ががきれいな子だったり、 「秋田でやりたいんだよねー」という意思表示を 造形が面白い子であった



されるんで、じゃあ俺やりますって、朋子さんと合わせていい作家という考えで展開しました。

例えば、ここでやりたいと言うと、「ごめんねっ、隣のギャラリーで俺やってるからできないんだよ」、そういう関係ができるん 秋田がいいのは陶芸のギャラリ **−があんまりないことです。東京とかでやると、付き合いのあるギャラリーがあったりして。** 

**石倉:**秋田の人はよく「なんもねぇっ」て言いますけど、ないからこそゼロからスター トできるっていう。

ちょっとダメだろ、 田村:毎年冬にギャラリ それが、どんどん安くなり始めていて、 そのへんなんとかしなきゃ俺ら食えなくなるって思っているんです。 ・のココラボ(ココラボラトリー)で個展をするんですけど、作家物の器って安くないんですよ。 ちょっとやべえなって。 50代の作家がそれに合わせて、 値段を下げてるんですよ。 でも それ

展示環境とかまちの中でどうやって根ざしていくのかは、芸術祭うんぬんよりもっと大きな問題だと思うんです。 石倉:そのあたりのマ しています。そういう意味では秋田だからこそ、この地場を活かしてマーケットをつくったり。美術も工芸もデザインも含めて、 ところで、さっき田村さんが言っていた秋田の雪の色や、僕が感じるのは雲の色。すごくグラデーションがきれいですね。ピ ーケットの問題はとても大事で。村上隆さんなんかも美術だけでなくて、 工芸の値段の問題をすごく気に

田村:秋田の秋田らしさに対して、僕は思考に新しい部分ができてきています。阿仁のカラミという素材があります。 ンクや青っぽい色が入ったり。秋田市は独特の空の美しさがあって、これは秋田の他の地域と微妙に違っている、と思うんです 銅山で銅

をとった残りカスで、鉄とかマンガンの小さな粒をお客さんからいただきました。磁器は真っ白だったり、薄いブルーだったり

プ」をやったんですが、できたものがすごいかっこいいんですよ。これはいいぞっていうことで、自分の作品にも積極的にカラ みたんです。 しますが、そういう成分がちょっとでも入るとシミになって、基本的にNGなんです。でも、ちょっとお皿に埋め込んで焼いて そのタイミングで、オジフェスでワー そしたら宇宙的な、茶色、黒、緑が入ってる妙な色になり、かっこいいぞとなったんです。 - クショップやって欲しいと希さんから連絡があったんで、「カラミ埋め込みワ -クショッ

ら、それが気に入ってもらえ、今回のコラボ作品にカラミを使うことになりました。 ミを使うようになったんです。新政とコラボレーションで僕の器と組み合わせてお酒を造るんですけど、杯を佐藤さんに見せた

**石倉:**なるほど。また新しいコラボレーションが。

ものということで、 田村:その土地でできたものを使うことに対して、疑問に思っていると話をしてたんだけど、 山で……」という話が言えるんですね。そこがすごくうれしい 図らずも秋田のものを使ってるんですよ。これは何って絶対聞かれるんで「カラミと言って、 カラミは阿仁のものだから秋田 、秋田の阿仁銅のたから秋田の

**石倉:その土地に根ざしているものと他の地域の要素がシャッフルされることによって、文化的な化学反応が起こることはある** 



KAMIKOANI プロジェク 出展作品(田村



き物の技術も含むし、もちろん発酵によって物質を変えていくという、物自体を変える技術でもあるわけですよね。 トというのは美術だけではなく、火を使って「トランスミューテイション」(化学反応に変質)を起こす焼

対離れられないと感覚で分かったんですが、それは陶芸も一緒で、作品を創るには窯を焚きますが、夜も何時間かおきに見て りに関わったんです。蔵に泊まって2時間おきに麹の温度を計り、 田村:化学反応が起きるのは、すごい待たなきゃいけないんです。僕が佐藤さんと造ったお酒は、僕も室(むろ)に入って酒造 くことが一緒じゃんって思ったんです。僕としては発見だったんで、今回のお酒は発見っていう「ユリイカ」という名前をつけ それをまた混ぜると麹の感じが違うことから、この期間は絶

たときに、器からお酒造りまで含むような大きな地域の磁場というか、場所性の化学反応みたいなのが見えてくるのではないか 広い意味で人間が何かを行う技術のことをいいます。そういう意味では狭い意味のア **石倉:**「我、発見せり」っていう意味ですね。 英語のアートという言葉は「リベラルアーツ」という概念にも含まれているとおり、 トではなく、広い意味でのア トを考え

初のお二人からは、自分のアイデアを実現するための関係の築き方や、自分の仕事の延長でどのように自分自身の生活をひらき、 び付けられるのではないか、というヒントをいただけました。 とったときに、器とか道具の問題、あるいは秋田の水やお米を使ったお酒造りの技術なんかも広い意味でアートという文脈に結 新しい実験をつくっていくかということをお聞きしました。後半のお話からは狭い意味でのアー ここまでは、秋田の磁場とか、 地域でクリエイティブなことをやるには、どんな条件が必要かという話を聞いてきました。 トを超えて、もっと文脈を広く

だったと思うんですが、服部さんはどのように感じられましたか? 田村さんや佐藤さんのお話は、美術界の話題ではなかったかもしれないけれど、非常にアーティスティック、クリエイティブ

値を持ったりとか、 **服部**:前提条件を疑うところからスタートするというのは、美術とかアートがずっとやっていたことで、だからこそ、新しい価 たな何かを生み出す。それはア てきた技術みたいなものを否定するわけではなく、 違う考え方が出てくるんだと思っています。 -ティストのつくり方と根本的にすごく近いと感じました。 前提として引き受けたうえで、あえてそこに疑問を提示し、 お二人とも、それぞれの視点で実践されていて、今まで築かれ それによって新

端児的と言われるほど大胆な方法論を実践されていると思います。お二人とも、前提を疑うということは意識してやってらっしゃ るんでしょうか? **石倉:**田村さんは陶芸の世界の伝統的な決まりごとをそのまま粛々とやってるわけではなく、佐藤さんもお酒造りの世界では異 それとも結果そうなるのかな。

田村:結果的にはたぶん欲求の方が高いんですよ。こういうのが創りたいというのが高いから、とりあえずやっちゃえって。で きないんだったら、 よく素材との対話みたいなことをいうじゃないですか。 できないときはこうするといいよね、 みたいなのは



解答として出てくる瞬間がポコッとあるんですよ。それって最初に創りたいなと思ったものとは結果的に形は違うんだけど、

**石倉**:佐藤さんにもお聞きしてみたいんですが、 佐藤:思った通りに出てきたらたちまち飽きてしまうけど、 んでしょうか? それとも微生物が関わってくることなので、 自分で思い描いていたお酒と、実際できてくるお酒って最初から一致している もしかしてこうなったら、 ある程度はコントロールできない部分もあるんでしょうか? という思いが酒造りを進化させてきたん

**石倉**:つまり出てくるであろう、 もやもやしたビジョンのようなものがあるんでしょうか? そのあたりを狙っていこうという

酒造りをして出てきたのを飲むと、 がありました。なんでこんなアナログなものが来たのかと、現場も困惑するし、同業者も首をかしげるし、そもそも販売した桶 佐藤:こう来たらこうなるはずだ、 時代の人が普通にたしなんでいた「正統な味」なのだから、理解すべきだし、敬うべきだと思って買いました。結果、 ・も驚いてました。でも自分としては、どういう味の酒ができるのかわからないけど、それはうまいまずい関係なく、 はありますね。例えば、 まったく古臭くなくおいしいじゃないか、 5年前に、 一個120万円以上する木桶をいきなり4個買ったこと ということになって丸く収まったのですが。 実際に 江

いいところだなぁ。 ここまで現代的な味覚でもおいしく感じる酒ができるとは、予想してなかったみたいな。そういう驚きは、やっぱ造っていて、 だから田村さんも陶芸窯に入れたあとの器は予想できないでしょ。

あると思います。 **石倉:**このあたりの「暗黙知」はお酒や器といったジャンルに限らず、ありとあらゆるものづくりの領域に関わってくる問題で 想定内とか想定外という言い方もありますけれど、想定できない範囲が入ってくるっていうことはむしろ喜ば

田村:そうなんです。 結局人によるから。 いいものつくってる人って、手から絶対なんか出てるんですよ。そういう汁が。

は引いて見ているとそうは思わない。 佐藤:現場見てると、 いうか、クリエイティブな人間ばっかりだと絶対回らないですよね。クリエイティブということがものすごく必要かどうか、僕 職人型の人間と、 ア トっぽいというかコンセプト型の人間ってのは分かれます。会社もアーティストと

技術的な確かさは問われなくなる可能性もあります ためには現実的にお金の計算をしなきゃいけないし、来場者数や売り上げのことも心配の種になりそうですけど。 **石倉:**ほんとそうですよね。クリエイティブ至上主義になっちゃうと、 よね。 ね。 そのあたり、 高橋さんにお聞きしてみたいです。 天才的なアイデアを競う発想中心の集団になって、 イベントを開く どうでし

**高橋:**秋田に来た最初の年は、売り上げが70万円しかなかった中でオジフェスを企画しました。2年目までは持ち出し額は10万



その言葉を踏ん張りどころにしてやってきました。 人で賄うのはやばいなと。かなり身銭切ってやってきたんですけど、合言葉として、新聞に全面広告出すよりは安いだろうと(笑)。 くらいでしたが、3年目から小玉会館の修繕費が入ってきたことで持ち出し額の桁がどんどん変わってきて。これはもう自分一

スがあることかもしれません。普通は赤字だったら次は縮小しますけども、 **石倉:**なるほど。皆さんと共通してるのは、やらされていることではなくて、 佐藤さんと一緒で、 基本的に自分がやりたいからやってるとい もっと大きな事業に展開してい うべ

やらないの? 高橋:なぜかつぎ込んじゃうんですよね……。 やって それであれば遠いところでも行きたいと思わせるような内容にしたいと。蓋を開けたら3年目は何千 潟上でやったら、誰も来ないでしょ」と反対されました。近いところなら行くとか、入場無料なら行くとかよく 小玉会館に移転する話をしたときに、ほぼ100パーセントの人から「秋田市で 人か来てくだ

がよみがえっていった。本当にできたときには、心底びっくりしたんです。 **石倉**:小玉会館、僕も最初はあそこが会場になると聞いて、半信半疑だったんです。 ところが、 いろんな人が関わって 「場所」

期に美大で開催した、服部さんと東京芸大の教授のト なりたいと思い、よし、小玉会館直してやるぞと奮起したきっかけになりました。 **高橋:**なんで直せると思っちゃったんだろうって途中でくじけそうになって、後悔がものすごく押し寄せてきました。そんな時 自発的に動く人が増えてきて、より面白いものになるという話をされていたんです。オジフェスもそういう場所に ークを聞きに行ったとき、服部さんが自分にとってメインの場所で余白を

石倉:服部さんは職業柄、 こうやったら実現できるっていう具体的な知識との間で、たくさんの調整やネゴシエーションをすることが、 なければいけない、という場面を数多く経験されているのではないでしょうか? ジとして思い浮かぶのですが、実際のところはどうですか? 現実的なマネージメントや段取りを考える場面と、アーティストのクリエイティブな発想を両立させ やりたいことがあるというアーティストと、 キュレ ーターの仕

思い描いていた理想像と異なるから「失敗」となってしまうことがあります。でも、ほとんどの物事は大体思い通りにはいかな **服部:**僕は基本的にどんぶり勘定なんです。 かりと固めつつも、 くて、想定外の連続だと思います。そんなときに、なるべく柔軟に次の手や方向性を考えていけるように、大枠のフレー りとあらゆる問題が大体起こるんです。がちがちに最初から完成像を描きすぎてしまうと、想定外の事態に対応できなくなって、 細かい部分は状況に応じて変化させていける余白をもつことが大事だと思います。 終わり良ければすべて良しみたいなところがあって。芸術祭とかは、想像できるあ ムはしっ

みんなが愉しみながら創造プロセスに携わることに価値があると考えています 犯人探しや責任追及するよりは、 問題を共有し、一緒に乗り越えていけるチー ムや環境をつくる





高橋さんがやってきたことは、やはりどこか通じている部分があると思うんです。 うのですが、 く言えば「良い加減な部分」。つまり、あいまいな何かを実現していくにあたり、似ているベースがあると思います。 も信頼関係ベースでやってるように見えますね。そして、 **石倉:**キュレーターの中にも管理型の人もいると思うんですけど、服部さんのスタイルは常にアーティストと一緒に、 信頼関係は大事にされているように見えるし、それがあるからこそ、 いかかでしょう? トの領域で服部さんが抱えている問題と、佐藤さん、 ありきたりの結果を越えた挑戦が可能になると思 これは悪く言えば「いいかげんな部分」、よ 田村さん、 たとえば あくまで

気持ちしかないです でも足りていない部分もいっぱいあって。 高橋:手伝ってくださる方はほぼボランティアに近いので、 信頼がないと次につながらないなっていうのは意識していますが、 とにかく信頼関係を大事にして頑張っているつもりですけど、 それ以前に感謝の それ

が続出したり、幸せじゃない人がたくさん出てきてしまうことです。「終わりよければ良し」って言えるかもしれないけど、終わっ 残念なのは、とにかく大きなことをやりましょうということになったはいいけど、終わってからやらなきゃよかったという意見 た後になにか始まらないと、気持ち悪いですよね。別の方に展開していくというのは、そういう信頼関係の証だと思います。 **石倉:**たしかに最後にお互いが感謝しあえるようなプロジェクトじゃないと、次に発展していかない、 田村さんは一人でやってる部分以外に、ギャラリーやユーザーとのつながりがありますよね。佐藤さんは、 という気がします。 職人さんとか酒造

**佐藤:**うちは美大の出身の子が、デザイナーで会社にいるんです。もともとフリーでやってたんですけど、途中からうちに入社 りをやってらっしゃる社員さん、 デザイナ ーとのつきあいもあると思います。

してくれて。 フリーでやってた時から、 紹介でお仕事振ってたんですけど、 誘ったら入ってくれたんですよね。 かなり楽になり

もするんですよ。 なくなってしまったんですけど。今年は非常にひどい天候の年ということもあり、 にも進出しましたし。今年から自分達で無農薬栽培もやり始めましたが……。 酒のあり方なんかを、 手がある程度自由にやってます。僕は営業とかに行ったりするし、結構おいしいもん好きだから色々食べて、食全体の中の日本 のを主にやるようになって。 僕が酒造りを最前線でやってたのって3、4年くらい前までです。仕事しすぎて倒れちゃってから、 あと、さっき言ったように木桶の工房も今度つくらなきゃいけないです。 最近は考えています。会社としてもやることが増えてきました。ただ酒造りするだけじゃなく、 一般的な定番のお酒は、 やっと口うるさく言わないで任せられるような感じになりました。今は若 まあ結果として、 どこに工房つくったらいいかって思ってたり 結構難しかったですね。でも来年は絶対成功 いもち病が出て無農薬栽培では 実験作とかそういったも 農業部門

**石倉:**田んぼはどこにあるんですか?











秋田市河辺の鵜養地区

通いました。車を運転できるまで治ってからは、 ていけなくなり跡取りもおらず、 クできたので、恩返ししたいなという気持ちがすごくあります 公園ってとこがあるんですが、その近くです。仕事やりすぎて倒れて、全く廃人のようになった時、そのあと回復するのによく 田市なんだけど秋田市の人、ほとんど知らないんですよ。ほんと桃源郷みたいに素晴らしいところです。秋田県の真ん中にへそ **佐藤**:自社田は、河辺の奥の方、もう大仙市がすぐ近くなんですが、鵜養(うやしない)という名前の山間農村にあります。 でも鵜養に限らず、 ああいう素晴らしい山間農村みたいなのって秋田にいっぱいあるんですよね。でも、どこも農業では食っ 平均年齢も70~80歳ぐらいまで上がってきちゃった。10年後にはこんな最高の景色が、 そこにできるだけ通って、 瞑想したり、 そこの風景に癒されたりしてカムバッ 水田地

見に来てくれる人もいると思うし、 農薬栽培とかも、 齢化が進むにつれて、 帯が無くなるのがわかりきってるんです。でも景観はいいんだから、あえて大量生産とは真逆の価値観で農業をやったりすれば、 秋田であんまりやってないですよね。 大量生産や省力化、機械化のほうへなびかざるを得ず、 すごく発展性のある仕事じゃないかなと僕は思うんですよ。そもそも秋田の稲作農業は、 さらに魅力を失っていってるように見えます。 無 高

石倉:そうですね。 無農薬栽培をやっている実験的な農家もありますが、 農業や殺虫剤の問題は、 まだまだ大きくのしかかって

されてない例だと思います。秋田杉だって、チップみたいなのにされて、もったいないと思います。ああいうので木桶つくった らすごいと思うし、 ています。平野で米の栽培に適している秋田が一番乗り遅れちゃったり、 佐藤:岩手とか宮城とか、地形的に不利なところの人が生き残ろうとして無農薬栽培とかして、 僕にとっちゃ宝物だらけで、 やりたいことが増えるばっかりです。 オーガニックにいけなかったり。宝物があるのに生か いいお客さんつかまえて継続し

もしれません。 石倉:そういう意味では、 佐藤さんが実践されてきたように、秋田という土地は逆境をチャンスに変えられる土地だと言えるか

出て行ってそれはよかったんだけど、 佐藤:これは蔵に帰る前にある程度固まった感じの僕の思考なんでしょうね。 帰ってみるとすげえじゃんって思うことが実際ありますね。 秋田を長く離れてたからかもしれませんね。

**石倉**:たしかに外の視点で地域を見直してみると、気付かれていなかった特徴や資源が発見できるかもしれません。 として指摘されることが多いです。 物」を誉めるだけになってしまったり、 という問題は「地域ア 普遍的なテーマや芸術的な価値が二の次になってしまうような例も地域芸術祭の問題点 ト」以降のあらゆるプロジェクトが直面する課題です。同時に地域の内側にある「宝 地域の資源

術祭が始まっていて、 果たして芸術祭を開催する価値はどこにあるのか、ということを考えてみたいのですが、 ユニークな新しい取り組みが民間からもいくつか出てきている一方で、 全国的には最近たくさんの新しい芸 税金を使った芸術祭が想定したよ

035

覧会のドキュメント、 トで終わってしまう危険性も多くの人々が指摘しています うな経済効果や動員数に結びつかずに社会的に批判される、というケースも増えています。特に、地域作家のコレクションや展 アーカイブという地道な芸術政策を無視して、安易な地域振興策として芸術祭を企画し、 一過性のイベン

036

独自の新しいプロジェクトを計画することについて、どのように考えていらっしゃいますか? 服部さんは日本だけでなく、世界各地の芸術祭の事例を見てこられていると思いますが、最近の日本の地方のブー 秋田

がいてみたいな構造、 **服部:**芸術祭って言うだけでも5番煎じくらいになりますから、その構造自体を変えなきゃいけないと思います。ディレクター んじゃないかと思っています。 し、もっとユニークに違う形を考えた方が生産的じゃないですか。僕はア・ ーであることにもあると思います。隙間であるとか、誰もがいいと思わないとか、わかんねぇな、みたいなことが重要な そういうものを踏襲する時点で失敗じゃないかと思います。トリエンナー トのいいところは多数決では決まらないことや、 レとかも言わなくてい いと思い

れたプロジェクトが継続できなくなった例は秋田市も経験しています。 マイナーな分野の画期的な表現や実験的な作品展示は失敗とみなされてしまう可能性もあります。集客数の少なさが原因で、秀 **石倉:**そこはすごく大事なポイントです。例えば、美術展やアー ト・プロジェクトの成果を動員数だけで評価しようとすると、

**服部:**成功と失敗をどこで線引きするのかですよね。何をもって成功とするのか。だから価値基準をつくっていかなければいけ ないという気はしますよね。

りも「人の多さ」や「経済効果」が独り歩きしがちかも。 石倉:ア-トはにぎわいをつくる手段ではないですよね。少なくともそれだけではないはずです。多様な価値観を育む仕掛けよ

さんの力に頼るわけではなく、 **高橋:**山形ビエンナ 場を求めている市民の方々も巻き込み、参加できるような仕組みだったらより面白いのかなぁと思います レってあるじゃないですか。実際に足を運んでみて規模感がちょうどいいなと思ったんです。 面白いと感じさせる仕組みや企画がすごく良くて、私は楽しめました。 有名だからどうこうでは 有名な作家

地域のユニークな作家が強く打ち出されていたり、ディレクターとして絵本作家の荒井良二さんが関わっている点もユニークで 石倉:僕もト 東北でも芸術祭の新しいモデルがいくつか出てきています 山形の東北芸術工科大学が主催しているので、大学の職員や学生ボランティアがスタッフとして活躍していたのも ークイベントに参加したのですが、たしかに山形ビエンナーレには他にはない特徴がありました。地域デザインや ą

田村:県立美術館が改装中で、美大の今年度(平成29年度)の卒展をやる場所が決まらないという問題がありますね。 よう」って学生達が言っているときに、この子達はオジフェスとか見たらどう思うんだろうって考えたんですよ。 「どうし

髙橋:小玉会館を貸そうかなぁと思ったんだけど、潟上だと遠いって言われるかなって思って、言えなかったです(笑)。





ごく楽しみにしています。 たいなことがありますが、美術大学の4年生が今の状態でどういう表現をするのか、どういうふうに乗り越えていくのかを、 田村:この3人って逆境好きで、秋田帰ってきて、どうしたらいいんだろうとなった時に、制限がある方が逆に飛び越えれるみ す

県立美術館や千秋美術館よりもずっと人気があったりします。「もう一つの場所」とはそういう場所かなと思うんです。あ ところで、 石倉:美大の卒業生達も美術館が使えない、という逆境を乗り越えるべく知恵をしぼっているので期待していてください る特定の業界とか、特定のジャンルに寄らずに、 や小松クラフトスペースというユニークなギャラリーがあって、 ていましたけれど、そのあたりが逆境を変えていくヒントになるのかもしれません。秋田には、たとえばココラボラトリー さっき田村さんが、 秋田に陶芸のギャラリーがないことがかえって新しい展示を促すきっかけになるって言っ ジャンルの価値そのものをつくっていける場所を、 県外のアーティストやキュレーターのあいだでは、 そのまちが持てるか 秋田

ンもやるなど、パンクなギャラリーです。 ココラボだったらライブや演劇もやる、 まちのおばちゃんが描いた絵画展もやり、 お酒の「NEXT5」のレセプショ

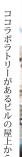
地域は、これから美大と連携しつつ、もうひとつの場所づくりが加速化していくのかなと。そこに卒業生とかが秋田市民と一緒 酒蔵跡地が新しく秋田市のガラス工房になり、来年(2018年)は美大にアー になにかつくれる、 ベーション)したという点です。美術大学がある新屋でも、最近は空き家リノベーションプロジェクトが進んでいます。 **石倉:ココラボラトリーの面白いところは、もともと印刷会社の工場が入っていた物件を、使用者達が力を合わせて改装(リノ** 創造的なプロジェクトが立ち上がったらいいなと思っています。 トセンターがつくられる計画もあります。 新政の 新屋

田村:僕の工房は美大から離れているので、僕は僕で美大がつくる場とはまた違う場をつくんなきゃいけないと、使命感的に思っ

する空間を準備することです。これは芸術祭を開催するか否か、 あるのかもしれません。食・お酒、 **石倉**:そういう意味では、「もう一つ」というより、 工芸、アー - トといったいくつもの領域をつないで、新しいコミュニケー むしろ「たくさんの場所」がこれから秋田に生まれてくる素地ができつつ という問題よりもずっと大きな政策的な問題につながってくる ションの価値を創造

がそこに関わる当事者になってからですね。 田村:新政の田植えに参加したら、稲が育つのを見るのが楽しくて、 材料になるんです。天然灰って結構厄介な代物なんだけど、 それをつくってみようという気持ちになっていますが、 自転車とかで4、5回行ってるんですよ。稲わらは釉薬の それは自分

石倉:稲作をやってみると、決して食べ物をつくるというだけではない。 生活のあらゆる場面に田んぼという場所が関わって



縄をつくるという、「マルチタレント」の才能を百姓は持っていました。そういう形の新しいポスト芸術祭的な実践というのは技術を兼ね備えている人という意味ですよね。食べ物をつくるだけではなく、藁細工で道具や装身具をつくったり、神様のしめ ありうるかもしれない。今日ちょっとそんなヒントを感じました。パネリストの皆さん、どうもありがとうございました。 るのが実感できますね。「百姓」という言葉は「百の姓(かばね)」と書くわけですが、これは「百の職業」つまり、 たくさんの









#### 第 2 回 「食と自然」をつなぐ

出演者 平成29年12月6日(水)18時30分~20時30分 エリアなかいち にぎわい交流館AU4階 研修室1

藤本 智士 氏 (編集者)

菊地 晃生 氏(ファームガーデンたそがれ園主)

氏(有限会社たかえん代表取締役)

コーディネーター 石倉 氏(人類学者·秋田公立美術大学准教授)

りました。しかし、ゲストの方々のお話を聞いた後は、これまで以上に「食」を通じて地域(土地)とのつながりを意識したいと感じました。 「食と自然」。最初にこのテーマを聞いたとき、違和感は感じなかったものの、「プロジェクトの方向性とどんなつながりがあるのか」という疑問も少しだけあ

が欠かせません。この姿勢は、自分の暮らすまちの風景や歴史・文化に対しても同じではないか、と思ったのです。そうした視点から考えれば、 にある人や活動など、地域の素材をネガティブに見るのではなく、ポジティブに受け止め、いろいろな切り口から編集していくことが大事です。 食材はその土地が生み出すもの。土地はそこに暮らす人が守っていくもの。そのためには10年後、さらにもっと長い時間を意識して土地と人を愛していくこと 今の秋田のまち

となるプロジェクトとして考え、その先にある「まちの姿」を見据えていくことが大切だと、より明確に意識できました。「地域のことを考える」意味を再認識 できた「夜楽」第2回を振り返ってみます。 「(仮称) 芸術祭?」の開催検討からスター した私達の取り組みも、開催が目的ではなく、 まちに対する想いを共有し、 暮らしの中の豊かさを実感できる機会

#### 編集という掛け算をしながら盛り上げてい <

そういうものを活動の軸にするということで、 限会社 Re:S」。これは、藤本さんが今から10年ほど前に発行していた雑誌のタイトル「Re:Standard」からきています。 「Re:Standard =標準、普通のことを提案する」、 藤本智士さんは、編集者として活躍されています。兵庫県西宮市に住んでいますが、よそ者(本人曰く)視点で秋田でも幅広く活動されています。会社の名前は「有 雑誌名を超えて会社名にしてしまったのだそうです。

う中でやられてきています。 「地方から発信していく」「ローカルから編集力を持って何かビジョンを実現していく」「世の中を変えていく」ということに興味があり、 それを「編集」とい

大紙と言われる新聞も東京のローカル新聞であり、メディアにおいても各地のスタンダードがあることを実感するとのこと。地方紙のベテラン記者は、 全国をまわり、地方のビジネスホテルに泊まる時に、地元の喫茶店に行ってモーニングを食べ、その地方の新聞を読むのが好きなので、その時に、 いわゆる四 以前から

しっかりと全国の潮流に対する違和感などを発信してきていると感じているそうです。

で周りに届くようになるとアドバイスをくださいました。ローカルから発信するものの範囲を自分自身で狭めないで、秋田という土地からでも、堂々と日本全国 に届ければ良いんじゃないか、と。 だから、ローカルから発信していく時に、みんなが持つ「発信力」に「編集力」というものが掛け算されれば、東京からのアウトプットと変わらないクオリティー

だと教えていただきました。 というイベントを手がけられています。その根底には一環してその土地にあるものに編集という掛け算をしながら、 藤本さんは今、秋田市民市場で、「なんもダイニング」というイベントをやったり、にかほ市で北限のイチジクと言われるイチジクを取り上げて「いちじくいち」 「秋田」を盛り上げたいという想いがあるの

### 日常の豊かさと美しさに気付く

を始めて10年になりました。ご実家は農家なのですが、農業のことはまったく知らないで戻ってきたそうです。 菊地晃生(こうせい)さんは、 潟上市にあるファ ムガーデンたそがれの園主。県外でランドスケープデザインの仕事に関わったあと、秋田に戻ってきて農業

想いをこめたとのことです。 など子どもの頃の原風景から来たのだそうです。もう一つは、人口減少などが進むこれからの時代をより豊かに楽しむことを考えた暮らし方をしていきたいとの 「たそがれ」という名前は、名古屋や札幌に住まわれていた時、よく思い出していた郷里の日本海に沈むたそがれどきの夕陽の情景や、夕陽に舞うトンボの姿

「農業とは何か」という視点から、「夜楽」のテーマの「食と自然」、そして「日常と超日常」につながるお話をしてくれました。

きたい、喜びを伝えていきたいといろいろな試みをしています。例えば畑の隅で、軽トラの荷台にマルシェコーナーをつくり、その日に採れた野菜をカレーにし のが含まれ、風景にもなるものだと再認識しているそうです。 野菜の味を楽しんでもらって買っていただく「畑 de マルシェ」、 と改めて考えたとき、それは食べるものをつくるだけではなく、食べる、耕す、育てる、楽しむ、考える、学ぶ、愛するなど、生きる行為そのも 日々の収穫と食べる喜びを伝える。そして日々楽しむだけでなく商売としてもその価値を伝えてい 味噌やみりんをつくるワ ークショップなどなど。

にも知ってもらえるよう展開しているのが非常に良いと思いました。 一つの種(しゅ)があれば、何代でも更新していける種を集めて交換し合う会も始めたそうです。生産者だけでシェアするのではなく、食べる人、周りにいる方々 40年を迎える県の種苗交換会は、始まりが地域や農民がいかに収量を良くするか、良いものを採るかといった「種子交換会」だったことから、

う自然が教えてくれる日常の美しさに気付くことも、これからの地方の時代には大事なのだと気付かされました。 菊地さんの視界には、 地域の風景も大切なものとして映っています。 自然が見せてくれるグラデーションや色の強弱というのは、 人間では出せません。そうい

### 地域と人を愛する 10年後を考える

ア紅玉」というお店を営み、 高橋基(もとい)さんは、 21軒の農家さんとの直接取引など、信頼関係を最も大事にしています。 横手市十文字の有限会社たかえん代表取締役です。お総菜の販売とイー トイン、デリバリーといった「デリカテッセン&カフェテリ

社員の潜在的な力が、働く中から引き出されるようにとの想いを込めています。このお話だけでも、時代を超えて引き継いでいくもの、日常の中の大切なもの、 紅玉のりんごとしての潜在的な力。非常に酸っぱいりんごでありながら、加熱することでおいしいジャムやアップルパイに姿を変えることから、ご自分の会社や 超越したお店になりたいとの想いでつけました。二つ目は、偶然にも、 人を育てつないでいくことを考えさせられました。 ですね。女性が世代を超えて受け渡していく暮らしの中の大切なものを、自分達が守り、伝えていく役割を持ちたいとも思ったのだそうです。そして、三つ目は、 時代遅れのりんごと言われています。昔は地域のりんご農家の畑には必ず1本はあったのですが、今はあまりつくられておらず、紅玉のように独特な、 最初に「紅玉」という名前にした理由を、三つ話してくださいました。一つ目は、りんごの品種。紅玉という品種は、同じ花粉同士の品種では実を結ばない、 高橋さんの奥様が紅(くれない)さん、祖母はタマさんだったこと。合わせると「紅玉」

も手に入らない。おいしい焼き菓子をつくるための欠かせない素材として、 した農家の方が「りんごの木は(収穫までに)10年必要なんだよ。でも、10年後のために植えるべ」といって始めてくれたのでした。 て廃園を考える果樹園もあった状況に、取引をしている若手農家のために「紅玉を植えてみないか」という提案をしたのです。お菓子屋さんなどが紅玉を探して そして、地元農家が紅玉の栽培に取り組んだきっかけが東日本大震災であることも教えてくれました。ひどい大雪の時の地震だったため、りんごの枝が折れ 売り先はあるんじゃないかという想いもあって提案したそうです。アイデアをお伝え

それを「その食材が一番おいしいときに、しかるべき調理方法、しかるべき調味料でつくられること」と定義付けたのでした。 こうした積み重ねの中で高橋さんが考えたのは、「何をおいしいと定義するのか」ということ。社内の討論で「素材の味が生きていること」との意見があり、

の生産物を地元で消費することに限定して使われていることに違和感があったのだそうです。高橋さんの想いは、「地域のありさま、その場にしかないもの、そ の地域ならではのものを楽しみ、誇り、愛すること。だから、別の地域の方とつながることで、食材・素材を通して人と人がつながり、 自分のことのように大切に思えること」でした。 地元農家と取引していることから、 よく「地産地消ですね」と言われるため、その本当の意味も考え始めました。「地産地消」という言葉が、地元農家 他の地域の人や風土文化

地域において、自立すること、そして信頼関係を持って共生していくことを考えていかなければと感じました。 「地域のことを考える」ということは、自分のことだけではなく、お互いが人の役に立てるものは何かを考えることでは? という言葉に、私達もこれからの

地域を越えて人とつながり、 自分の暮らすまちの風景や歴史・文化などを知り、愛すること。 10年後の姿を考えること。それが暮らしへの愛着となり、住んでいる人への尊敬となる。そして、 他の地域の人や文化も大切に思える。 私達も、こうした視点でプロジェクトを考えたいと改めて思いました。

欠かすことはできません。私達の体は、これまで食べたものからできていますし、食の素材はその土地と自然が育んだものです。こうしたことを、 れがちなのだと思いました。 前半のゲスト3人のお話からは、食を通して人と人をつないだり、地域を深く愛していることが感じられました。土地に根ざした文化を考えるとき、「食」を 私達は日常忘

#### ネガティブをポジティブに

んから発言がありました。 後半は、ゲストの方々の気付きを中心に会話が展開されていきました。最初に、菊地さん、高橋さんお二人のネーミングセンスの素晴らしさについて、 藤本さ

目の前にあるものだけでなく、それがもたらすイメージや風景まで考えた時に、いろいろなことが広がっていくと受け止めたそうです。さすが編集者の視点と思 していること。お二人とも、 思わずうなずいてしまいました。 私達も、「(仮称)芸術祭?」を考えるのではなく、その先に何を見るのか、 勢いが衰えるという意味のある「たそがれ」、「紅玉」も酸っぱくて、あまり量もないなど、ネガティブに捉えられがちなものをポジティブに展開 自分の頭でしっかりと考えており、良いイメージがないものであっても、通り一遍に受け取らないところから全てが始まっています。 その先のビジョンの実現のために必要なものになっているべきというご指

いうスタイルを取り入れては、と思ったそうです。それが食べ物や土地、歴史など様々なものへの愛を形にしていくことにつながっていると感じました。 菊地さんは、秋田に戻られる前のご自分の経験から、「秋田のランドスケープって何だ」と考えた時に「田んぼ」が浮かび、新しい暮らし方の一つに「農」と

成長する場面を見てきた経験からの「育てるより育つ場をつくりたい」という言葉には重みがありました。 かけをつくってあげること」。また、調味料を例に、雑味、雑物が入ってこそ物事は活性化するし、摩擦やぶつかり合いの結果として、融合の過程でそれぞれが 高橋さんは、インターンシップを受け入れられていることから、人を育てるという視点でのお話をしてくださいました。まずは「自分が変わりたいと思えるきっ

みなさんから、地域のスタンダードを育てていき、地域の個性を深めていくにはどうしたらよいかということについてのヒントをいただけたと思います。

徴みたいに見えたのでした。 民の日常的な市場」であったのに、時代の変遷とともに、飲食店などプロユースの方の買い付けの市場になってしまい、それが秋田の少子高齢化、 「食材が豊かで、ここでごはん食べられたら良いのに、観光など単発で来る方は見て出て行くだけになっている」と感じたそうです。昔の市民市場は、まさに「市 また、藤本さんは、秋田市民市場で行っている「なんもダイニング」を例に、興味深いお話をしてくれました。 藤本さんが始めて市民市場に足を踏み入れたとき、 人口減少の象

なども考えて「なんもダイニング」を始めたとのことでした。 市民市場がチェンジしていくことが、秋田が変わっていく象徴にならないか、つながっていかないかという想いを秘め、若い人達が市場に来る仕組み

切っていなかったのです。編集の力で、みんなが学び、気付いていくのだと思いました。 私達の暮らしの中にある市民市場という存在は、実は秋田市の「味」の一つであり、秋田を売り出していける場所なのですが、それに気付いていない、 生かし

力が十分にあると改めて感じました。私達自身が新たな価値を生み出していく「編集の力」を育んでいければと思います 私達の暮らす秋田をネガティブイメージで捉えるのではなく、外から見たら面白いものや人が共存しており、ネガティブをポジティブに変換していく

地域の今あるものに新たな価値を見いだし、 一人ひとりが「編集の力」を蓄えることで、まちを充実させていく。そんな未来のまちの姿を想い浮かべられた時





秋田市民市場

## ① 第2回「食と自然」をつなぐ ドキュメント

ことになったのは、 **石倉敏明(以下、石倉):**この「夜楽」のテーマは一貫して「『秋田のリアル』から未来を考える」ですが、 2年ほど前の「秋田市で芸術祭をやるのか、 やらないのか」という議論が始まりです。 このテーマで進める

考えた方がいいんじゃないか、という議論へと発展していきました。 全国各地で地域芸術祭が流行している中で、秋田市がやるとすればどういうものができるのか、議論を重ねていくうちに、「祭 やらないか」ということより先に、 文化施設と秋田市の生々しいリアルな日常生活をどうやって「創造」して実現していくのかというところを 2020年の秋田市がどうなっていくのかをリアルに「想像」し、

ないか」という厳しい意見もあり、名前を変えるだけでなく中身も変えて、新しいプロジェクトをどうやって構想し、 いくのかが秋田市にとっても重要な議題となってきています。 「秋田で開催する芸術祭が、日本のどこでもやっているような既存のフォ ーマットと同じであれば、やらない方がいいのでは 実現して

秋田では「当たり前のこと」と考えられてしまいがちだ、という点が挙げられます。このことを観光客も住民も当たり前のよう る」がテーマで、「人が集まる場所づくり」の話でした。 に語りますが、この当たり前を再発見する時に、 たシリーズが、「食」と「自然」というテーマになるのかというと、「食べものがおいしい」、「自然が豊かである」という特徴が、 いての話、そして今日の2回目の「夜楽」は「『食と自然』をつなぐ」というテーマです。 なぜ「芸術祭」という議論から始まっ もうひとつ、最近のアー 今年度(平成29年度)は三つのテーマを掲げて進めることにしました。10月の1回目は「『もう一つの場所』をつく ト実践の変化として、 秋田らしさをどう語れるのかということを考えたいと思ったわけです。 「食べられないもの」から「食べられるもの」も含めた、広い領域でアー 11月のシンポジウムでは地域芸術祭ブームの後に来る創造の世界につ

道具として「食事」の価値を考えるだけでなく、 の社会をデザインしていけばよいか、というアートの世界の問題にも結びついているわけです。 のものの価値を再考しよう、という流れが深まっていることも挙げられます。これは人と人との社会的なコミュニケ 人と自然の関係や、食べものとなる生物の価値や生命をどう理解し、 これから -ションの

今日は、編集者の藤本智士さん、 内と外の視点から「『食と自然』をつなぐ」というテーマを語り合っていきたいと思います。 農業の菊地晃生さん、レストラン、サ **ービス業で食にかかわる仕事をしている高橋基さんを** 

初に、藤本さんからお願いいたします。

田でさせていただいています。 **藤本智士(以下、藤本):**僕は編集者を生業としていて、兵庫県の西宮市に住んでいますが、よそ者視点で、いろんな活動を秋



石倉 敏明/人類学者 ※21頁を参照

(りす)での 『編集 』という仕事の中で、「地方から発信していく」、「ローカルから編集力を持ってビジョンを実現していく」、「世 こうと思い、2006年に創刊した雑誌のタイトルにしました。その後雑誌をやめた時にそれを会社名にして、現在は「Re.S.J の中を変えていく」ということに興味があり、 スタンダード、つまり標準、普通のことを提案するという意味です。「Re:Standard」を活動の軸にする、旗印にあげてやってい ー・コロン・エス(「Re:S」)、「りす」と読ませるんですが、その下に「Re:Standard」と書いています。 活動しているところです。

わせて2冊の本を抱えながら、全国55か所を回るブックイベントをやっています。 びり」の特集をまとめた『風と土の秋田』という本を、7月に出版しました。同じく7月に出版した『魔法をかける編集』と合 「のんびり」というフリーマガジンの編集長を2013年から2016年まで丸4年やらせていただきましたが、その「のん

くということ」が、 力を持つとどうなるか」を話していて、その際、事例としてあげるのが基本的に秋田の話なんです。 いろんなところに行きながら、「その地方で編集力というものをどういう風に活用していくか」、「地方で暮らす皆さんが編集 とても大事だと思っています。 僕は「地方から発信してい

新報」という聞いたことがない新聞がありました。秋田はこうしたローカル紙が盛んな土地で、ロ こでその地方の新聞を読むのが好きなんです。秋田なら「秋田魁新報」ですが、この間、鹿角市に行ったら「北鹿新聞」、「米代 地方を回っていて大半はビジネスホテルに泊まるんですけど、ホテルの朝食じゃなくて喫茶店に行ってモーニング食べて、そ ーカルメディアが残っている

を読んで実感しているので、四大紙などといわれている新聞は、 基本的にはどこへ行ってもシェアナンバーワンは地方紙です。僕はメディアにおいても各地のスタンダードがあることを地方紙 その他一部の県だけで、青森に行ったら「東奥日報」、岩手に行ったら「岩手日報」、宮城だったら「河北新報」という感じで、 書かれていて、全国で読まれていると思われがちだけども、これらの新聞がシェアナンバーワンである地域は東京など関東圏と 「読売」「朝日」「毎日」などの四大紙といわれている新聞の論調は、「日本全国すべからくみんな思っていること」的な感じで 東京のロー カル新聞だと思っているんです。

んに届ければいい。ローカルの発信力に編集力が掛け算された時、東京のアウトプットと変わらないようなクオリティー感を持っ ローカルから発信するものは、 もっと遠くに届くようになるんじゃないでしょうか。 届く範囲がその地域だけと勝手に決めこまないで、 秋田という土地からでも堂々と日本の皆さ

にかほ市の北限のイチジクを使った「いちじくいち」というイベントをやりました。そういう食との関わりも含めて、 ベントをする中でも、 日本全国に情報を届けるのは、どうしてなんだろうという不思議を解決したかったからです。秋田での「のんびり」や数々のイ 僕がかつてつくっていた「Re:S」という雑誌は、大阪で編集していたのですが、その意味はただ一つ、 そうした想いが僕の軸となっています。今年は秋田市民市場をメディアにした「なんもダイニング」や、 東京のメディアだけが



藤本 智士/編集者

1974年兵庫県生まれ。有限会社りす (Re:S) 代表。編集執筆を担当した『ニッ ポンの嵐』など、手がけた書籍多数。著 ポンの嵐』など、手がけた書籍多数。著 書に『ほんとうのニッポンに出会う旅』 (リトルモア)、編著として池田修三作品 集『センチメンタルの青い旗』(ナナロク 集『センチメンタルの青い旗」(ナナロク 技者『BabyBook』(コクヨS&T)などのほか、 共著『BabyBook』(コクヨS&T)などのほか、 共著『BabyBook』(コクヨS&T)などのほか、 大きでは、編集長を務めた秋田県発行のフ リーマガジン『のんびり』を書籍化した『風 りーマガジン『のんびり』を書籍化した『風 りーマガジン『のんびり』を書籍化した『風

に何となく編集という掛け算をしながら秋田を盛り上げていければいいなあと思っています(拍手)。

ズムの概念を変えるシリーズだったと思います。地方の情報誌は「全国誌風」だったり「東京風」を真似たものが多くなってし石倉:面白いですね。「のんびり」は秋田県の広報誌としてとても大きな意味を持っていただけでなく、ローカル・ジャーナリ まいますが、「のんびり」では、マタギの文化や秋田の発酵食品、寒天特集や版画家の池田修三の記事など、地域に眠っている コンテンツを深堀りして、 様々なアクセスの道を切り開いてくださったのではないか、と思います。 しっかりしたローカル・スタンダードが提示されています。そして、「食と自然」というテーマにつ

いたします 潟上市の「ファームガーデンたそがれ」を運営されている菊地さんにお話をしていただきたいと思います。

どもの頃の原風景で、それが農園を「たそがれ」という名前にした背景にあります。もう一つは、下降気味の時代をより豊かに 屋や札幌に住んでいた時に、よく思い出していたのは、郷里の日本海に沈むたそがれ時の情景、夕日に舞うとんぼの姿などの子 **菊地晃生(以下、菊地):**ランドスケープデザインという仕事をした後、 楽しむ暮らし方をしていくためという想いもこめています。 秋田に戻ってきて農業を始めて10年になります。 名古

などいろんな行為が含まれるということを再認識しているところです。 に沿って、農業とは何ぞやということを考えてみると、食べものをつくることだけじゃなく、生きる行為そのもの……、 このスライド写真はウチの田んぼで、僕の子ども二人がスゲ笠かぶって写っていますが、スゲも田んぼで栽培できます。 食べるものだけではなく、着るもの、住まいも、 再生する、育てる、導く、楽しむ、暮らす、考える、生み出す、編む、染める、風景となる、 その地域にあるものでつくっていました。今日のテーマの「食と自然 共存する、愛する、 つくる、

常的に楽しみながら、田んぼに来る仲間と一緒に食べる喜びを伝えようとしています。 まったのですが、まだまだ有効利用できる可能性はあります。こういったものを日々収穫し、子ども達と一緒に食べたりして日 ウチで育てた農産物や加工品などを食べる方達にいかに届けるかが、大きな課題です。野菜はそれぞれ色も違うし、 品種が違えば味も違う。 庭からとったバラの花、 一つひとつ非常に美しい姿をしています。その食べ方を伝えていくことは、僕らの重要な仕事にな ハーブ、クズの葉っぱ、クリの葉、ツユクサ。今、こういうものを食べる習慣がなくなってし 形も違う

菜の味を楽しんでもらい、買っていただく。 請われればどこにでも、杵(きね)と臼(うす)と籾殻(もみがら)の竃(かまど)を持っ て餅搗(もちつ)きにも行きます。納豆づくり、味噌づくり、ジャムづくりのワークショップもいろんな場所でやっています。 トに関わって畑に来てもらおうということで、今年試みたのが「畑 de マルシェ」です。 軽トラの荷台にマルシェコーナー さらに日々楽しむだけでなく商売にして、その価値や喜びを伝えていくために、売りに行くんじゃなく、食べる方とダイレク 畑の隅にある空き地にタープをかけて会員のスペースをつくり、その日にとれた野菜をカレーにして皆さんにふるまって野 -をつくっ



農的暮らしを気軽に体験できる学び場を主 水稲のほか大豆、ブルーベリ 農地で実践を行い自主販売を始める。現在、 からは農薬・化学肥料を使わない栽培を目 る。慣行栽培の田んぼと家庭菜園から農に スケープデザインの仕事を経て現在に至 菊地 晃生/ファー 野育園として、子どもから大人まで誰でも マトなど約 150 品種を栽培。たそがれ 入るも、圧倒的な化学肥料、農薬使用に衝 9年旧・飯田川町生まれ。 自然栽培の技術を学びつつ自らの 1年で慣行栽培を離脱。2年目 ムガーデンたそがれ園主

田んぼで種まきから稲刈りまで体験してもらう。お米の収量の目標を定めて、 こうした農的暮らしや食を豊かにする体験の仕組みとして「野育園」という学び場を設けました。基本的に参加者の皆さんに、 ぜひ体験してもらいたいという想いでやっています。 自給する力を見つけるという仕組みです。 農業を始めて一番うれしかったのは収穫だったので、 1年目から2年目、3年目と成長プロセスを経な この収穫の喜びを皆さん

がら、

いろんな方々に知ってもらえるよう展開していく必要があります。 それを交換し合う会を始めました。こういったことは、僕ら生産者だけでシェアするのではなく、 ろうよということで、一つの種(しゅ)があれば、何代も更新していける「F1(エフワン)」という、一代交雑じゃない種を集めて、 子交換会」として第1回目が開かれたはずですが、現在、種子交換は一切行われていません。そこで、これを僕らでもう1回や 「種苗交換会」が始まってから今年で140年になります。 いかに収量を良くするか、いかにいいものを収穫するかが目的の「種 食べる人や、 その周りにいる

いけないなと感じています。 教えてくれています。また、農村には素晴らしい建築が残されています。こういうものをつくる力をもう1回取り戻さなければ 山桜が咲いている光景のグラデーションや色の強弱というのは人間の技や力では出せません。本当に素晴らしいものを自然は

いうことも、農業をするうえでの喜びではないかと思っています(拍手)。 自然が相手なので時には危険と隣り合わせとなることもありますが、その自然の強さ、優しさみたいなことを感じて生きると

「一生のお願いです」と書いたら、日本中から200人ぐらいのボランティア・スタッフが手伝いに来て、「菊地さんのサポーター 子どもを育てるように作物を育てていく能力と愛情を持った人でもあると、 大会」みたいになったこともありました。菊地さんはこうした災害も含めて、 で冒険的な「農」の実践者だと思います。2013年に水害で田んぼや農機具が水没した時に、菊地さんが自分のFacebookに **石倉:**ありがとうございます。菊地さんはまさに「『食と自然』をつなぐ」というテーマを自ら体現するような、ダイナミック いつも感じています。 困難を乗り越えていく力を持った実践者であり、

続いて3人目の高橋さん、よろしくお願いいたします。

農家の方々と直接取引していることで、地域の中でのこうした信頼関係を最も大切にしています。 いうお惣菜の店をやっています。店内にイートインスペースがあり、最近はデリバリ **高橋):**有限会社「たかえん」の高橋と申します。横手市十文字町で「デリカテッセン&カフェテリア紅玉」 -業務もしています。ウチの特色は21軒の

ご農家の畑には必ず1本は残っていて、時代性を超越したそんなお店になりたいという思いで付けました。それから、 「紅(くれない)」、祖母は「タマ」という名前です。 女性が世代を超えて受け渡してきた大切なものを守り伝えていけたらと思っ 店の名前の「紅玉」はりんごの品種名ですが、 紅玉にした理由のひとつです。また、 紅玉はとても酸っぱいりんごですが、加熱することで、 味が時代遅れといわれ、今はあまりつくられていません。それでも地域のりん おいしいジャムやアップ 私の妻は

> 地域の7軒の果樹農家とともに「クッキン 製造販売、ランチやスイー 在は県外のシェフ、パティシエなどに調理 グアップルの郷」という連携体を組織。現 て間もなく10年になる。新たな事業として、 セン&カフェテリア紅玉」を開店。地産地 業後、秋田に帰郷し家業に就く。200 し、地元のお客様に提供している。惣菜の 968年旧·十文字町生 - 月、外食事業として惣菜店「デリカテッ ・ドブルの宅配などを事業の軸とし トに地域の21軒の農家 ーツの提供、 まれ。 大学卒 お弁

高橋 基/有限会社たかえん(代表取締役)



ルパイに姿を変えます。これと同じように、社員の潜在的な力が、その働く中から引き出されるようになればという願いもこめ

30代が多いです。今までとは違うチャレンジフィールド、「挑戦する畑」を、 で立ち上げました。 私達は「クッキングアップルの郷」という農家との連携体をつくっています。ここに参加するりんご農家は非常に若くて20代 彼らとシェフとで一緒につくれないかという思い

いって、今は7軒が紅玉の栽培に取り組んでいます。 う話をされました。でも、 という思いでした。このアイデアを農家に伝えたところ「おメエ(前)、りんごの木っていうのはよ、10年必要なんだよ」とい てみないか」ということでした。雪の被害からの復興というか「禍を転じて福となす」という形に、何とかしてできないものか てしまおうという果樹園も出るほどでした。そうした中で、 東日本大震災の時、横手市はひどい大雪でした。何よりひどかったのは農業被害で、りんごの枝がバキバキ折れて、 10年後のために「紅玉りんごを植えるべ」と言ってくれて、 取引をしている若手農家のために私が提案したのは、 最初は3軒の農家だったのが段々増えて 「紅玉を植え 廃園にし

うのがあり、「その食材が一番おいしい時に、しかるべき調理方法、しかるべき調味料でつくられること」と考えました。です ここで私がやってきたことの背景にある考えを話したいと思います。 旬が大切ですし、素材の味を引き出すために調味料を加えているという定義で料理に取り組んでいます では、「何をおいしいと定義するのか」ですが、 社内で討論した時に「素材の味が生きていること」 お料理屋さんのおいしさは一軒一軒違い、それぞれのお とい

自分のことのように大切に思えてくるのではないでしょうか。 が必要なのではないか。そして、 の暮らしや産物といったものを愛してもらうことが、私達の商いだと定義しています。 フやパティシエの方達とつながっているのは、地産地消じゃないといわれるけれども、そうではないんです。その人達に、 ことに限定されて使われていることに、非常に違和感があります。単純にものを使って費やしてしまうのではなくて、 21軒の農家と取引しているので、 使うものを愛していくことが大切だと思うのです。 その場しかないもの、その地域ならではのものを楽しみ、誇り、 よく「地産地消」ですねといわれるのですが、このことばが農家の生産物を地元で消費する 地産地消は経済活動や戦略ではなくライフスタイルなんだと考えること そこで初めて他の地域の人や風土文化が、 愛していく。 別の地域のシェ 食べるも

思います。そのためには自立しなくてはならないし、相手からも尊敬の念を持ってもらえるよう、 に立って物事を進めるのではなく、お互いに人の役に立てるものは何なのかを考えることが、プロ意識の出発点なのかなと ついて一緒に考える。農には農の立場があり、 私が仕事をするうえで大切に思っていることは、「プロ意識」、「チームワーク」、「地域」の三つです。会社の中だけに限 農家さんともそのプロ意識を共有することで、「お客さんを喜ばせるためには」「人のために役に立つには」などに 食には食の立場があり、 お客様にはお客様の立場がありますが、 信頼関係を結んでいくこ 誰か ?の立場



とが大切だと感じています

ことによって初めて地域が守られると考えるようになりました。私のやっていることは、 に人が残り、何らかの役に立つ行動をしていくこと、そこで自分の生業が成り立つようにしていくことだと思います。 自立と共生といいますが、そういったところをよくよく考えるようになりました。地域で仕事をするということは、その地域 こういった商売の一環なので、 そうする

術大学という制度は彫刻や絵画、 美術大学に勤めている僕にとって、 愛して仕事をしていく方法が見えてきたように思います。プロ意識、チームワーク、地域というキーワードも大変参考になります。 石倉:ありがとうございました。高橋さんの発表から、食べものを通して人と人、人と自然をつないでいく技術や、 が、藤本さんは、そのあたりどのように感じていらっしゃいますか? タンダードという形で。この解像度を上げていけばいくほど、地域や人の暮らしに近い精度の高い像が見えてくると思うんです わけですね。そういう事例は「秋田」という県レベルのスタンダードより、もう少し解像度の高い地域のスタンダードや、新し えば潟上の「たそがれ」さんや十文字の「紅玉」さんのようなユニークな取り組みが、秋田魁新報のような地方紙に載っている の中でしか語られなかったりします。この問題は、地域芸術祭が「食べること」を表現するときの不自由さにも関わってきます。 藤本さんのお話の中で、地域のスタンダードを映し出している地方紙のことが出てきました。食べものに関して言えば、たと 実験的な地域性というものを映し出しているように思います。例えば県南のスタンダードや県北のスタンダード、 自然と社会の循環系をつくっていくような「食べる」ということが軽視されたり、「地域」がカッコつきの限定された文脈 工芸、デザインといった「食べられないもの」を中心に組み立てられてきたからです。 高橋さんのお話はとても大事な点に触れていると感じました。というのも明治時代以降、美 地域を深く 潟上のス そのた

るので、 されている。ネガティブなあんまり良いイメージがないものであったとしても、お二方とも自分の頭ですごく考えていらっしゃ **藤本:まずお二方とも会社のネーミングが素晴らしいですよね。ネガティブに捉えられがちな言葉やものを、ポジティブに転換** それを通り一遍に受け取らないっていうところから、 全てが始まっているんだなと思いました。

野市の寒天づくりの風景、粉寒天におされて減っているはずのその風景がキープされているのは、ひょっとすると秋田のお母さ 寒天づくりの風景がたまらなく好きなんです。 ん方のおかげかもしれないということでした。 お母さん方だけは頑なに天然寒天である「棒寒天じゃなきゃダメ」って言う (笑 )。その状況を前に思ったのは、僕の好きな茅 風景として考えるという話ですが、 僕は日本一の寒天の産地である長野県茅野市の、 寒天づくりも今は工業寒天といわれる粉寒天の生産に変化している中で、 12月15日から2月頭ぐらいまで広がる、 秋田の

景みたいなものまで考えた時に、 お二人のお話について、 目の前のものがおいしいかどうかというのは、 そこからいろんなことが広がっていく。芸術祭であれ何であれ、それをやった先に何を見るの もちろんあるんだけど、それがもたらすイメージ、



思いながら聞かせてもらいました。 かが重要で、そのビジョンの実現のためのお祭りであり、イベントであるという考え方にもつながっていくんじゃないか。そう

石倉:昔だったら、 の寒天の話は、長野の茅野市と秋田がつながっている、つまり「インター・ローカル」の対話ができるということを、 秋田でつくったものを東京で消費するといった、生産と消費の二元論になりがちだったんです。 「のんびり まざまざ

について意識されていることはありますか? 菊地さんはランドスケープデザイナーとしてスタートしていますが、 風景として考えるといった時に、 景観としての食や自然

風景を維持していくことができないかと思っています。そういったことが自分達の食を守ることにもつながるんじゃないでしょ ばってもどうにもならない状況です。僕は新しい暮らし方の一つとして、農というスタイルをとり入れてもらい、みんなでその て何だ」と考えた時に、「どっからみても、それは田んぼだ」と、すぐ浮かびました。ところがこれが今、 **菊地:北海道にいて造園やフォレストガーデンといった生態系をつなぐような仕事にかかわったので、「秋田のランドスケープっ** にあります。どうやって農業者人口を維持していくのかが、これから10年、 15年の究極の課題になりますが、もはや個人でがん 本当に危機的な状況

浮かび上がってくるのは、まさに食べ物や景観、 石倉:石川理紀之助が始めた「種子交換会」を継承しよう、 にしていくか、ということです。 土地の記憶、歴史や記録など、身のまわりの世界への「愛」を、 という取り組みについての紹介がありましたが、種や農業を通して どのように形

高橋:東京大学名誉教授の教育学者、 て育てるということについて、どのように意識されていますか? 菊地さんは「野育園」という形で、自然の作物を育てることと並行して子ども達を教え育てることをしていますが、 ンシップの研究会をやっていて、 大田堯(おおた たかし)先生の「命の持つ三つの特性」という話に非常に影響を受けて 人を育てることに力を注いでいます。 人が育つ、あるいはプロフェッショナルとし 高橋さん

います。「命はそれぞれ違う」、「命は自ら変化する」、それから「命は互いの関わりの中で変化する」という三つの言葉で、

人は

ある人達が、段々に純粋化されるというようになります。ですが、純粋になるのは良くないのです。精選された調味料より粗い の中でそれを感じるのではないか、というものです。 一人ひとり違っていて、自分が変化したいと思わなければ変化はせず、かつその変化したいと思うきっかけは、他人との関わり 人を育てるのは誰かが教えてできるものではない。自分が変わりたいと思えるきっかけをつくってあげる。そこにしか人が育 と思うのです。また、同じ会社の中に同じレベルの人がいると、徐々にまとまってきて、いろんな考えの

調味料の方がうまかったりしますが、それと同じように雑味、雑物が入ってこそ、物事が活性化するというのが、私の今までの



石川理紀之助の旧



#### 経験から考えられます。

ていく過程の中でそれぞれが成長する。育てるというより育つ場をつくりたいとの思いがあって、学生を呼んでいます。 学生や全く関係のない人が会社に来て仕事場にいると、摩擦やぶつかり合いも生むんだけれども、結果としてそれらが融合し

雑物ですよね。ノイズといってもいいかもしれませんが。学生が教える対象というより雑物の一つとしてこそ効果が上がるとい うのは、すごく示唆的で、成長していく上での大事なポイントでもあると思います。 **石倉:**よく「若者」、「よそ者」、「馬鹿者」などと言って、外から来る人が地域を変えるみたいな話がありますけれども、

ダの先住民のことわざを紹介していただきました。 ないともお話されていました。もう一人のゲストの原万希子さんからは、「7世代後のことを考えて物事を決める」というカナ 自然も含めた広い意味での生態系をつくる計画だとおっしゃっていました。アートプロジェクトはこれができない限りは意味が 昨年(平成28年)11月に行ったシンポジウムで、芹沢高志さんが「生態学的地域計画」というのは、その地域の人だけでなく、

さんに伝わったのではないでしょうか。 ということではなくて、地域のスタンダードを育てていき、地域の個性を深めていくにはどうすればいいかということが、皆 雑物とか雑味というものを生かしていく話や、 10年先のりんごを育てる話も、ここにつながってくると思われます。 量を増や

ークにします。

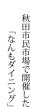
も大事だし、今までつながっていなかったアートやデザインに、つなげていくというのも大事だと思います 秋田に来たゲストやアーティストから「秋田の食べものやお酒はおいしい」とよくいわれるんですね。秋田の食文化は秋田の -ルスポイント、秋田のメリット、ポジティブな意味で秋田を売り出していけるものですが、それを編集して仕事にすること

のが一つの問題だと思うんですが、これについては藤本さんどうですか? 今秋田市で展開されている「芸術文化ゾーン」のあたりと、秋田市民市場のある「食のゾーン」が切り離されてしまっている

客であり仕事でここにやってくるよそ者としてのシンプルな欲望から、「なんもダイニング」の発想が生まれたんです。 **藤本:**せっかく秋田駅の近くに市民市場があって、食材豊かだから本当はここでごはん食べられたらいいのになあという、 観光

が変わっていくことにつながっていかないかなっていう想いを潜めつつ、何とかそこに若い人達が来る仕組みがつくれないかを 考えて「なんもダイニング」をやったわけです。 ていた。そこに、僕は秋田県そのものを見た気がしたので、市民市場がチェンジしていくことが、逆に象徴的に秋田というもの かプロユースだとか、飲食店をしている人が買い付けに来るみたいな市場になって、少子高齢化、 まさにネーミングそのままに秋田市民にとっての市場だったところが、近隣にスーパーやコンビニができる中で、 人口減少の象徴みたいになっ いつの間に

先ほどのお二人の話を聞いていて、 「おっしゃっていることは教育やな」と本当に思ったんですよ。まさにお二人とも現代の





込まれた時に気付く世界が大事のような気がします。 とか農に携わっていくということを考えれば考えるほど、学びを与えるとか、 石川理紀之助やなと(笑)。石川理紀之助は農業の神様とか言われてますけど、僕はあの人は教育の神様だと思っています。食 わからせるとかいう世界じゃなくて、

052

を聞いていました。 とこまでいっているんだけれども、これがさらに、ある種の教育というか、秋田市民の皆さんにとっては「気付きの場」であり、 「学びの場」であるっていう側面がもっと増えていけば、 市民市場の話は、起点としては単なる僕の欲望から始まり、少し踏み込んで、秋田県全体の問題点みたいな 「なんもダイニング」ももっとよくなるんじゃないかと妄想しながら話

視線の駆け引きをしながら、秋田の豊かな食材を買って食べるという体験のあいだには大分距離がありますよね。どちらも観光 にとっては大事かもしれないけど、僕にはどこか、食の体験が分断されてしまっているようにも感じられます。 **石倉:**例えば、秋田県立美術館のカフェで紅茶を飲みながら、千秋公園のお堀を眺めてケ・ キを食べる体験と、 市民市場の中で

お二人は生産なり流通に携わる立場として、 市民市場についても感じることがあると思うんですが、どうですか?

農産物を一括して買い取りしてもらえるのはよかったんですが、デメリットも生まれました。 市場原理みたいなシステムだったんですけど、その中にすごく大きなロスがあったんです。農家としては、大きなボリューム **菊地:**これまでの流通は、農協を含めて小さいところから一度全部吸い上げて、上からトップダウンで市場に流通させるという

してもらいたいな。 そこから奪われてしまった。家族形態やお米の精米具合の好みなど、そういうものが一切情報として届かなくなってしまったの つくっている側にとって食べている人が見えない。誰がどういう風にそれらを食しているのかというコミュニケー 僕はそこを修復したい。取っ払われた関係を結び直す、 - ケットになるんじゃないかと思っています。秋田市民市場には、ぜひ、そういうことが展開できるマ 田んぼから直接食卓へという回路が再び必要だと思って。それが ケットを目指 ションが

がっているなんていう光景を頭に浮かべます。田舎の無人駅の前に広がるような田んぼがまちの中にあったらいいなと思ってい て。ぜひ「なんも田(だ)」を(笑)。千秋公園の水を使いながら展開できたらいいですね。 もう一つ。ちょっとこれは馬鹿げた話かもしれないですけど、遠くから来た人が秋田駅を出たら、 そこにワー ッと田んぼが広

藤本:おっしゃっているのは農だけの話ではなく、 石倉:すごく機能の高い芸術の公演なんかが見られる文化施設の窓から田んぼが見えるっていうのは、いいかもしれないですね。 いまの世の中においてはここにやっぱりすごくロスがあるんです。 本屋さんと出版社の間を取り次いでいる組織の存在がある。これはある時代においてとても重要な存在だったと思うんですが 市民市場みたいな状況があります。その根本は何かというと結局、JAみたいな日販とか東販とかの取次という、 本の世界でも同じで、 大型の書店さんがある一方で小さな本屋がどんどんつ



の稲刈

さんの土地の話でもあるんだということを伝えたくてやっています。 僕が秋田の本を抱えて日本全国回っているのは、秋田のことを取り上げているけど秋田だけの話じゃないんだ、訪れた先の皆

そういう意味でまちの中の田んぼも、妄想じゃないよなと思えるところがありますね。 スだったり、そういうところが多いんです。駅前に大型ショッピングモー 僕がトークショーさせてもらうのは、中心市街地から少し外れたところで、個人で本屋を始めている人だったり、 いろんな場所で見るんですよ。そういうことが、この秋田でも起こって、共存していく、両方ある姿が見えてきたらいい 20年後の未来がある若い人達がゲストハウスなんかを始めたりしている。それが同じまちの半径の中に共存しているの ールがバー ・ンとある一方で、かつての商店街のところで、 ゲストハウ

思います。だけど、 仏教が日本でローカル化したように、全国展開の商業施設だって日本仏教みたいにローカル化していいと思うんです。 とはますます大事な意味を持つようになるだろう、と思います。 ていく現象は歴史的に起きていることなので、共存していくことは可能だと思うんです。少なくともチェーン店の風景を消せば のオーパではね、店員さんが秋田弁しかしゃべれないとか(笑)。土地らしさみたいなものがシステムを変えたり、中身が変わっ ような懐しさのリアリティーと、 してみても、そういうチェーン店を利用しないで生活していくのは難しいと実感します。問題は、 **石倉:**国道沿いのファストフード店や大手企業の量販店が立ち並ぶ風景って、 いという話ではないと思います。その中に全部飲み込まれてしまうんではなく、 大型のショッピングモールも、いまや若い世代にとって「懐しい風景」になりつつある。実際に秋田に暮ら ショッピングモールのリアリティーを共存させられるかどうか。たとえばインドではじまった 日本列島の景観をある意味では画一化していると 別の場所をつくったり、 里山や田んぼが広がっている 別の実践が起こるこ 秋田駅前

ショッピング・モールの計画に地域の商店街が反対する、というような二項対立ではなくて、別の形の関係ってあり得るのでしょ 紅玉さんは、地域づくりに関わる中で、仲間をつくっていく際に何か意識されていることはありますか? その辺のオリジナリティ ーとか秘訣みたいなものがあれば。 たとえば大きな

高橋:十文字の市街地は昔から「交通の要衝」といわれ、非常に狭い範囲に1万2千 秋田県内で1番売れている道の駅があり、 地元資本のスーパー、このまちにしかないショッピングモールがそれぞれ1軒あるのに、経営は成り立ってい 飲食店で言えば秋田市内で結構有名なピザ屋さんの本店が十文字だったりしま 人が住んでいるんですが、 商業施設は24時

勝手に商店を立ち上げるということがあります。ダメだったら他のところに移るという自由な土俵があり、 やかく言わない、むしろ、一緒にやろうぜくらいのモチベーションを持っています。 どうしてそうなってきたかというと、交通の動線が非常に豊かなので、 人の出入りが多くて、 いろんな人達がやって来て自由 それに対して誰もと

活躍できる場があれば誰でも自由勝手に自分の力で何かやれるというところが肝心なんじゃないか。ウチのまちには有



なあと、私はそういう風に思っています。 名な祭りもなければ、名物料理もない。でも、 しょっちゅう人がやって来て商売を立ち上げるといった、 自由さ、面白さがある

ろと違うものをあえて愛していこう、それを誇っていこうという、 なんか1軒もない。そういったテナントで成り立っている要因は、そこに住んでいる市民が地元のものを愛そう、 ているのは、地域の農家のファーマ 業化されていると思っているところへ、小農家の地元農産物を尊重して食材に使っていく。そういう姿というのが面白くて。 ドばかりがある中で、 コで地元産の食べものを商っているレストランのオーナーで、アリス・ウォーターズという女性を思い出しました。 「分のやっている商売のことを、こう定義してるんですよ。「これは血を流さない革命、おいしい革命である」と。ファストフ 自分の会社が食産業に参入するにあたって、どんな気持ちでやっていくかを考えていた時に、アメリカのサンフランシス あえて地元の食材を使って、料理をよりおいしくしていく。アメリカの市民が、 昔のフェリ ーズマーケットみたいなものと、こだわりのある小さな食のお店で、ファストフー ターミナルを全く新しいショッピングセンターに変えていったんです アイデンティティーの部分でのモチベーションがあるか アメリカの食材は工 他のとこ 中に入っ 彼女は · ド 店

場かなと自分も思っていて、要はその中に何らかの哲学さえ入りさえすれば、ここは日本のフェリーターミナルって呼ばれ るところにもなり得るんじゃないかと感じています。 翻って、 こうしたものを秋田に持って来ようとした時に、果たしてどこがベースの 施設になるかと考えると、 秋田市民市

得られるのかということが肝心なのかなと思っています。 んでいる現状がおかしい。 農業はもっと細分化されてしかるべきで、製造業的な農業やサ 例えば系統出荷ならではの良さもあれば、直売ならではの良さもある、 北海道の大農場と「たそがれ」さんを比べるというのは、そもそも違うのではないかという気がして ービス業的な農業など、様々な形を全部ひっくるめて農業と呼 そんな中で、 消費者がどういった要素で満足を

比べるのと同じようなものだ、という感じですよね(笑)。そういうのって何か理解した気になるのですが、 く知恵といってもよいかもしれません。 文化全般にとっても参考になるのではないか、 ているのか、もう少し丁寧に見ていく必要がありそうです。 然違うのかもしれませんね。業種で無理やり一括りにするのではなく、 業経営をメガ農場の農家と比較するのは、蔦屋書店や Amazon のような大規模書店と秋田の地域に根差した加賀谷書店さんを 石倉:藤本さんから、 本の流通の話と食の流通の話をなぞらえる比喩が出ましたけれども、それになぞらえれば、 と思えてきました。大切なことは、小さな選択肢を大きな選択肢と共存させてい そう考えると、農業やレストランのオルタナティヴな実践は、芸術・ そこに来るお客さんに対してどんなサ 実は職業形態が全 -ビスを提供でき 菊地さんの農

今日のゲストに対して、もっと聞いてみたいということがあれば、挙手していただければと思うのですが、いかがでしょうか



スタッフの皆さ

横手市から参加した男性:みなさまそれぞれ地方に住んでいて、 の先に何を見ているのか、何を仕掛けたいと思っているのかを、改めてもう一回お聞かせください。 地方に腰を据えながら職業なさっているわけですけれども、 ح

すると豊かな日常の食生活を生んでいくのかなあと考えています。 高橋:特にこれというのはないのですが、できるだけ個の中に入っていきたい、家庭の中に入っていければと思っています。 している側ですけれど、家の中でつくるということに対して何らかの形でコミットしていければ、それが、 もし

**菊地:**これまでの農業が隣の農家さんと「今年は何俵とれだ」というような収量競争、 というような゛共創゛に変えていく、 林業家としても技術を身に付け、 そういうあり方を求めていきたいというのが一つ。それと、秋田には膨大な森林があるの 半農半林で山のことも手掛けていく必要があるのかなとも思っています。 価格の競争から、共に思い、 共につくる

**石倉**:僕は潟上市にある菊地さんの農場をはじめ、 活用してつくるものから僕はいろんな学びをもらいたいし、 僕達の時代とは違ってネットメディアを扱っていて、 ということです。だからこそ、 れは田んぼや畑であれ、里山や里海であれ、 していて、 そう思った時に当然のように若い人達がどうするか、この先を生きる人達が思う未来というものがすごく気になります。 藤本:興味があるのは20代の人達で、 僕がすごく優秀だと思う編集者、 僕達にはないリテラシーを持っています。そういう若き編集者達が、地理学的条件を超えてインター いつも気になるんです。 各地域の産物を交換することのできる市場があるまちは、 今日明日の目先だけを見てやろうとしているのか、もっと未来のことを見ているの 尊敬する編集者は20代、せいぜい30代前半で、圧倒的に年下なんですよ。もちろん、 何かを判断する時に、この意見、この物事は未来を見据えてやっているんだろうかと 食べ物を生みだす風景は、そこに暮らす人びとの身体と直接つながっている、 秋田県のいろんな場所を訪ね歩いて、 SNSなどを介してどんな地方にいようともつながる世界で仕事を そこからどういうものが生まれてくるのかに興味があります。 大きな意味と役割を持っている いつも思うことがあります。 ネットを か、

特質が見えてくるのだと思います た文化が必ずついてきます。こういう繊細な食文化を媒介し、 例えば人口が減ってきた時に、 五城目にも鹿角にもいろんなものがある。そうした地域の産物には、 生き残れないぞと思うんですよ。もっとローカルの解像度を上げて見ていくと、 秋田市が一人勝ちして秋田の他の地域が衰退していくというのを前提にしていたら、 総合してみると、 具体的なつくり方、 大都市には決してかなわない、 十文字には、 、育て方、 調理法、 潟上にはこんなものがあ 食べ方、 質の高い差異や 勝ち残れ といっ

のようなクリエイター、 僕らの大学の学生・卒業生の中にも、そうした解像度の高い地域性を敏感に感じる世代が現れてきました。今までは、 写真家、 東京を中心とする大都市のデザイン会社と相場が決まっていたんだけれど、 デザイナー を集約したメディアは、 東京ではとても成立しにくいんです。 たとえば今、 ですから、 「のんびり」 この卒業 地方の





さっそく活躍してくれています。東京に出て戻ってくるのは時間がもったいない。それよりも、 実践をやってみたい、という20代が出てきたことは、とても面白いな、と思います。 生は、東京のデザイン会社で数年修行してから里帰りするのではなく、卒業後すぐに秋田市の「のんびり合同会社」に就職して、 地域を見る解像度を上げていく

てきています。こんなふうに、これからの秋田を支える「『食と自然』をつなぐ」担い手が増えてくると楽しみですね。 そして同じようなことは、秋田の農業や食の領域でも起きていて、菊地さんの農場でも、高橋さんのレストランでも若手が育っ









# **佟楽」第3回「土地の記憶」を継承する ノート**

平成30年 月31日(水)18時30分~20時30分 エリアなかいち にぎわい交流館AU4階 研修室1・2

者 岸本 誠司 氏(民俗学研究者)

天野 荘平 氏 (男鹿市菅江真澄研究会会長)

小松 和彦 氏(小松クラフトスペース代表)

コーディネーター 石倉 敏明 氏(人類学者・秋田公立美術大学准教授)

だったと感じました。「自分の住むまち、関わる土地に愛情と誇りを持つこと」。そのためにどんな行動を積み重ね、暮らしを整えていくか。まちに関わる人が増 える状況をつくる。私達がこの「夜楽」から得たことです。 まちや土地の「記憶」とは何か。そんな想いが脳裏をかすめた「夜楽」第3回のテーマ。そんな私達の漠然とした疑問を遙かに超えていくゲストの方々のお話

「人」だと思います。 「土地の記憶」は、 人が見い出し、次の世代に継承していくものです。自分が知らなければ「教える」「語る」ことはできません。そしてこの積み重ねの中心は 人が交流し、 つながる場所をつくることで、土地の記憶が継承され、 未来への新しいつながりができるのです。

づくりの根底にあるべきもの、プロジェクトの視点を整理することができた「夜楽」第3回を振り返ります。 ゲストの方々は、私達が今年度の取り組みのテーマにした「あきたで学ぶ。あきたで創る。」という言葉を体現してくれているように感じました。 私達のまち

## まちに関わる人が増える状態をつくる

15年くらいで島が大きく変わりつつあると感じているとのお話でした。様々な人が島の課題を共有して取り組みはじめたことです。 くださいましたが、その中で興味深かったのは、「飛島のかつての暮らしはどんな風だったのだろう」と考え、 岸本誠司さんは、 民俗学研究者で、現在は「鳥海山・飛島ジオパーク」事務局にいて、鳥海山や飛島を活動フィールドにされています。最初に飛島を紹介して 島の人々に教えてもらいながら活動したが、ここ

認定され、 2013年に「とびしま漁村文化研究会」をつくり、若い子達と一緒に活動しているのです。2016年には、 例えば、島への漂着物は島の人だけでは何ともならない、だったら、みんなで何とかしようと2002年からスタートした「飛島クリーンアップ作戦」をはじ 2011年には、島に関わる行政、NPO、大学など様々な人達が一堂に会する「とびしま未来協議会」が立ち上がったり……。岸本さんは、そんな中で 島の人口は減っているのに、島に関わる人の密度は高まりを見せる状況になっているとのこと。この「関わる人が増えている」状態をつくる、 「鳥海山・飛島ジオパーク」が日本ジオパークに

057

## 自分達のやっていくことの意味を考える自分達のバックグラウンドを知る

達はこんなコンセプトで島で仕事していきますよ、島で暮らしていきますよ」ということで、漁業、農業もやる、加工もする。そして島でカフェを持つ一方、 田市内にもお店を持っていたり、島の旅館業を引き継いだり、島の様々なインフラの保守に関わる仕事などをしています。 こうした活動の中で岸本さんが知り合った30代の島の若い仲間達が合同会社を立ち上げ、様々な活動をしているそうです。その名は「合同会社とびしま」。「私 酒

自分達も生きるためにいろいろな仕事をしなければいけないけれど、この場所(島)を大事にしたい。だから、島の人達がつくってきた風景とか技術とか知恵と いるとのことでした。 このお話で私達の心に響いたのは、若い世代の方々が活動している姿勢です。「0次産業」と言われているそうですが、島はこれからいろいろと変わっていく、 そういう自分達のバックグラウンドになっているものがあってここに住んでいるから、自分達のやっていく仕事の意味を考えていきたい、 と思って活動して

た視点でどんなプロジェクトが良いのか、 私達も、秋田のバックグラウンドを知り、これからの暮らしや将来のまちの姿を考えた時に、自分達がやっていくことの意味を考える必要があります。そうし 考えるためのヒントをいただきました。

## 新しいつながりをつくる未来につなぐ、時間をかけた取り組み

じ目的を持ち、様々なコミュニケーションをしながら進めていくというのは、改めて時間がかかることと感じました。でも、それが着実に島の未来につながって いる気がするとの言葉には、 岸本さんは、 いろんな人が関わり、 私達も今の取り組みに向かう背中を押していただいた気がします。 評価してくれるようになった。そして数年後にはどうなるかという議論ができるようになるまで15年かかったそうです。

そして、もう一つ、私達が教えていただいたこと。ジオパークは「地球の記憶」。そして何のためにジオパークをやっているのか、どんな効果があるのかとい

うことを考えると、岸本さんは「人と自然」「地域と地域」「人と人」の三つに新しいつながりをつくることだと常々思っているそうです。人、 つながりをつくる場を頭の中で想像できました。 地域、 まちの新し

から? 仁賀保から? その後のクイズも、またウィットに富むものでした。「鳥海山はどこから見た姿が一番かっこいいでしょう?」皆さんはどう思いますか? 由利本荘から? 飛島から? 答えは「どこからみてもかっこいい」。 酒田から?

自分の愛する風景、愛着のある場所をこう言い切れる岸本さんの姿勢は、是非、見習いたいと思います。

### 会話を持つことが大事日常の中の記憶 言葉で伝える

まで調査・研究してきた中から、地震とナマハゲについてお話くださいました。 続くゲストは天野荘平さんです。男鹿市菅江真澄(すがえ ますみ)研究会の会長を務められています。「土地の記憶」というテーマを意識して、ご自分がこれ

土地の記憶はどうやって継承されていくのか? 日常の中で伝えられ、 日午後3時」と覚えているのは、地震のあと「復興歌」を歌っていた年代の方々が歌詞として記憶していたのでした。今は途切れてしまっていた復興歌です 引き継がれていたのです。 一つ目は、男鹿市五里合(いりあい)地区における昭和14年5月1日の地震。 今もって地元の方が発生日時を「5

ナマハゲを知るには現状を知らなければいけない、ピックアップするのではなく、全部調査したいと思い、男鹿市の全町内にアンケート調査をしたそうです。そ と声をかけたところ、有志が集まり、大晦日にナマハゲが10匹登場することになったのだそうです。きっかけはちょっとした声かけ。 ていくということには、 所帯が少なくてもやっている町内もある。そして、15年も途絶えていた飯ノ森地区ではナマハゲが復活しているのです。これは、一人が「ナマハゲを復活させたい もう一つは、ナマハゲについてです。東京では、小学校6年生の社会の教科書にナマハゲが登場するのですが、地元秋田では採用されていません。天野さんは、 現在は若者が減ったことから、「俺達がやる」ということで50代の方がやっているところも24町内あります。所帯が多くても途絶えている町内もあれば、 ナマハゲ行事が途絶えている町内、継続している町内に加え、復活した町内があることに着目しました。昔は独身の若者に限られていたナマハゲのなり 会話を持つことが大事ということが実感されました。 とにかく伝えていく、

### 複数の方向からものごとを考えるものごとを見る目を学ぶ

芸作家の作品やアパレル、海外から集めてきた民芸品も扱っています。 ゲスト3人目は小松和彦さんです。 JR秋田駅にほど近い場所に「小松クラフトスペース」というお店を構え、 祖父の時代の小松呉服店から、現在は様々な工

展開になったそうで 響されたようです。お店を継ごうとは思っていなかったのに、考古学を学び、旅先でいろいろな布や工芸品を見ているうちに、発掘をやめて商家を継ぐまさかの 小松さんが幼少の頃から、お店には全国を旅している作詞家・放送作家の永六輔さんや、 民俗学や考古学に興味のある方が立ち寄られ、そうした日常に強く影

こうしたことから、小松さんは「海外から見るとアジアの一地域である秋田」という視点で物事を見ていらっしゃると感じました。

実は「近代の日本では遊郭でにぎわいを生みだそう」という時代もあったと感じて、ちゃんと勉強しようと取り組んだそうです。一つのものごとを複数の方向か その後、あるきっかけで「遊郭」に興味をもった小松さんは、昔の地図や文献を調べ始めて気付きました。それまで「遊郭は陰(裏)の歴史」と思っていたのですが、 自分で調べ、 考える。 この姿勢は本当に見習うべきものですし、 私達の取り組みにも必要なものの見方と思いました。

# 秋田に積み重なっている時間と記憶を掘り起こす

くと現代の秋田の少子高齢化問題につながり、 小松さんが最近出版された『秋田県の遊郭跡を歩く』。この編集の過程で、 秋田県はなぜこんなに衰退するのかというテーマになった」と話していました。 小松さんは「遊郭というのは人と金が動く場所にしかできない。そこをたどってい

を聞くことができました。 一つの物事を突き詰めていくと、新たな「知らないこと」に出会い、また調べ考え始める。そして、いろいろな要素がつながっていくことがあるという実体験

あるのだと思います。将来のまちを考える「プロジェクト」として、私達のまちに積み重なった記憶を探り、未来の記憶をつくっていきたいですね。 の暮らしを知ることができ、それが新しい気付きや発見につながっていきます。将来のまちの姿を考えて行動していくことは、「未来の記憶」をつくることでも 秋田も掘り下げていくと、小松さんが息子さんを取材した明治・大正・昭和の農村を記録した五城目町の畠山鶴松さんという方や、 川反の花柳界を扱っている『美人の秋田』という専門誌の編集者・山田憲三郎さんなど、当時の日常を残した方々がいて、私達は、時間を超えて当時

## 土地の記憶は、時間を尺度として考えてみる

近づけると、小松さんの話された「コミュニティーの記憶、 3人のお話を踏まえて、進行を務めた石倉さんが素晴らしいまとめをしてくださいました。3人のお話は、それぞれ尺度として時間を捉えていること、そして「土 頭が整理されました。 一つは岸本さんの話された「地球の記憶」があり、尺を絞ると天野さんが話された「民俗・文芸の記憶」があり、さらに我々の日常生活に視点を まちの記憶」というように、自分が暮らしていく場所の記憶に移っていくと言えます。 非常に分かり

## 風景の成り立ち、 場所に持たせた意味を理解し、共感できる仕掛けをつくる

このあとのディスカッションでは、石倉さんの整理を受けて、ゲストの方から改めて分かりやすいお話をいただけました。

どういう人がどういう意図でそこに意味を持たせ、守ってきたのかを、いろんな人が理解したり、共感したりできるような仕掛け・仕組みをつくっていくのが仕 事の一つと考えているそうです。これからの地方の時代を考えると、みんながこうした視点・意識を持つとより地域が際立つように感じました。 エコ(生態)の風景がある。そしてそこに暮らす人がエコとの関係を持ちながら生活を営んでいる」と捉えており、自分達が暮らす場所の風景はどうできたのか、 の風景は地形や地質、 億や万という単位でできてくる時間スケールの風景があり、そこにもう少し短い時間スケールの様々な自然、

#### 外の世界を受け入れる

### 境界・ボーダーを行き来する

です。アプローチの仕方もありますが、そうした受け入れの土壌はあるのではないでしょうか。 されるけれど、「こんなことが聞きたい、 秋田の懐の深さを感じる」と話されました。天野さんも、以前、菅江真澄の本を片手に1年間かけて男鹿半島を一周したとき、地元の人に話しかけると最初は警戒 小松さんと石倉さんは、 「秋田は土着の質が強そうに見えるが、過去を振り返れば、よそ者が来て秋田をつくっている面がある」「外から来た人を受け入れている 知りたい」と具体的に聞くと歓待して親切に案内もしてくれる、そして帰りにはお土産もくれるという経験を多くしたそう

歴史や風土を知ってから考え始めると、まちにも外と内をつなぐ境界があり、文化や人の受け入れを繰り返して今の秋田があるのだと感じます。こんな境界、ボー を意識し、 そこをどう行き来するかということが、 まちの新たな価値を生み出すきっかけになるのかもしれません。

# 語るということは知ること、交流で知識と人を知る人のつながりを生み出すものは何か教える

思います。そういう意味では、今回の取り組みの検討を進めていくには、 術館、博物館などの専門的な機関、そして行政、大学などです。 新しい価値に気付き、 あるいは生み出すためには、 外の世界を受け入れ、 地元を始めいろいろな関係者や機関が交流し、つながることが欠かせません。例えば美 境界を行き来することが一つのきっかけになりますが、やはりその中心は「人」だと

ガイドする人は、知識として知るだけではなく、その場所に行って、そこの人達と話し、交流しながら知識を得ることも重要です。人に教える、語るということ は、忘れることなく心に置いておかなければいけないと強く思いました。 さらに、「知る」ことに関して、天野さんからは「土地を案内する人が、どこからどれくらいの知識を得ているかが問題」との意見がありました。たしかに、 自分が知らなければ教えられないし、語られない。私達は自分のまちについてどれくらい知っていて、どれくらい愛情を持って語れるのでしょうか。この点

リズムで来た人を楽しませるだけではなく、その土地のことを正しく、愛情を持って伝えられる人を育てているそうです。自分の住むまち、 誇りを持つこと。これが私達の「プロジェクト」の根底にあれば、 岸本さんからも、ジオパークはガイドを非常に大事にしていて、すごく時間をかけて人材育成しているとのお話がありました。新しいつながりを生むために、 土地の記憶のバトンを次の世代に渡していく仕組みができるのではないでしょうか。 関わる土地に愛情と

# 夜楽」 第3回「土地の記憶」を継承する ドキュメント

芸術祭をやるのかどうか、 が芸術祭をやりますという説明会ではなく、もう少し広い視野を確保したいと思います。 な資源を見直すことによって、未来に何を継承できるのかを問う方向へとシフトしてきました。そんなわけで今回も秋田市 くり返しても意味がないだろう、ということで、むしろ秋田という地域が宿している文化的なバックグラウンドや、 **石倉敏明(以下、石倉):**「夜楽」シリーズも今回で3回目、ひとまず最終回を迎えました。前年度(平成28年度)までは、 開催の是非について議論してきたのですが、どうやら定型化した地域芸術祭を、そのまま秋田で 歴史的

えるというよりも、自然界や生物の世界にも開かれた「土地の記憶」という大きなシステムにつながっていると言えそうです。 と広いエリアでテーマを捉え直し、満を持して「土地の記憶の継承」という民俗学的なテーマを扱っていきたいと思います。 「土地の記憶」に触れる体験ができることは、東北の大きな魅力かもしれません。 さて、秋田にはたくさんの芸能や祭り、 3回目の今日は「『土地の記憶』を継承する」ということで、秋田市だけでなく、秋田県全体、あるいは県境を越えたもっ 民俗的な伝承や工芸技術が伝えられていますが、それらは閉じた社会の記憶を伝

民俗学の研究を続けていらっしゃいます。岸本さんどうぞよろしくお願いいたします。 今日のゲストの岸本さんは、酒田市に住んで鳥海山エリアでお仕事されています。また、飛島を中心とするフィールドで

治に入ってから人口が増えはじめ、昭和10年代は1700人に達しました。戦後には、漁業の進歩で船が大きくなり、 岸本誠司(以下、岸本):兵庫県出身で46歳、酒田市に住んでいます。2005年に山形市の大学に赴任したことが東北と になるのは間違いありません。 な港を基地として漁をするようになったため、 トルの小さな島で、人口は約200 する漁民の文化が生きています。私の専門は民俗学で、飛島でその研究と実践を行っています。周囲約10キロ、標高が68メー のご縁の始まりです。現在は「鳥海山・飛島ジオパーク」の事務局にいて、鳥海山や飛島をフィールドに勉強を続けています 飛島は山形県の島ですが、秋田県を含めた出羽の国(山形・秋田)唯一の有人離島です。飛島には東北、日本海岸を代表 北前船がたくさん入ってきていた江戸時代の島の人口は、およそ1000人ぐらいで推移していました。 人、平均年齢が71歳で、子どもは中学生が一人います。島と鳥海山との距離は30キロぐ 人口が減りだし、今は200人になってしまいました。 10年後には100人 大き

などと考えながら島の若者達と活動を実践しているところです。 000人以上いた島が、 100人の島になってしまったらどうなるのだろう。過去の何を受け継いで未来があるのだろ

過去の写真を見ると、 昭和10年代は島の一番低いところに張り付くように家が並んでいました。 1948年の航空写真で

063



石倉 敏明/人類学者 ※21頁を参照

港はしっかりと整備されましたが、畑が大変少なくなり、そのぶん森が増えています。 港周りがほとんど整備されていません。1981年には、畑が減って森が増えてきたような気がします。 2002年に

な人が島の課題を共有して、その課題解決に取り組むようになりました。例えば、海岸に押し寄せる漂着物、 ·人だけではどうにもなりません。みんなで何とかしようということで、「飛島クリーンアップ作戦」が2002年からスター 人口の減少にともなう日常、暮らしの変化に応じて、島の社会環境が、 ここ15年ぐらいで大きく変わりつつある中、 海ごみは、 鳥

飛島ジオパーク」が日本ジオパークに認定されました。島の人口は減っているのですが、一方で島に関わり合う人の密度と 2013年に「とびしま漁村文化研究会」をつくり、島の若者達と一緒に様々な活動をしています。2016年には「鳥海山・ をめざしています。 いうのは高まりを見せています。 「三島交流会」では、 2 0 1 飛島、 年には島に関わる、 粟島、 佐渡島の三島が互いの現状や課題を共有しながら自然を守り活かした島づくり 様々な人達が一堂に会す「とびしま未来協議会」ができました。 私は、

関する活動です。島の人達がつくってきた風景だとか技術や知恵を自分達のバックグラウンドとして、これからの島の仕事 の意味を考えていきたい、と活動しています。 の基盤に据えているのは「0(ゼロ)次産業」という言葉。 飛島ではI・Uターンの若者達が「合同会社とびしま」を立ち上げ活動しています。メンバーは8人で、 これは「島の風景の保存と、 島の生活の知恵や技術の 会社の理念 継承」 に

というのは、 このようになるまで15年くらいかかりました。いろんな人達が同じ目的を持ち、 た。いろんな人が関わって時間をかけて島の課題や未来を語り合い、今では外部の人も評価してくれるようになりましたが、 「島のミューゼアム 澗(にま)」ができ、近年は、島の若者や「とびしま未来協議会」が様々な賞をもらうようになりまし 私の活動では、「飛島学講座」を開催したり、『飛島学叢書』という本を出しています。 ある程度時間がかかります。でも、それが着実に島の未来につながっているような気がします。 コミュニケー 島の若者達と協力して地域資料館 トをしながら推し進めていく

体で取り組んでいます。私なりに何のためにジオパークやっているのか、ジオパークはどんな効果があるのかを考えると、 守り、持続可能な社会を実現するという目的で進められています。今、ジオパークは日本に43か所あり、 のではないでしょうか。 秋田県には4か所あります。「鳥海山・飛島ジオパーク」は秋田県由利本荘市、にかほ市、 ジオパークは地球の記憶を扱います。世界遺産やエコパークやジオパークは、ユネスコが推進するプログラムで、地球を 自然の新しいつながり、 地域と地域の新しいつながり、 人と人の新しいつながりをつくる、この三つのことが大事な 山形県遊佐町、 東北では8か所、 酒田市の4自治

突然ですが、ここでクイズをしましょう。地球は46億年、 日本列島は1500万年、 飛島は1000万年です。では、鳥



岸本 誠司/民俗学研究者

-2番と3番が半々くらいですね。正解は3番、60万年・60万歳です。 何歳でしょうか。1番・1500万年、 2番·300万年、 3番・60万年のどれでしょうか。

仁賀保からみた鳥海山 実は、この答えは、 もう一つ。鳥海山はどこから見たのが一番かっこいいでしょうか。1•酒田から見た鳥海山 どこから見てもかっこいいです。理由は二つあります。 4・由利本荘から見た鳥海山 5・飛島から見た鳥海山(拍手)、ありがとうございます。 鳥海山は60万年の間、 2・遊佐から見た鳥海山 何千回も噴火を重ねて 3

**石倉:地球の歴史から身近な山や島の記憶まで、46億年の歴史をわずか15分で語っていただきました。** 壊地形」の見え方がどこから見ても美しいので、 もう一つあります。鳥海山のような火山は崩れやすく、特に北麓の秋田側は崩れた地形が見られます。「溶岩地形」と「崩 噴出した溶岩がつくった地形、「溶岩地形」が発達しています。これが見る方向によって違って、かっこよく見えるからです。 自分の住むところからみた鳥海山が一番かっこいいとなるのです。 すばらしいものでし

が浮かびあがってきたように思います。それでは次に天野さんには、男鹿周辺のお話をうかがいたいと思います 天野荘平 (以下、天野): 男鹿市脇本生まれで、 飛島の過疎や人口減の話も、むしろ逆行を越えてゆく若者達の新しい取り組みを紹介いただいたことで、希望や創造性 潟上市追分に住んでいます。 勤務先は秋田市で、 土日を利用して好きなこ

とをしています。 地震とナマハゲの話をしたいと思います。私達は交流のある団体と協力して、 どんな状況だったのかを聞き取り調査をしました。私達は男鹿市五里合地区に出向き、 男鹿で起きた過去の地震の記憶があるか、 年配の方達に地震の

があったことを、地震後に、「♪ごがつ ついたち ていたことで覚えていたんですね。 どういうことかと、よくよく聞くと、昭和14年(1939)5月1日午後3時に、五里合地区にとても大きな地震(男鹿地震) ごご さんじ」で始まる「復興歌」を、 毎日のように学校で歌わされ

記憶を尋ねました。すると、口々に「5月1日だべ」「5月1日午後3時だよ」と言うんですね。

た歌をテ 里合小学校に行きました。平成25年(2013)のことです。地震の起きた日と同じ5月1日に発表会を開きました。 の歌を今の子ども達に歌ってもらいたいと思い、 卒業生からたくさんの反響があったということです 人達もいっぱい集まってきてくれて、一緒に歌ってくれました。NHKの全国ニュースになり、 その歌はどんな歌だったのかということを尋ねましたら、 ープにとって、 五里合のこおひい工房・珈音(かのん)の佐藤毅さんに譜面に起こしてもらいました。 校長先生に話したところぜひ来てくれということで、佐藤さんと二人で五 歌うことができるという方がおりました。歌ってもらっ 全国にいる五里合小学校 そして、 地域 そ

男鹿では昔から、大きな地震が結構あるんですね。平成23年(201 昭和14年(1939)の男鹿地震、そして文化7年 1 8 1) の東日本大震災、 0)の菅江真澄の体験した地震です 昭和5年(198



1949年男鹿市生まれ。男鹿市文化財保天野 荘平/男鹿市菅江真澄研究会会長

住宅をつくることになり、700円の住宅を、お金のある人は1200円だったそうですけれども、県庁の職員が設計して でお湯が20か所自噴したそうです つくられました。この時の地震では15~2メートル幅の地割れの被害が大きかったこともあげられます。また、 その昭和14年の男鹿地震では、住家はほぼ全滅、田んぼも全滅なので、田植えのやり直しが必要でした。地震で倒壊した 男鹿温泉郷

死群霊追福之碑」があります。 寒風山の中腹に「じしづか」(地震塚)と呼ばれる場所があります。 これは五里合地区にある日本海中部地震の慰霊碑ですが、海抜6. 文化7年の「變死(へんし) 亡霊供養塔」や昭和14年の「震 89メ1 トルの、ここまで津波が来たということですね。

秋田県での採用はありません。秋田の教育委員会に話したりしていますが、なかなかうまくいきません。 ナマハゲの話をしたいと思います。 最近、東京の小学校6年生の社会の教科書にナマハゲが登場しました。 しかし、 地元·

最近分かったことですが、「オロロロ」「オロオロ」と呼ぶ地域もあるそうです。 るような気がします。ですから、ナマハゲ行事は、子どもに向けた行事というより、大人に向けた行事だと私は思っています。 ているとできる火形を、 クアップではなく、全町内でのアンケート調査をしました。その結果わかったことは、 、マハゲ、ナマバケ、 ナマハゲのことを知るには現状を知らないとダメだということで、2年かけて現状調査をしました。一部だけの町内のピッ ナマハグ、ナモミハギ、ナマゲなど14もの呼び名がありますが、みな、 ナマハゲが刃物で剥ぎにくるのだということからきているようで、どうも原型にそういうことがあ ナマハゲの名称にはいろいろあって、 なまけ者が火にばっかり当たっ

内は24町内もありました。 ているので、状況は違います。若い人達がやらなければ、 もう一つ、ナマハゲに扮している人の調査もしました。昔は独身の若者に決まっていたそうですが、今は若者が少なくなっ 俺達がやるということで、 5代の人が中心になってやっている町

マハゲをやっています。私は毎年、見ていますが、多分、死ぬまでかかっても、 分かったことですから、訴えていこうかと思っています。平成28年12月31日現在、 うです。しかし、所帯数が少なくてもやっているところはあります。これは一体どういうことなんだろう。せっかくアンケ 地域別に見ますと、 最近、飯ノ森地区でナマハゲが復活したことが全国ニュースになりました。この復活はうれしいですね。15年間も途絶え 男鹿市で一番所帯の多い船越本町・480所帯では、 ナマハゲをやっていません。少子高齢化のためだそ 全部は見られないと思うと残念です。 148町内のうち8町内(全体の58%)でナ トで、

ゲが10匹登場しました。ちょっとした声掛けで、こんなに集まるとはね。 やっぱり酒でも飲みながら、とにかく会話を、話し合いを持つことが大事です。秋田駅に行くと、男鹿のナマハゲの広告 誰か一人が声をかけたら多くの人が集まってきたのはちょっと不思議ですよね。 それで、 12月31日に、 ナマ

「男鹿のナマハゲは12月31日ですよ」と、書かれていますが、掲げられている写真は2月に行われる観光用の「な



まはげ柴灯(せど)まつり」の写真です。

**石倉**:数年前に僕が真山地区でナマハゲを見た時も、 やはり人手不足で、 親子でお父さんと息子がジサマとバサマに扮して

てよいと思います 天野さんからは、飯ノ森地区のナマハゲ復活の話や、 いただけました。これはやはり大変に貴重なことで、男鹿半島の文化として世界に誇ることのできる「土地の記憶」と言っ 8町内でナマハゲをやっているという地域の多様性についてもご紹

び上がってきたように思います。 お二人の話から、鳥海山や男鹿半島の地質学的な特徴や、 同時に、先ほどの岸本さんのお話とも共通するような、 自然と文化の世界をつなぐダイナミックな視点も現れてきました。 人口減少や地震といった災難や課題を乗り越えていく知恵も浮か

しかも小松さんはそこを拠点にしながら、 では、秋田中の文化の交差点、交流点でもありますが、 秋田市の秋田駅前にある小松クラフトスペースのご店主、 秋田の文化を深く掘り下げていらっしゃいます。 小松さんのお店では秋田だけではなく世界中の文化が集まっていて、 小松和彦さんのお話をうかがいます。 秋田市はある意味

なく様々なジャンルの民芸品、工芸品などを取り扱うようになりました。 アパレル、世界で集めた民芸品などを扱っています。 今の店舗ができたのは、ちょうど36年前で、その時から父が着物だけじゃ 小松和彦(以下、小松):もともとは60年ちょっと前に祖父が小松呉服店として創業した店ですが、様々な工芸作家の作品、

お土産として、本物の縄文晩期の土器をもらいました。 雷にうたれたような衝撃を受けて、すっかり感化されてしまいました。 青森県で民俗学や考古学を在野の立場で研究されていた田中忠三郎さんという父の友人から、小学校2年生ぐら ールドワー ·クを頼まれた時に使っています。そういった趣味が高じて大学では考古学を専攻しました。 トで秋田市内をご案内しました。このルー いの時、

販売しており、 宮本さんの影響で全国を旅して回られていて、 ベン・セタリンさんが、戦争などで肉親などを失った女性達を助けようと、 今も現役でフィ 小学校4、5年生ぐらいの時には、この方を、私がつくった歴史散歩のルー 放送作家として知られている永六輔さんも時々来られました。永さんの師匠の一人が民俗学者の宮本常一さんで、 永さんからそのチャリティーバザー 秋田に来ると当店に立ち寄られたのです。 ルをやれないかという相談を父が受けて、 カンボジアの伝統的な素材の衣類や小物などを 永さんの友人のカンボジア人女性 1997年に当店で開催しま トは

ラオス、タイなどには、 いうことになって、カンボジアのプノンペンの郊外に小学校をつくりました。 永さんも駆けつけてくれて、 その後毎年のように訪れることになりました。 ·クやサイン会をやってくださって、すごい売上金や義援金が集まり、学校をつくろうと できた学校を見に行った時訪れたカンボジア、

1976年秋田市生まれ。青山学院大文学

を京都、秋田の美術大学などで行っている 民族工芸」「遊廓」などに関するレクチャー 田県内の遊廓等の調査活動を始め、 の収集・販売を始める。20 仕事に関心を抱き、世界各地の美術工芸品 部史学科卒。99年に参加したカンボジアで 小松 和彦/小松クラフトスペース代表 『秋田県の遊廓跡を歩く』を刊行。「世界の 版にて 史コラ



なかったのに、旅先でいろんな布や工芸品を見ているうちに、発掘をやめて商家を継ぐという、まさかの展開になりました。 ということになってしまうんですが、 ましたが、 アに敷物のキリムの買い付けや、草原地帯の遊牧民の生活を見たくて出かけました。アフリカにも布の買い付けなどに行き る伝統的生活に魅せられたことなどが理由でした。それまで全く店の仕事を手伝ったこともなく、継ごうとも思ってもい 店を継いですぐ行ったのは、あこがれのインドで、2003年ごろからは毎年のように行っています。あとは、 農村のすごく明るい印象と、昔ながらの生活に感銘を受けたのと、古代のもののような建物や道具が現役で使われて この頃は、 秋田を顧みることがあまりありませんでした。秋田にいるとどうしても日本の中の、 海外から見るとアジアの一地域なんだという想いで見ていました。 東北の中の秋田 中央アジ

いて学び直さなくてはと思い勉強している中、興味が縄文ではなく別のもの、何と遊郭に移ってしまったんです。 てもらったり、県立博物館から「土偶について話してください」のオファーがあったりで、これは本格的に郷土史などにつ 0年ぐらいから、 周りには縄文時代にはまる人が増えてきて、私も「縄文土器とアー ト」というテーマで講演させ

ぎわいを生みだそう、 何でこんなところに遊郭があるのかなあと思って、いろいろな本などで調べていたら、ああ、これはすごいぞと思えてきた 話してくれという依頼が舞い込んだのです。 を買い込んで、とりつかれたように勉強しはじめました。その時、千秋公園にある「料亭・香雲亭」で縄文のことについて 秋田市の古い地図を見ていて、遊郭を見つけたことがきっかけでした。その場所は、予想と全く違う保戸野の方でしたので、 ね。それまで遊郭については、陰の裏の歴史みたいに思っていました。 みたいなところがあって、これをちゃんと勉強すると面白いものが出てくるんじゃないかと思えて本 ところが、近代の日本では、遊郭によってに

若い人や女性も多く、遊郭に関心を持つ人が多いことを実感させられました. をやりました。ちょっとマニアックで、内心心配だったのですが、お客さんは全国から集まり、 専門出版社を起こす知り合いの渡辺豪さんに相談して、彼とフリ 会場を見に行ったら、 縄文じゃなく遊郭について話したいと思わせる会場でした。遊郭についてやることにし、 ライターの井上理津子さんの二人を呼んでト 満員札止めの盛況でした。 後に遊郭 ウショ

くと現代の秋田の少子高齢化問題につながり、そこが落としどころになっている本です。 て出したのが、『秋田県の遊廓跡を歩く』です。遊郭というのは人と金が動く場所にしかできないもので、 て発売されたのが『全国遊郭案内』で、それを読んで私なりに秋田県の遊郭のことをまとめたものが、その本の第2版から 付録になりました。その翌年は渡辺豪さんから共著で本を出す誘いを受け、ちょっとした冊子ができればいいなという軽 その2年後くらいに、脱サラした渡辺豪さんが、日本初の遊郭専門出版社・カストリ出版を立ち上げました。 気持ちで取材スター しましたが、その取材途中、ああ、これはちゃんとした本をつくるのがい いなという気にさせられ そこを辿って 第2弾とし

さらに、この本を見たさきがけデジタルの安藤伸一さんから声をかけてもらい、 去年の4月から「新あきたよもやま」と



世界の民俗コーナー 小松クラフトスペース2階

さんに取材しました。次は二ツ井町の小掛というところで人形道祖神・ショウキサマの60年ぶりのつくり変えというの 合ってきたのだという。それから、五城目の畠山鶴松さんという明治・大正・昭和の農村の記録画家ですね。その方の息子 いる方の話。金の卵として東京に出てなかなか故郷に帰れなくなった人達が浅草の民謡酒場に集まって故郷の想いを語り .ルのコラムを秋田魁新報デジタル版で連載しています。最初に書いたのが、浅草で秋田民謡の民謡酒場をやって もうかなりなインパクトでした。 があ

芸者などを扱った『秋田美人と民藝』という本も、付録としてカップリングしています。 出版をしました。この雑誌の編集者・山田憲三郎はずっと気になっていた人物でした。昭和28年(1953) 昨年は、昭和4年(1929)に出た『美人の秋田』という、秋田の花柳界、川反の花柳界を扱っている専門雑誌の復刻 に出た、 川反

若勇さんを迎えて「最後の川反芸者・若勇さんの舞を見る会」を2月18日に開催します。 36年ぶりの店舗のリニューアル工事が今日(1月31日)で終わり、記念イベントとして、 川反の芸者さんとして活躍した

今やりたいことは、

今じゃなければできないことをやることです。

例えば遊郭や民俗学でも、

今のうちに、

80 代

90 代

方があり、 は140億年前のビッグバンから始まった、宇宙の記憶にもつながってくる時間軸で生物が生まれる前の世界がそこでつく な尺度によって、 **石倉:縄文土器から遊郭研究まで、個人史に秋田の歴史が透けて見える大変面白いお話でした。3人のお話は、** 人に取材しておかなければ、もう全く何も書き残せません。 そこには岸本さんが「地球の記憶」と言った46億年の地質学的時間というものがあります。 時間を捉えるという共通点があったように思います。整理しますと、土地の記憶というのは、多様な捉え もっといえば、これ 非常に大き

り出す景観は、こうした数十億年単位で築き上げられてくる時間軸に根差しています。 その上に40億年前から始まる生命の歴史が重なり、エコロジーをつくる世界の尺度が生まれてきます。ジオパークをつく られています

らしていく場所の記憶に移っていくのだろうと思います。 クな特色が生まれる。地方史や郷土史というのは、そういう民俗学的、地誌学的な観点で切り取るところが多いと思いますが、 ·代の文化が伝えられ、それから更なる大きな文化的な飛躍を経て、縄文時代が始まる。そして、それぞれの地方史のユニー それともう一つ、尺度を絞って、民俗の記憶とか、文芸の記憶とかが出てきますね。 我々の日常生活に近づけてみると、コミュニティーの記憶、まちの記憶、あるいは村の記憶、 大まかに、三つに整理させてもらいました。 日本列島に人がやってきて、 そういう自分の暮 旧石器

たたまれているといるわけです。 地域集団の生活、共同体というものがある。 地球の記憶というのは我々人類全体の問題でもありますが、そこに民族の歴史があって、それがベースになって、 岸本さんが、 こういった時間軸が、たとえば飛島のような小さなエリアにも重層的に折 15年くらいの飛島の活動があって、それが受賞者も増えて、 いろんな形で注 それぞ



小松さんが復刻した『美人の秋

前)をつなぐ蝶番のような位置にありますが、 に鳥海山は60万年の時間を持つと考えるととても面白いですね。鳥海山は「出羽富士」とも呼ばれ、秋田 目を浴びてるということをお話してくださいましたけれども、その背景には1000万年に及ぶ島自体の時間があり、さら 岸本さんからは秋田はどんなふうに見えていましたか? (羽後)と山形

グを組めませんでした。そのくらい遠く感じていました。ただ、 ていると思います。 岸本:山形市にいた時は、 秋田市を非常に遠く感じていて、東北学・地域学に取り組んでいる時も、 庄内地方の人は、 山形市よりも、秋田市の方を近しく感じ ついぞ秋田の人とはタッ

係は戊辰戦争のときにちょっと、こじれてしまったこともありますが、 まるで兄弟のように感じられるときがあります。 **石倉:**確かに秋田市から山形市に行くには電車や車でも4時間ほどかかってしまい遠い感じがします。 それにしても、 地域性には共通性が強いというか、 荘内藩と秋田藩の関

平安時代の国府、今でいう県庁のようなものが秋田にあったり、庄内にあったり、そういうせめぎ合う、 真ん中から分けているのが鳥海山です。もっと古い時代で言うならば、ヤマトの国の一番北の端に鳥海山があり、その時、 岸本:山形側の最北・女鹿(めが)を境に両県の風景、 文化的な風土がはっきり変化していると感じます。 狭め合う空間があ その出羽の国を

**石倉:**確かに有耶無耶(うやむや)の関を越えて、手長足長の伝説を思いながら鳥海山を見るとすごく古代的なものを感じ 手長足長という妖怪が村人を苦しめていたという伝説ですが、 最後に慈覚大師が怪物を退治して、 金峰 (きんぽう)

性とかジオ的な多様性もあるんですね。そうすると自然と社会と人間がつながった大きな多様性の渦のようなものが見えて その意味でも、 .の麓は芸能も伝説も豊かで、一つの文化的なホットスポットと言えそうですが、ここは同時に、自然的な生物多様 鳥海山は魅力的だと思うんですよね。

く必要があるのではないかと思いますが、そのあたりどうつないでいらっしゃいますか? 岸本さんの仕事の中でジオパークはおそらく地質学的尺度に関していて、 これを民俗学的・文献学的な尺度に接続してい

ジオやエコとの相互の関係を持ちながら生活を営んでいるということになります。ジオ、エコ、ヒトのそれぞれの関係をしっ かりと理解して、ジオパークの活動に反映することが私の仕事に求められています。 岸本:それは私の大きい宿題、課題ですね。ジオ(大地)の風景は、億や万という単位の時間スケー もう少し短い時間スケールでできている様々な自然、エコ(生態)の風景があります。そして、そこに暮らす人々は、 ルでできるものです

があります。たとえば、そういった風景というのはジオ、エコ、ヒトの相互関係の中でどのように成立したのか。 鳥海山は秀麗な山で、そこには神様がいるとか、滝や洞窟には不思議な力を感じるといった、 いわゆる「神々の風景」 あるいは、



象潟漁港から見た鳥海山

どういう人達がそこに意味を持たせたり、その意味を守ってきたのでしょうか。このような地域の風景のなりたちや意味 をいろんな人が理解したり、共感したりできるような、そんな仕組みをつくっていくのが、私の仕事の一つだと思ってい

ますが、 尺度があり、その上にやっとアントロポス=人類の現実というものが現れます。岸本さんがおっしゃったジオの世界、エコ の運動があり、 **石倉**:これは本当に重要な、地球的課題と言ってもいいような問題だと思います。僕達の目の前には数十億年に及ぶ非生物 天野さん、 ヒトの世界は、その三つが複雑にからまりあった世界です。この三つは、たとえば男鹿半島でも感じられると思い ジオ的現実となって現れてきます。僕達が「エコ」と呼んでる生物の世界はだいたい数億年規模の生命史 いかがでしょう? 0)

抜けると、 は海の底であったこの地形をうまく利用して、安東氏が山城をつくったことを考えると、ジオと中世の歴史が関連している **天野**: 男鹿はジオの教科書のようなところだと感じています。 のかなぁ、と思ったりします。 貝の化石がある地層が露出しています。 貝のいた海底が長い時間をかけて隆起して地上に露出 私の生まれた脇本には脇本城跡があり、その下のトンネルを したのです ね。 昔

近なところで生活必需品が手に入ったようです。 ク」という藻類がたくさんとれて、田畑の肥料に、ふとんの綿の代わりに、 かった」ということでした。食糧のない人には、近所の人が持ってきてくれるということでした。干拓前の八郎潟では、 たのに対し、 昭和14年の地震の話に戻りますが、先の調査で、「地震の時、どんな状況だったか」「何か困ったことはなかったか」と聞 ほとんどの回答が、田畑や海からとれるものがいっぱいあったし、保存食もあったので「何も困ることはな オムツに、落とし紙などに使ったそうです。 「モ 身

という出来事や死者の記憶、 たんですが、 **石倉:**八郎潟のような広大な湖を干拓する前の記憶というのは本当に重要ですね。また、災害をどういう風に伝え、語り継 チすることも増えています。そういったものも含めて継承を記憶していかなければならないってことが現在の課題かなと思 いでいくのかは非常に大事な問題です。日本海中部地震の唄を小野花子さんという民謡歌手がラジオの番組の中で唄ってい こういう歌い継ぎ方もあるんだと感動した記憶があります。ア・ 故郷を放棄しなければならないこと、あるいは放射能汚染や防潮堤の建設をテーマにアプロー トの世界でも、 東日本大震災のあとの、 災害

わりましたが、古くからの景勝地で菅江真澄や松尾芭蕉も来ています にたくさんの旅人や民俗学者が訪れて記録も書いていますし、外から来た人を受け入れている。 話が少し変わりますが、 男鹿半島には菅江真澄、柳田国男(やなぎた くにお)、折口信夫(おりくち しのぶ)など、 ą 鳥海山麓も地震で景観は 非常 変

小松:秋田にはよそ者が多いです。 大阪の陣とか北陸の一向一揆に敗れて落ち武者になって逃げ延びてきた人が多く入って

071



男鹿市脇本の貝化

きています。秋田って土着の質が強そうに見えますが、よそ者が来て秋田をつくってきている面もあります。

男鹿の村々では最初は警戒されるんですけど、「こんな風なことが聞きたい、知りたい」と具体的にたずねると親切に教え や「椿伝説」など新しい伝説もあります。「999」については菅江真澄は一言も書いておらず、ただ鬼が一夜でつくった 玄慧法印 (げんえ ほういん)、漢の武帝、 天野:僕は菅江真澄の本を片手に、一年間かけて男鹿を一周したんです。そしたら、当初抱いていたイメージと違いました。 とだけですね。おそらく誰かが明治になって考えついたものと推察しています。 たような日本の中 てくれるし、 男鹿は特殊なところで、大塔宮(おおとうのみや)、藤原魚名(ふじわらのうおな)の子孫、藤原百川(ふじわらのももかわ)、 漂着したロシア人=異邦人説などがあります。 歓待して案内もしてくれる。帰りにはお土産もくれる。これは、すべてアプローチの仕方だなあと思いました。 央で活躍する人間、 大陸で活躍する人達の記録が何で男鹿に残っているのか不思議です。 徐福、雁の使いの蘇武(そぶ)なども来ていると言われているんです。 そういった伝説には事欠きません。 しかし、「999 ナマハゲには漢 の石段伝説」 そういっ

文化をつなぐ要素としては、修験道の精神文化を欠かすことはできないと思います。 昨年はバンクーバ 石倉:本当にそうですね。菅江真澄の後にも、蓑虫山人(みのむし さんじん)みたいな不思議な文人画家も来ているんです もちろん岡本太郎やシャルロット・ペリアン、最近ではシャルル・フレジェといったアーティストが男鹿半島に訪れています。 ーからシンディ望月さんという日系人のアーティストが取材に来られました。また、 男鹿半島と鳥海山 á

ものを感じるんですね。そういう意味では鳥海山のあたりの開かれ方というのはどうでしょう? 鳥海山麓エリアも、 ある意味、修験道=山伏の世界。男鹿には円空も来ていますし、二つの地域には非常に宗教的に深い

岸本:時代によって違うと思いますが、古いところから言いますと、例えば延喜式内社(えんぎしきないしゃ)っていうの そのほとんどが海沿いにあります。鳥海山は大物忌神(おおものいみのかみ)。その沖の飛島は小物忌神(おものいみのかみ)。 の深い神様が300 - 0 0 0 年前から、その場所は、大事な土地の大事な神様の場所だよと言われてきたような場所です。 ね 延喜式神名帳(じんみょうちょう)・巻九・十という書物ですけれど、そこに神様、 0人ぐらい書かれているんです。ただ、出羽の国の神は9しかない。 9座、9の神様しか書 大和の国の神様と関わり

酒田市も秋田市も男鹿もそうですが、 うことなんですね。 いろんな人やモノが海の向こうからやってくる、その歴史的な層というのを重ねながら地域の歴史をデザインする、 そういうことで海っていうのは非常に大事です。 海のイメージがこれ相当大きいなと思います。非常に漂着伝説というのが多いんで

外と内をつないでいくエリアが出羽の国全体にあったのではないかなと想像します。 田城や払田柵(ほったのさく)も一つの文化的境界というか、ヤマトと蝦夷の世界を隔てる膜のように感じます。 石倉:鳥海山麓へ行くと、 有耶無耶の関のように峠ひとつ越えると別の国に来たような境界線を感じることがあります。 そういう



072

(『男鹿の寒風』秋田県立博物館蔵写本) 菅江真澄の描いたナマハゲ

高清水のあたりを歩くコースを案内していただいた時も、膜というか、ボーダーというか、境界線というのをすごく強く れてるんです。この活きた環境は「ライブ・エッジ」とも言われています。そういう意味では、前に小松さんに秋田城や ティブ・メンブレイン、活動的な膜に変えていくという発想と技術が活きたコミュニティーや文化的活力の秘談だと言わ 内から外に老廃物を放出するライフサイクルがあります。これが硬直すると壁になっていくのですが、硬直した壁をアク 最近、まちづくりの話の中で、細胞膜のような境界の話がよく出てきます。生物は代謝をして外から栄養を受け入れたり、

かのメッセージがあったのではないかと思うんですよ。 にある古四王神社も今は西向きですが、元々は北向きに建てられていたんです。 小松:秋田城が建設された時、そこは日本の北限で、北方社会との境界であり、 そこには、 玄関口でもあったんですね。秋田城近く 国家の北方社会に対する何ら

られましたが、ここにも境界や膜の感覚を感じました。 **石倉**:考えてみたら国の境界がそこにあるのは自然なことなんですね。 最近も北朝鮮から流れついた船が新屋浜に打ち上げ

交を結ぶためにやってきていましたが、時には地元の住民に殺されたりという、そういう1200年くらい前の歴史、 の大陸と秋田を結ぶ関係は、最近の木造船の漂着のニュースを見るたびに考えさせられます。 小松:8、9世紀の秋田の沿岸部は東北アジアの国・渤海(ぼっかい)国との交流の玄関口でした。渤海国からの使者は国 当時

石倉:カルチャ あったり、大学であったり、それぞれ孤立しているようにも感じてしまいます。 反省するところがいっぱいあるんですけど。 施設や機関に行くとあまり交流は生まれていない。例えば美術館、博物館であったり、それぞれの行政で ツーリズムとかジオツーリズムの面ではポテンシャルが高いのではないかと思うのです 人と人のつながりというのは、 我々の大学もさほど他の美術大学とつながっ 観光の面ではどういう関わり方 が、 一方でそれぞ

逆に言うと、行ったことがないところを案内して、「こうですよ」「ああですよ」などとガイド本の類を読むだけでは誤った 識を得るのはもちろんですが、現地の人達と話をしながら、交流しながら勉強して知識を得ることです。 ことを教えてしまう可能性があります。 天野:案内する人がどこからどれくらいの知識を得ているかが問題です。 一番いいのは案内先に行って、 生の情報収集です。 対象物を見物・知

らないと常日頃思っています。 教える、 語るということは、 知らなければ教えられないし、 語られません。そのためには、 よく勉強、学習しなければな

石倉:定型化した知識を繰り返して伝えるのと、たえず生きた知識を更新していくのとでは、体験のあり方も根本から変わっ ここにも生きた「知識の細胞膜」があるのかも。それにしても、 男鹿半島、真山地区の、 なまはげ館でナマハゲ



寺内にある古匹王神

面を見ていますと、膨大な数の面がそれぞれ違う素材で、異なる様式でつくられていることに圧倒されてしまいます。 岸本さん、ジオパークの仕事や飛島での仕事を通して、 ツーリズムというか観光の目線を通して持ったガイドの課題はど

ています。ジオパ す。ジオパークのガイドさんは、努力を惜しまず勉強されていて、分かりやすく、正しく、楽しく、ガイドができるようになっ を育成しています。ジオはつながりだと言いましたが、ガイドの存在が新しいつながりを生む仕組みの一つだと思っていま 岸本:ジオパークは秋田県に4か所ありますが、すべてのジオパークでガイドを非常に大切にしていて、 ジオガイドは、その土地にツー クの現場では、そういう人がたくさん生まれつつあります。 リズムで来た人を楽しませるだけでなく、その土地のことを正しく、 また愛情を持って伝 時間をかけて人材

**石倉:**今の話を聞いて、学生時代からずっと出羽三山に通ったことを思い出しています。 えられる人達です。ジオパークはそうしたガイドの質の管理も担っていますが、これからの観光では、その土地に精通した 人を介したツーリズムの需要が高まっていくんじゃないかと思っています。 山伏というのは本当に岸本さんの

ぐりますよね。修験道という伝統はその土地において学ぶ知恵の体系です。 やっていることと似ているように感じます。 小松さんはさきがけデジタルの記事で同じく「案内人」として活躍されています。「小掛集落のショウキサマ」の記事では、 山伏は里人を山中に案内する「先達(せんだつ)」として出羽三山の聖地をめ

男性のシンボルと女性のシンボルをちゃんと紹介しているんですね。案内人によって、フォーカスというか見せ方が変わり 小松さんの味が大好きです。

通して秋田はかつて鉱山、 小松:私は自分が見て面白いと感じたことを書こうと思っています。歴史や民俗学のファンだけじゃなくて、サブカルチャ トなどが好きな方々にも面白いと思ってもらえたらなと。私の遊郭の本を買う人は、 油田、林業などの産業で栄えていたことを知ってくれたらうれしいです。 結構若い女性が多いです。 本を

**石倉**:鉱山の周りには独身男性が集まっていて、 (さんばそう)の舞も伝わっています。こうした芸能も、伝える人、紹介する人がいなかったら、秋田中には広がっていなかっ かすことのできないのが番楽ですね。これは山伏と山立(やまだち=マタギ)が伝えた地域の神楽で、古い形の翁や三番叟 そういう意味では今の観光スポットの多くは、鉱山文化と切り離すことができないと思います。もう一つ、秋田の芸能で欠 遊郭ができ、そこに芸能や舞台などいろんな文化が花開き、 温泉もあって、

うです。忘れ去られていくものを、イベントなどを通じて世に紹介し、再評価していくことは有効なことじゃないでしょうか **石倉:**そういう意味では、アー 小松:畠山鶴松さんのお孫さんはケシゴム版画をやる人で、最近おじいさんの鶴松さんの絵を彫って、それを商品化したそ トを文化的なツールの一つとして使っていくことで、 バトンを次に渡すことができるのかな



あと。今日発表していただいた壮大な「土地の記憶」も、 かと思います。 そうやって人から人へと、世代を越えて伝えられてきたのではな

それでは、会場のほうで質問のある方、どうぞ。

景をお聞かせください ばいいでしょうか、それを若い人達と一緒にやる気になったのは何故ですか。どうして、そういうことになったのかその背 かということと、民俗学者でありながら、 会場の男性:岸本先生におうかがいします。 研究に専念しておられればいいのに、ジオパークないしは仕組みづくりとかい 飛島での取り組みが15年かかったそうですが、 何でそんなに時間がか かった え

に何がどう必要なのかということを考える一人のメンバーとして、そこに入っていました。 岸本:飛島にかかわるいろんな人達が、 うになった時間が15年ということです。その中で私は民俗学を勉強し、島のいろんな生活文化や歴史を調べ、 同じ部屋で、いろんな議論をするようになり、島の未来を語り合うことができるよ これからの島

うか。それを考える時に、民俗学は地域の先輩の人達が、どう生きていたかをしっかり学んで発信していく役割を持ってい 〈稲作を大事にする民族である〉との一つの答えを出しましたが、民俗学は現代という時代から何を要請されているのでしょ それから島づくりですね。民俗学には、大きな目的がありました。それは〈日本人とは何か〉ということです。 柳田国男は

ということを、いろんな人と考えていくのが大事で、そこに民俗学はどう貢献できるのかが私の大きなモチベーションになっ ひるがえってみれば、地域の人達が、 うまくいくかは分からないです。一番成功に近いのは、過去から学ぶこと。また、 これからどう生きていくかを学ぶことになります。他所の考え方を地域に持ってき 地域や私達はどう生きていくの

継承者なんだという自覚を持って生活しています。そして、そんな若者達を多くの大人が応援しています。 そうした状況の中にいろんな若者が入ってきて、若者達も島を勉強したり、これからは自分達が継承者だ、 よそ者だけど

をかけて移動をくりかえしてきた「よそ者」ということになります。本当のことを言えば、その場所に何年住んだから「内 **石倉:**きれいに全体の話をまとめていただきました。よそ者の視点と内に住んでいる人の視点は好対照で、対立 土地の富を交換し、文化を醸して、次の世代につなげるのかなと思います。 の視点」になるか、ということは厳密には決められない。そういう意味では私達は皆、移動しながら、その土地に生を享け、 れがちなんですけれど、本当はそうじゃない。 人類全体のことを考えれば、われわれは皆、 アフリカ大陸から何万年も時間 して捉えら

なというコミュニケーションを深めることも大切だと思います。次にバトンをつなげていくためにはどうすればいいのかと。 今日は秋田の北と南でそれぞれの土地のやり方も垣間見ることができました。世代を超えて、 どういうことが必要なの



飛島の勝浦 集落。













## シンポジウム「辺縁と創造のネットワーク 地域芸術祭を超えて~」

平成29年11月23日 (木・祝) 14時~17時 エリアなかいち にぎわい交流館AU2階 展示ホール

ケスト : 芹沢 高志 氏(アートディレクター・P3 art and environment代表)

原 万希子 氏(コンテンポラリーアートキュレーター)

高堂 裕 氏 (「踊る。秋田2017」 実行委員会委員長)

コーディネーター : 石倉 敏明 氏(人類学者・秋田公立美術大学准教授)藤 浩志 氏(美術家・プロジェクトディレクター)

年度(平成29年度)は、「あきたで学ぶ。あきたで創る。」をテーマに取り組みを進めてきました。「夜楽」があきたを学び、「日常」を深める場とすれば、

シンポジウムは新しい価値の創造に向け、「超日常」に気づき、 将来のまちの姿を考える場と言えたと思います。

から、私達が暮らす秋田市は日本海に面した「縁(エッジ)」という意味、また、社会的な視点からは、人口減少や少子高齢化など、地域社会の崖っぷちに立っ た時の課題、これからの地方都市の立ち位置という意味もあります。 ーク 〜地域芸術祭を超えて〜」には、取り組みのスタンスを踏まえて幾つかの意味が込められています。「辺縁」には、地理的な視点

だくことができました。 そんな背景のもと、ゲストの方々からは、「未来に向けた可能性(未来予測)」のスタンスや、芸術を取り上げる意味とは何かなど、様々なキーワードをいた

ンスを考える良い機会となりました。 普段、私達が見ている世界を、アートを切り口にさらに想像して、新たな価値を創造する。言葉遊びのようですが、これから私達がまちに関わっていくスタ

果のみではなく、このまちに住む一人ひとりが精神の基礎体力をつけていくように、アートを通した体験の場をつくり、創造性豊かな楽しいまちをつくってい くというロードマップを思い描けたシンポジウムを振り返ります。 地方都市にありがちな「自分のまちには何もない」という言葉。それを転換して「何もないと思う場所にある価値を考える」こと。そして、短期的な経済効

# 未来に向けた新しい可能性を考える(予測する)

芹沢高志さんは、 数学や建築を学ぶ中で、 エコロジカルプランニングに出会い、 生態学やエコロジーの視点も組み込んだ土地利用計画を立てる「地域計画」

を務めることが多くなったとのことでした。 えるようになり、個人的にも「魅力的な風景にアートという芸術を持ち込んでいくことをしたい」と考えていたことから、地域で開かれる芸術祭のディ を手がけられてきました。当時は、日本に環境アセスメントが導入され始めた時代だったので、環境影響予測という言葉を使っていたそうです。 その後、フリーになってから東京四谷の東長寺の400年記念の新伽藍建設計画に関わった際に、現代文化に対して寺の空間を開放していく可能性などを考

### 日常へのスパイス 何もないと思う場所にある価値を考える 閉じられた場所を開く 日常の中の深い

やり方をしたことについて、「すごく良い服地を着ているんだけど、なかなか服地に目がいかない。そういうときに、柄を打つことによって、その服地の良さを感じるこ とができる」という例え。日常に何らかのスパイスがあれば、超日常に気付いたり、日常の奥の深さに気付いたりするのでは、とすぐに感じられました。 横浜トリエンナーレでは、会場とした山下埠頭の倉庫がまだ市民が入れない場所であったことから、「アートの力でそれをこじ開ける」ことに関心があったそうです。 芹沢さんがこれまで関わった芸術祭のお話からも、感じることが多々ありました。北海道の帯広競馬場を会場に、風景の中にアーティストの作品を点在させていく 期間限定の場所やイベントには人が集まりますが、まさに日常と隣り合わせの閉じられた場所を開くことで、新たな価値や風景を見せたのだと思いました。

の鍵を持って、普段閉まっている建物の中にある作品を見てもらうという、参加者に深い体験をしてもらうことをしました。これは、そのまちに暮らす人にとっても、「ま らう形にしました。3回目の際は、ツアー形式だけで成立する芸術祭(アートゲートクルーズとベップ・秘密のナイトダンスツアー)として、ガイドがいろいろな場所 な生活の日常として温泉を使い、独特のコミュニティーをつくっている。そ**う**いう別府の姿を見て欲しいと思って、アーティストの作品をまちの中に点在させ、巡っても ちとの関わり」という視点からは非常にインパクトがあり、「自分は本当にまちを知っているのか」と感じる内容だったのではないかと思います。 そして大分県別府市の混浴温泉世界。これは、芹沢さん自身が土地の力、場所の力に惹かれて行ったのだそうです。地域の温泉銭湯が発達していることから、みん

てみたら、「ある意味何でもある」と感じたのだそうです。「人はなぜ、何でもあるところを何もないと思うのか?」というのが動機になって、ディレクターを引き受け、 これはこれからの地域を考えていくにあたって、根底にしっかり意識すべきスタンスなのだと思いました。 生活の現場にどんどんアートを組み込んでいったとのことでした。住んでいるまちに「何もない」と思う心。それに対して「あるもの」を気付かせるきっかけをつくる。 在住の方々に「さいたまってどんなところ?」とお聞きしたところ、皆さんが即座に「何もない」。あまりに皆さんが何もないというので、それに興味を持って実際行っ 一番最近は、さいたまトリエンナーレ2016のディレクターをされたそうですが、関わることを決めたきっかけが非常に印象的でした。知り合いのさいたま出身・

### 入口の議論をとことん

市も単純にこの流れに加わるのか? という、今後に臨むスタンスを今一度見つめ直す言葉として受け止めました。「なんで芸術祭を開くのかということについて、とこ ただいており、 とん話し合い、 芹沢さんがお話されたことで、もう一つ私達が考えさせられたことがあります。それは「今の秋田市の状況」です。全国様々な地域で展開されている芸術祭。秋田 私達も「その先」を意識しながら検討してきたつもりでした。こうした言葉をいただき、様々な検討の結果が少しずつ結びつき始めた気がしました。 納得しあってから進むべき。一番基本の部分の議論を最初に」ということです。昨年のシンポジウムにおいても「開催が目的ではない」という意見をい

## 芸術を取り上げる意味を考える

### 精神の基礎体力

その先に、何を見据えているかが大事なのだと思います。 いう短絡的な経済効果を求めるのが目的なら、わざわざ芸術を取り上げなくても良いでしょう」とお話されたように、芸術・文化を切り口にしたプロジェクトをやる また、 しかし、芹沢さんも「芸術には指標というものがないから、 入口の議論にあわせて、 「芸術」を取り上げる意味も改めてしっかりと考えたいと思いました。私達(行政)は、やはり費用対効果がすぐに念頭に浮かびま 集客数とか動員数とか、どれくらいお金を生んだか(経済効果)が評価の基準になりやすいが、

芸術を通して気付く機会をつくるプロジェクトにしたいと思いました。 20年経った時に、自分の人生に深く関わってくる芸術の体験。個人個人の精神の基礎体力のように、これから生きていく時に、一人ひとりが持つ何らかの力に

### 《場所の精霊》に聞いてみる

所に行ったときに、 史をより一層知る必要があると思います。そのヒントになると感じたのは「ゲニウス・ロキ」という言葉でした。「ゲニウス」とはその場所の精神みたいなもの。その場 私達が暮らしていく秋田市を「創造性豊かな楽しいまち」にしていくために、日常を知り、超日常に気付く機会をつくるとすれば、 他とは違う何かの雰囲気を感じることを「ゲニウス・ロキ」というそうです。芹沢さんは、「地霊」とまでは言わないけれど、「場所の精霊」と言 土地に根ざした文化やまちの歴

込めてきたのが「現代化」とすれば、アーティスト達の力を借りて、 こうした視点からアー -トプロジェクトの意味を考えると、世界中同じ条件で同じ効果を得ることをテクノロジーの力を使ってつくり出そうとして、場所の精霊を封じ 閉じ込められたその場所の力をもう一度外に取り出させる機能が、地域で展開されるアー トにあ

造につながるよう取り組んでいきたいと思います。 ると言えます。だからこそ、将来のまちの姿を想像し、芸術を通して私達が何らかの気付きを得て、今あるものの新しい価値や暮らしの中の豊かさを実感し、 次の創

## /ートによって世界を想像/創造する

#### 見えないものをア ティスト が読み込み、 場所 にもたらすものを地 域 $\hat{O}$ 人と共有す

くださいました。奇しくも、お話のテーマは「アートによって海を越えた世界を想像/創造する」です。先の芹沢さんのお話から、私達が受け取ったメッセージと同じ 次にお話してくださった原万希子さんは、平成29年春から秋田公立美術大学の国際交流アドバイザ -ワードでした。 -をされており、今回はバンクーバーから2度目の秋田においで

すが、そうしたプロジェクトを通して地域特有の問題を考える場をつくっていって欲しいということで、関係者の熱意もあって関わり始めたそうです。 鳥取も人口減少や高齢化、 ご自分が関わられた「鳥取藝住祭」を例に、芸術を媒体に、新しい価値を地域の中に創造していこうとする試みについて、ヒントとなるお話をしてくださいました。 市街地の過疎化の進行などの問題を抱えています。したがって、アーティスト・イン・レジデンス型の取り組みを試験的にやってきたので

手がかりに、芸術祭のコンセプトを立ち上げたとのことでした。二つの隔たった場所の類似性、ある種の原風景的なもの、その風景の中に存在しているものとして、 した過程で、市街地から離れた場所にある臨海公園を視察したとき、原さんの中で「場所の精霊」的なものを感じ、直感的にバンクー 歴史、場所の持つ力などをアーティストに提示することによって、場所の可能性を開いていけると思ったとのことです。 ーとの風景の類似性を 人

な原風景を私達が共有できるのではと感じました。芸術を通して、普段見えないものを想像し、新しい価値を創造していくということなのだと思います 通じて共有できることを見せたものですが、秋田においても、先人が積み重ねてきた文化があり、芸術がそれを引き出したり、場所の記憶を取り出すことで、 原さんの取り組みは海を越えた二つの場所が持つ、普遍的な時間の流れのようなものをアートを通じて共有することによって、世界、地球上で起きていることを海を

### 楽しみ方は人それぞれ。 自由に楽しみ、 その後の成果を想像する

後半は、ゲストの高堂さんと藤さんが加わってのトークです。

しんでもらい、その姿を他の人達が「良い光景だな」と思ってくれるような関わりや理解が広がって欲しいと思って取り組んでいるそうです。こうした高堂さんの姿勢 高堂さんは、「踊る。秋田」の実行委員長をされています。「踊る。秋田」は、見方を固定するとか、解釈を一つにするということは全くなく、老若男女に自由に楽 全てのイベントやプロジェクトに当てはまると感じます。実現したその後に、人のつながり、 新しい関わりが残ると言えば良いのでしょうか。

研究する人が出てきたり、どこかで才能を現してくれれば良いと思います。 現時点では、「踊る。秋田」の成果がどのような形になるかはわかりませんが、5年先、 10年先に舞踏やパフォーミングアーツ、果ては秋田が生み出したものとして

# すべてのことを楽しむことができる人が増えて欲しい

させてくれるお話でした。 のものに関して、それを楽しむことのできる人達ができるだけ増えて欲しい」という言葉から、秋田にいて日常の全てを楽しもうとする高堂さんの姿勢が伝わってきま 回もイベントに足を運んで楽しんだり、敢えてマイナス意見を言ってくれる人が秋田にもっといて欲しいなと感じたとのことでした。会場の方とのやりとりでも「すべて した。こうした視点に気付けば、場所を問わず、まちを楽しめるようになるし、まちを楽しむ方が増えると、そうした場所にはさらに面白い人が集まってくると妄想 面白い人達、 すごい人達がたくさんいるということを実感されたそうです。 イベントに参加する、お手伝いをしてくれる人を見ていて、何

藤さんは、前半に原さんが話された、カナダの先住民の「7世代先の自分達の子孫が豊かに生きられるような場所を、自分達の時代に保守していかなければならな 作っていかなければならない」ということをキーワードに、広がりのあるお話をしてくれました。

確かに私達の親世代くらいは、家庭や地域の中で、先の世代から自分達に、そして、自分達から下の世代に実際に引き継いでいたいろいろな経験や知恵が身近にあっ たように思います。 き方から受けた恩恵や知恵みたいなものをどう引き継いでいくのかと考えます。 上と3世代下と捉えれば、ひいお爺さんからひ孫までとなり、実際に見ること(体験すること)が可能で、かつては同じ時代を過ごせたのではと受け止めたのでした。 まず、「7世代」と聞いたときにすごくリアリティーを感じたそうです。「7世代先」の視点と言えば、 しかし、藤さんは、同じ「7世代」という時間の幅は、自分を基準に考えると3世代 200年先の視点。普通、私達は、 200年前の先人の生

### 場所が経験していく場所を開いていく

感じているそうです。そういう仕組みが必要なんじゃないか、どのようにつくっていくのかという投げかけでもありました。この「仕組み」「フレーム」というものが、 なければいけない、ということでした。そういう意味では、秋田は使っていける場所を開拓しなければいけないし、場所がもっと経験を重ねていかなければいけないと 次にお話されたのは、人の営みの積層をどうやってつくっていくのか、そして、場所や土地が何を経験するのかということがすごく重要で、良質な経験を重ねていか

私達がつくろうとしているものなのだと思います。秋田のまちの「なにか」を開くことで、その場所が経験を重ねていく。いろいろな場所が経験を重ねていくとどんな まちになるのか。経験を積み重ねる機会としてのプロジェクトという考えもあると思いました。

### 未来の記憶をつくる

を積み重ねていくことは、「新しい記憶」をつくっていくことなのだと思いました。 ます。芹沢さんの「未来予想」の言葉に呼応して、高堂さんが「未来予想というのは未来の記憶だと思う」と言われました。未来の記憶をずっと持ち続けて暮らすこ まちを知り、様々な気付きを得るプロジェクトに整理してきました。小さな取り組みであっても、いずれ将来のまちにつながっていく大きな動きになればいいと思ってい と。今は先行き不透明で、明日のこともわからないと考えてしまうと、今も未来も揺らぐのではないか。そうだとすれば、将来のまちの姿を想像して人や場所が経験 今回検討してきた「(仮称)芸術祭?」は、これまでの検討の過程で、私達も「将来のまちを見据えたアート・プロジェクト」として、その先にあるものを見据え、 この後、ゲストの方々から、いろいろな切り口でお話をいただきました。その中で、私達の心に引っかかったものを幾つか拾い上げてみました。

#### 地域に縛られるのではなく、 1 回など、 日常からハレの日に切り替えることを楽しむことから始める 精神的な一つのテーマで結んでい

ランスを取っていったらいいのかとか、今までの構造的な枠組みもそれでいいのかとか、違う視点がどこかにないのか考えることが必要」との意見をいただきました。 構造や枠組みをつくる際、「秋田」というものを外して文化圏などの枠組みでアートのあり方みたいなのを考えると、それはやりにくい。多文化の世界をどのようにバ つながっていくというフレー っていく感じが必要という気がする」との発言があり、原さんからは、「ネットワー 地域に根ざした土着的な問題と飛躍的な視点がパラレルにあったら、全く違う考えに至るのではないかとの指摘は、まさにそのとおりだと思います。秋田市の文化 また、藤さんからは、「新屋の公立美術大学から少しずつポイントが広がり、小さい範囲でも良いから、大事な活動がつくられていく現場ができていくとか、つなが 実現したいまちの姿があるとすれば、何年かに1回つながりながら、何かを一緒にやるハレの機会をつくり、それに向かって日常の活動を楽しみながら -ムを思い描くことができました。 - クとよく言うけれど、今回の「(仮称)芸術祭?」 のように、行政が何か一つの文化

とをしつかり考える機会ともなりました。 改めて課題も見えつつ、素晴らしいヒントをゲストの方々からいただくことができたシンポジウムでした。行政として、文化政策、芸術政策が日常生活に根付くこ

# シンポジウム「辺縁と創造のネットワーク

## ~地域芸術祭を超えて~」 ドキュメント

石倉敏明 言葉で、地理的にひとつのエッジになるということです。秋田公立美術大学では、辺境芸術と言ってますが、地域的に社会と自然 クトの可能性も探っていきたい。また、他の地域で行われた過去の芸術実践の事例とか、これから未来に向かってどのような新し の国の「辺縁」と交易を行ってきました。「辺縁と創造のネットワーク」を考えることによって、これから国境を越えた新しいプロジェ 口減少や高齢化の問題、これから地方がどうなっていくのかというような社会的な課題も含めて考えていきたいと思っています。 が接している場所で、なにか新しいことができるのではないかと思っています。もうひとつは文字通り崖っぷちという意味で、 い可能性があるのか、ということを考えていきたいと思います。最初にご講演いただくのが芹沢高志さんです。 さらに考えてみたいのは、海を越えた都市との関係です。日本海や太平洋沿岸の「辺縁都市」は、実は歴史的に、海を越えた別 辺縁とは縁(ヘリ)という意味ですが、二つの意味を持っています。一つは日本海に面したこの秋田市という場所を表す (以下、石倉):今日のシンポジウムは「辺縁と創造のネットワ 〜地域芸術祭を超えて〜」というタイトルになって

芹沢さん、よろしくお願いします。 芹沢さんは「P3 art and environment」というプロジェクトで、アートの世界で非常に新しい可能性を切り開き続けて来た方です。

題とかの知識も動員して、未来予想をするということにも興味を持ってきました。そんな私に、東京の四谷にある東長寺という禅 だけでなく、生態学、エコロジーなどに知見を組み込むべきという考えで、地域計画をやってきました。また、地球規模の環境問 らないという立場でした。 寺から、開創400年記念に伽藍を新しくしたいので、新伽藍建設計画のプロジェクトチームに加わらないかという声がかかりま **芹沢高志(以下、芹沢):**私は芸大や美大で美術の勉強をし、この世界に入って来たのではありません。土地の利用の仕方を経済 した。もちろん建築としてどういうものをつくるかという話もあるんですが、 できた後に何をするのかという話も考えなければな

がやることになり、運営のために、P3というチームをつくりました。 の境内を提案しました。それで形の方はできたのですが、活動は誰がやるんだということになり、言い出しっぺということから私 人達にお寺を開いていくことも、重要な営みじゃないかということに気付きました。そのために最初は境内を使おうと思ったので が、境内は違う理由から池にしてしまったので、人が集まるのは難しくなった。そこでここを掘り抜いて、アンダーグラウンド 住職達と話をし、お寺というのは、亡くなった人を見ていくのも重要な仕事だけれど、それだけではなく、同じ時代を生きてる





1951年東京生まれ。神戸大学理学部、 横浜国立大学工学部を卒業後、(株)リジ 横浜国立大学工学部を卒業後、(株)リジ ・東京・四谷)の新伽藍建設計画に参加 したことをきっかけに、89年に P3 art and したことをきっかけに、80年に P3 に and

いとずっと思ってきました。 私自身は、もともと地域計画出身ということもあって、景色とか風景とか風土とかに関心があり、風景の中でアートを展開した

所があり、帯広の開拓時代のような風景が残っていました。そこを市民に歩いてほしいと思い、8組ほどのアーティストに声をか 私が最初にやった芸術祭は、北海道の帯広競馬場を使った「デメーテル」でした。レーストラックの奥に厩舎が広がっている場 競馬場の風景の中に、作品を点在させていくということをやりました。

をアートの力でこじ開けてみるということでした。 る環境ではありませんでしたが、重要だったのは、ここは保全地区という指定があるため、普段は市民が入れない場所です。そこ を芸術の空間に変えるという、なかなか普段はやれない話だと思って引き受けました。潮風や湿気があるなど、美術作品を展示す その3年後に、「横浜トリエンナーレ」に、キュレーターとして加わることになりました。山下埠頭の先端にある、現役の倉庫

鍵を持って、別府のまちに皆さんをお連れしていくツアーにしました。鍵を開けて、いつもは入れない建物の中に入って作品を見 る芸術祭をやってみました。お客は1回20人ぐらい。ガイドの登場の仕方もちょっとへんてこにして、ガイドがいろいろな場所の 回目は別府タワーを使ったり、営業を終えたストリップ劇場を市民劇場に改修してコンテンポラリーのダンサーがショーをやった ている別府の姿を見てほしいと思って、作品をまちの中に点在させ、それらをめぐってもらう形にしました。同じような考えで2 土地の力というか場所の力に強く魅(ひ)かれました。とにかく掘ればお湯が出てくるというまちで、独特のコミュニティーをつくっ そのあと、大分県別府市で、「混浴温泉世界」と名付けたプロジェクトをトリエンナーレ形式で3回続けました。別府に関しては 人通りが少なくなってしまった商店街を舞台にしてダンスをつくるとかしました。最後の3回目は、ツア -形式だけで成立す

何もないどころか、ある意味、何でもある。人は何で何でもあるところを何にもないと思うのか? もない」というんです。そこにものすごく興味を持ちました。何もないところとはどんなところだろう? か少し迷い、15人ぐらいのさいたま出身の方や在住の方に、「さいたまってどんなとこ?」って聞くと、ほとんどの皆さんが即座に「何 去年(平成28年)は、さいたま市がトリエンナーレを始めたので、そのディレクターを引き受けました。最初、 トを組み込んでいこうと思い、全体の計画を立てていきました。 その問いが動機になって、生 ところが行ってみると、 引き受けるべき

浴温泉世界のように最初から3回と考えて終わらせたものもありますが、たいていは、まだ続いています。今年(平成29年)も北 アルプスとか奥能登が始まりましたし、石巻の「Reborn-Art Festival」も続きます 2000年になってから始まった、ビエンナーレ、トリエンナーレ形式の芸術祭には、 十勝のように1回で終わらせるもの、

芸術祭というものに対して、 いろいろな立場、いろいろな考えがあると思いますが、秋田市が今後そういうことを考えてみよう

(岩波書店)など、著書も多数を数える。(岩波書店)などを務めたほか『この惑星を遊動する』などを務めたほか『この惑星を遊動する』などを務めたほか『この惑星を遊動する』などを務めたほか『この惑星を遊りなどを



ベップ・秘密のナイトダンスツアー 「混浴温泉世界

085

084

時に議論しておかないと、最後の方でおかしなことになりかねません。 この一番の基本部分の議論をあまりされないうち芸術祭が進んでいくと、最後になって、あるいは何かうまくいかなくなったとき に、ボタンの掛け違いがものすごく問題になっていきます。なぜ、わざわざ文化芸術を取り上げるのかを、一番入り口の、最初の という時期であれば、何で芸術祭を開くのかということについて、とことん話し合い、納得し合ってから進むべきだと思います。

の効果が出てくるものではないと私は思っています。 例えば、AKB48 やピカチュウでも呼んできた方が、効果があると断言します。文化芸術、とりわけ芸術に関しては、即、何らか 準になりやすいです。そういう短期的な経済効果を求めるというのが目的なら、 文化芸術に対する評価の指標というものがないのですから、集客数とか動員数とか、どれくらいお金を生んだとかが、 わざわざ芸術を取り上げなくてもいいでしょう。 評価の基

体力のような気がしてなりません。本当に困ったときとか、本当に生き抜いていこうと思ったときに、何らかの力になってくれる と感じます。私は現在も、芸術を地域でやっていくことはとっても大事だと思っていますが、芸術祭という形を取るか取らないか 10年とか20年経って、 根本的にみんなで話し合ったらいいと思います。 自分の人生に深く関わってくる芸術の体験というのは、実際にあると思います。芸術体験とは精神の基礎

になったけど、見失ったものも多くあるのではないかと思っています。 我々は現代化という名のもとに、場所の精霊を封じ込めてきたと思います。それらを封じ込めることによって、我々はすごく便利 とまでは言わないけど、場所の精神、「場所の精霊」とは言ってみたい。まず、この場所の精霊に尋ねてみる。それが極めて大事です。 ここから先は芹沢個人の考え方です。「ゲニウス・ロキ」という言葉があります。その場所の精神みたいなこと。私自身は、「地霊」

を表していると彼は言っています。余談ですけれども、「道」という字は首を吊るして、旅の安全を祈った様子からつくられたも でこの字を引いてみると、呪力を持つ生き物を使って、 トや芸術についてですが、芸術の「術」、「すべ」という字があります。 十字路の真ん中で、 自分達の旅の安全を祈っていく祭事とか呪術的なもの 漢文学者の白川静(しずか)の「字統」という辞書

だったらアーティスト達の力を借りて、その封じ込められた場所の力をもう一度解放させる機能が、 るんじゃないかと思って、 ある種の呪術性というか魔術性を持っていると思うので、 いろいろな取り組みをしてきました。 場所の力が封じ込められていることに対して、 地域で展開するア トにはあ

でも、これまで何度か精霊という言葉が出てきました。「千秋公園の精霊たち」 もそうですし、ココラボラトリーでの 「精霊の学校」



©さいたまトリエンナ □ 「Elemental Detection」 (2016) エンナ 2016

というレクチャーには私自身も関わらせていただきました。そういう意味では、目に見えない場所の可能性について、喚起力のあ **石倉:**ありがとうございます。最後に思いがけず「場所の精霊」という話題になりましたけれども、 秋田市のアートプロジェクト

る精霊という言葉、非常にぴったりなテーマを選んでいただいたように思います。

よって海を越えた世界を想像/創造する」というタイトルで、太平洋を越えて活動されているアーティストの紹介を、「鳥取藝住祭」 次にご講演いただくのは原万希子さんです。原さんは、現在カナダのバンクーバーに在住されております。今回は、 -としてお話をしていただきます

**原万希子(以下、原):**今日は、芸術祭をテーマにお話しますが、芸術祭というのはどういった効果があるのかという話の中で、アー ティストがその場にインスピレーションを得て、何かが起こっていくというようなことが、 秋田市の芸術祭を考えていくときの参

うとする試み』」というサブタイトルがついているからです。 マの中に「アーティスト・イン・レジデンスの概念を丁寧にとらえ直し、『芸術を媒体に、新しい価値を地域の中に創造していこ 私がかかわった「鳥取藝住祭」は、「藝術祭」ではなく「藝住祭」です。 なぜ「住」っていう言葉を使っているかというと、テー

に移住しましたので、今年でもう10年間、カナダを拠点にしています。 アのコンテンポラリ 普段はカナダ西海岸のバンクー ・を紹介するチーフキュレーターをしてました。2007年にその仕事に着任をしたことをきっかけにカナダ バーを拠点にしてますが、2013年までコンテンポラリー ・アー トセンターで、

独自の活動をしていたアートや劇団など11の団体が参加して、一つの大きな流れにしようということと、 よって、それぞれの団体がアーティスト・イン・レジデンス型の活動を促進していくという動きです。 たら、一緒に仕事をしませんか」ということでお声がけいただいたのが「鳥取藝住祭」です。この藝住祭は、鳥取県内の6市町で、 の混浴温泉フェスティバルに関わっていた、初期のメンバーの林暁甫(はやし あきお) さんという方から、「原さん日本にいるんだっ ールという、アーティスト・イン・レジデンス型の国際フェスティバルのキュレーションをしました。その時に、 -を辞めて独立し、201 4年に日本に1年間帰ってきて、横浜トリエンナー 鳥取県が助成することに レと同時に開催された

がりをつくっていくということがテーマになっていました。 かの地域と共通する課題を抱えています。そういった場所で、芸術と住むことをテーマに、 高齢化の問題を抱えています。もともと農業が盛んなところだったんですが、それも後継者がどんどんいなくなっていくなど、 なぜ藝住祭かというと、鳥取県は I ターンとか U ターン移住が非常に多いのですが、社会的な人口減少とか、市街地の過疎化、 何か新しい、 世代を超えた親密なつな

にかをやっていきたいということと、参加団体の中でここだけ国際的なレジデンスをやっていきたいということで声をかけてい 者である米子建築塾は、 私が呼ばれたのは、AIR475(エアヨナゴ)という米子市を拠点にしている建築の人達がやっているグループです。 20代から60代ぐらいまでの建築関係の方々で、今回は建築の視点ではない、ア トという広い視点でな



原 万希子/

バイザーに就任。 秋田公立美術大学国際交流センター、 想のコミュニティ AIR475 プロジェクト(米子市 Nuit Blanche (トロント、の)、鳥取藝住祭、 プロジェクトを数多く手がける。最近の 年代よりカナダとアジアをつなぐア コンテンポラリーアー ル2014(横浜、14)など。17年春から 主なアー 任を機にカナダに移住、 住。コンコルディア大学美術学部美術史修 ンター Centre A のチーフキュレー **屲。2007年に国際現代アジアアートセ** 1967年東京生まれ、 トプロジェクトは、Scotia Bank ・アジア』黄金町バザ 13 年に独立。 90 バンクー

ただきました。

ましたが、戦争で爆撃を受けなかったまちなので、古い建物があるなど、まちとしては魅力的です。 なっています。市街地がかなりシャッター カナル(運河)が残っていて、それが中海という汽水湖につながっていて、そこからさらに日本海につながっていくという構造に ですが、庶民の力が強くて、明治時代になってから、米子城を商人達がつぶしたのです。城下町だった形跡として、加茂川という 米子以外の地方都市でも同じような現象が起こっていると思いますけれども、米子はもともと、米子城があった城下町だったん 街になっていて、70年代ぐらいから、産業や時代が止まってしまったような印象を受け

何かをやっていきましょうという気持ちが強く、私もそういったことに胸を打たれて、やり始めました。 ていって欲しいというのと、予算が300万円ぐらいと少ないということでした。とても小さな予算でしたが、皆さん凄く熱心に、 トを実施し、サイト・スペシフィックな作品を制作展示して欲しい。プロジェクトを通して、地域特有の問題を考える場をつくっ AIR475 と一緒にやることの条件は、私とアーティストを招聘して、米子市内でアーティスト・イン・レジデンスのプロジェク

場所の精霊的なものというか、直感的にこことつながるんじゃないかなっていう印象を持ちました。 また、この風景とカナダ西 海岸の島々との類似性も直感的に重要だと感じ、これが手掛かりになると思ったのです。 は市街地からちょっと離れてますし、主催者の方々も、ここでなんかやってくださいという話ではなかったんですが、私の中では し汚染され、それを地元の人達が頑張って、臨海公園を整備したりしながら、 メンバーの方達と市街地を3日ぐらいかけて様々回った後、視察最後の日に米子市に隣接している中海という場所に行きまし かつては「錦海(きんかい)」とも呼ばれ、夕焼けに赤く染まる場所でした。その後、 少しづつ復活させていこうとしています。この公園 干拓事業に失敗

の中に存在しているものとして、 やりたい。この二つの隔った場所が類似性、同じような風景、風土を持っているということ。ある種の原風景的なもの、その風景 大して、バンクーバーだけではなく、中海がもっている歴史とか、 そういった視察から「海によってつながる、時空を超えた場」のようなテーマが生まれ、それは米子とカナダという場所から拡 人間と海の関係、風土と歴史などをア カナダが持っている歴史とかの、 トを通じて開いていくことができるのではないかと思い 時間軸を超えたようなもので

特にバンクーバーという地域は、カナダの中でも一番アジアに近い場所です。環太平洋という動きの中に一つのつながりが見られ 近代現代の中では非常に野蛮な文化だとして、それを否定して近代化していった歴史があります。カナダでは2008年から先住 ンスが入植してきて、カナダという国をつくりました。しかし、もともと住んでいたのは先住民族の人達です。その人達の文化を、 るんではないか、ということを常々考えていたということがあります。また、 私の立ち位置として、カナダと日本とのつながりを、Trans-Pacific、環太平洋圏の中で考えたい、ということがありました。 カナダは今年、建国150年です。



民族の人々との和解調停が始まり、現在は彼らの文化が再考されています。

りとか、そういったことに大きく先進的に、秋田公立美術大学は関わっていると思います。 秋田にも独自の先住的な文化というものが非常に濃くあり、それらを芸術が引き出していったりとか、記憶を取り出していった

200年前ぐらいの生き方から受けた恩恵や知恵みたいなものを、7世代先にどうやって引き継げるのか、というような視点が動 代に保守し、つくっていかなければいけない、という話です。7世代先というのは、200年先ぐらいの視点のことです。それは 私は、先住民的なものとして非常に興味があるのは、7世代先の自分達の子孫が豊かに生きられるような場所を、自分達の時

という作品は、60センチ角ぐらいのアイスキューブを冬の日の出前から、日が昇るまでの1時間15分ぐらいの時間、 錦海という状態になる日没時に合わせて上映しました。この日は見事に晴れ、 削ってダイヤモンドの形にしていくというビデオ作品です。ダイヤモンドを置いている後ろから日が昇ってだんだん光が入ってき に面白いアーティストで、バンクーバーをベースにしている日系4世です。もう一人、やはりバンクーバーをベースにしているカー 鳥取のフェスティバルに参加したシンディ望月さん(以下、シンディさん)というアーティストがいます。シンディさんは非常 日の出になると、太陽がダイヤモンドを通じてぱぁっと真っ白になるという、光の変化を見ていく作品です。これを、中海が -さんがいます。20歳ぐらいの時に韓国からカナダに移住した、韓国系カナダ人アーティストです。彼の「ハ ちょっと体験したことのないような1時間15分にな ずっとノミで

いうような一つの流れの営みと、この場所でも同じように起こっている、非常に不変的な時間の流れみたいなものを共有すること 私達は具体的な解決策は出せませんが、このようにアー 地球上で起きていることを、海を通じて共有できることを見せていくことによって、 トを通じて、バンクーバーで起こっている日が昇って日が落ちていくと なにか閃ければいいなと思いました。

てつくられています。 覧船に乗って、そのドラマと船頭さんの話を聞く、 料亭に時代を超えてやってくるという「Paper」というフィクション作品を書いて、ラジオドラマにしました。そして、 話などをきっかけに、米子市(よなごし)からカナダへ移民して成功した磯島さんという方が、かつて中海の島にあったとされる シンディさんには、新しい作品をつくってほしいとお願いしました。鳥取県からカナダへの移民や、 というツアーを組みました。 この作品は、様々な偶然の出会いや気付きによっ 中海の遊覧船の船頭さんの

というか、一つの場所がパラレルな空間になっていくというか、そのような効果があるということですね。そしてこの作品は、 鳥取の弓ヶ浜からカナダの西海岸に渡った移民の歴史や謎の料亭の話など、それらをシンディさんは、「CALLING =お導き」と ・トというのは、ある種のフィクショナルなものをつくるわけですが、それを芸術の場所に置いたときに対比



中海(錦海) での



「たつみ」があった萱

使った主な仕事ということをテーマにした作品です。 「Rock,Paper,Scissors」という3部作になりました。これは、じゃんけんぽんということで、ロックが石で石炭などの鉱業、ペー -が紙で林業、シーザ **−がはさみで鉄鋼業に関わり、この三つは、開拓移民の人達が北米に渡ったときに就けた、自然の資源を** 

示しました。それを米子市美術館に2018年2月に持ってきます。 でいろんなものと偶然に起こっていく発見とか出会いとかいうものを、シンディさん自身 CALLING として、それらを題材にア トをつくっていくということで、こういう「Rock,Paper,Scissors」という作品をつくって、今年の春にカナダの日系博物館で展 これがシンディさんが作品をつくっていくときの一つのプロセスで、大きな意味で海と海を越えたものをつなげながら、その場

こに何をもたらして、それをどういうふうにして地元の人達と共有していくかという、一つの例としてお見せしたいと思いました。 せていただきましたので、これからつくられる新しい作品も大変楽しみです。 作品をつくり上げていくシンディさんのプロジェクトがよくわかる発表でしたね。シンディさんは先日、秋田でも一緒に調査をさ **石倉:**ありがとうございました。米子という土地に関わりながら、個人的な召喚(CALLING)の体験をベースに世界性を持った ません。そこから何を読み込むか、見えないものの言葉の地場みたいなものを、どうやってアーティストが読み込んで、そしてそ 直感的に感じた風景の類似性とかは、もしかしたら、米子とバンクーバーに限らず、どこにでも原風景としてあるものかもしれ

す契機にもなるということだと思います。 われが生きている歴史的な時間と関わりのあることで、同時にまだ実現されていないクリエイティビティーにとっても重要な問題 ところで、前半の芹沢さんのお話にも、場所や土地の精霊というお話がありました(86頁13行目から参照)。これは現代のわれ その地域の具体的な歴史や記憶というものが、とても強力な制作の動機や手段にもなるし、一つの芸術的な文脈をつくり出

ポイントがたくさん出てきたと思います。これからは、前半の発表への感想や反応も含めながら、さらに論点を深めたいと思います。 芹沢さんと原さんからたくさんのヒントをいただきました。その中でキーワードと言いますか、これから考えなければいけない まず、高堂さんから、よろしいですか?

**高堂裕(以下、高堂):**私は「踊る。秋田」の実行委員長という形で、ここに呼ばれております。

座に「丁寧に扱え」と言われたそうです。それは、渤海国がその200年ぐらい前に、日本と一緒に中国と朝鮮半島の合同軍と戦っ 場所なんですね、記憶みたいなものの積み重ねだろうと。 ていたということは、すごく面白いなと思っています。歴史というのはややこしいようですが、そうではなくて、 た歴史があったからです。その人達の末裔が渤海国をつくったということを、電話も、メールもない時代の人達が、知識として知っ 日本という弧状列島は、昔からあった訳です。平安時代の初めに渤海国から秋田に流れ着いた一団のことを都に報告すると、即 本当にその場所



090

「踊る。秋田2017」実行委員会委員長高堂 裕/

1948年秋田市生まれ。明治学院大学1948年秋田市生まれ。明治学院大学1948年秋田市生まれ。明治学院大学仏文科満期退学。秋田市大町で地ビール醸造販売を行う(株)あくら代表取締役。秋店で始まった「感恩講」評議員。万延元年創度で発表っていた「感恩講」評議員。万延元年創業清酒「程よし」の醸造を家業としていた満酒「高清水」の経営にも参加。趣味として能楽と多方面の読意を楽しみ、その蔵書数は膨大なものとまっている。

頭にした、だから狩った首の証としての血の色があり、饅頭の別字に万頭がある、などと言う面白い話がありますが、この三国志 軍や凱旋の折に、敵方勇者のマナ(霊力)宿る首を路の両側に置いて、その力を自分達の力として行進してゆくということがあっ たんだと。中国の饅頭の頭に赤い点が付いている由来に、諸葛孔明が、 を源とする二つの大河が長江とメコン川ですね。 ありますが「倭族(わぞく)」の繁栄した故郷であり、そして三星堆遺跡で脚光を浴びた四川盆地、 の蜀(しょく)などよりかなり古い時代からの長江(揚子江)流域のあたりが、黄河文明と肩を並べる文明地域でした。仮説では 先ほど、芹沢さんのお話の中に「道」と言う字のお話がありましたが、本当にそうなんですね(86頁19行目から参照)。戦の進 それまでの倣いとしての首を積んで戦勝祈願する風習を饅 さらにその奥のチベット高原

漂着します。平安時代の毛皮交易文化の仕掛け人であった渤海使が多く上陸したのは出羽の国でしたし、それ以前もそれ以後の交 は関係ないのですが、どういう訳か、日本海の血みたいなものを何となく感じています。大陸からの船は、多く日本海のどこかに 本と呼ばれる弧状列島である訳です。我が国の、戦における首狩り、田んぼの四辺に毀損した埴輪頭部を埋める習俗、鳥居、 ります。この広大な地政と歴史の中にそれぞれの文明風俗の伝播があり、様々の時代に北に流れたどん詰まりの一つが、やがて日 私の先祖は、江戸宝暦(1751 メコンの流域には首狩りの習俗があって、その河口の果てにはジャワ海を経て、首狩りの奇習で有名なパプアニューギニアがあ ーツとは申しませんが、何らかの共通する信仰文化があったと思います。じゃあ秋田はどうなんだとなりますね。 1761)のころ秋田に住み着いた、富山の薬売りです。ですから、大昔の秋田(出羽)と 蛇と

易の多くも、実証されているより遙かに多くが日本海沿いに興っていたことは想像に難くありません。うまく説明できないのです 間のありようが共感し合う感じがすることがあるんです。そんなことをとても面白く思っております。 が、大陸南方へ開いた心もちのようなもの、祭りや季節のしきたりへの関わり方や感じ方の中に、小さな私個人と壮大な時間と空 もう一つ、アートっていうのは、技術でもあるし、技でもあるわけですけれど、つくる人と、それを楽しむ人と、江戸時代でい

えば、施主と職人さんと二つあった訳ですね。両方いなければ駄目だったんです。芝居でもなんでもそうですが、やる人と見る人

ていく。歌舞伎なら歌舞伎の世界をつくっていく、能の世界でもそうですし、おそらく今の芸能の世界もそうなんだと思います。 て若い連中達のことを、役者を鼻で笑う人達がいたものです。そういうふうなものも一緒にあわせて、一つの大きな世界をつくっ だからと言って褒めそやす、立派だからと言って拍手をするだけではだめで、鋭いことを言う人がいつでも必ずいて、「ふん」と言っ これは、世界中きっとそうだったんだろうと思います。 私はよく言うんですが、見る人の形質や質や悪口というものがなければうまくなれない。ミーハーのただ単に褒めそやす、 綺麗

それをもう一度秋田でなんとかならないかと考えています。「踊る。秋田」というのをやっていても、面白い人達、すごい人達



大駱駝艦公演「ムシノホシ」「踊る。秋田2016

を言ってくださる人達がもっともっと秋田に欲しいなというのが、一番の思いです。 がたくさんいらっしゃいます。そういうものに参加する、お手伝いをしてくれる人をみて、何回も見て楽しんだり、マイナス意見

石倉:高堂さんのルーツはもともと富山県にあったということでしたけれども、秋田県は北前船の寄港地でもあり、特に秋田市に は加賀屋さんとか佐渡屋さんという名前も多くて、日本海沿いの移住が大変盛んだった地域でもありますよね。

たけれども、そのパプアニューギニアに行かれた藤浩志さんは、どのようにお聞きになりましたか? したが、そういった地域性も関係あるのかなとも思いました。お話の中で、たまたまパプアニューギニアの首狩りの話がありまし 秋田全体の特徴として、 ・トプロジェクトでは、「時間のレイヤー(積層)」をめぐるという意味で、「時層の旅人」というタイトルをつけていま 古いものと新しいものが重なり合っているという特徴があります。そういった意味も含めて、秋

にいくとひ孫ですよね。子ども、孫、ひ孫まで、これって実際に見れるんですよね。 ないですか。200年というとすごく遠い世界に思えるけど、3世代上ってことは、ひい爺ちゃんですし、ひい婆ちゃんです。下 すごくリアリティーがあるんですよ(89頁4行目から参照)。 7世代っていうのは、自分を基準に考えると、3世代上と3世代下じゃ **藤浩志(以下、藤):**さっきの原さんの話で、ちょっと面白いなって思ったのが、先住民が7世代っていう話をされていたのが、

ているような感じがするんですよ。 たと思います。そして、その塗り込められた僕らは何やってんのかと思うと、どうもその塗り込められた近代の隙間を、こじ開け んですけれども、なんでこんなに塗り込め、記憶を消そうとしているのか、ということに対する違和感と、その反発ってすごくあっ してましたね(86頁13行目から参照)。父親世代達がやってきた封じ込め作戦。戦争っていう非常につらいものがあったかと思う 芹沢さんの話でも、そのキーワー ・ドとして面白いと思ったのは、「ゲニウス・ロキ」、それを近代が封じ込めてきたっていう話を

うに地域と関係を持ちながら、その環境をつくっていくのかに近い重要な視点だと思っていました。 暴力的に何かを持ってきて、未来のビジョンをあえて無理やり描き、そこで何かをボ 先にある未来予想をしていく視点と、生態学的にその地域がつくられていくという視点(84頁12行目から参照)、これはまさに、 芹沢さんが重要なことをおっしゃっていました。地域計画は80年代の後半ぐらいから、生態学的ということを考えていて、その ーンとつくるのではなく、 活動がどういうふ

るかがすごく重要で、良質の経験というか、ここにすごく大事な経験というのを重ねていかなきゃいけない。そういうのを僕とし もしれないし、なにかもっと深めなきゃいけない部分もあるかもしれない。場や土地が経験していくこと、その土地が何を経験す 次の積層をどういうふうにつくっていくのかという感じだと思うんです。そのためには、 そういう意味でいうと、さっきの知恵の話で人の営みの積層だと思いますが、それぞれの時代の何世代もあとの積層や、さらに いろんな立場でいろんな形に関わりながら、なにか面白い状況をどうつくればいいのかとか、次の活動がどういう面白い人 こじ開けなければいけない部分もあるか



事長、十和田奥入瀬芸術祭ディレクタ 活動を実践。NPO法人プラスアーツ副理 事務所勤務を経て藤浩志企画制作室を設 ニューギニア国立芸術学校勤務。都市計画 都情報社を設立。同大学院修了 大学副学長。京都市立芸術大学在学中、 トプロジェクトの現場で 協力関係を活かした 秋田公立美術 パプア

藤 浩志/美術家・プロジェクトディレクター

達とできるのかとか、そういうことを考えながら、点々と巡ってます。

所はあるんですよ。古い家もあるし、使われなくなった施設もあるけど、そこをこじ開けようとするコーディネーターが不足して できる環境にないんです。なぜかというと、近代に塗り込められているからだと思うんです。コーディネ いるのと、そうしようとする意識や意思がない。もしかしたら、そこに邪魔をする人達がいるのかもしれない。 さっきシンディさんの話など聞いていても、せっかく来てもらっているから作品を見たいのに、秋田でそういう展示ができない、 -ターがいない、でも場

ういう意味で、 思うんですよ。それをやるには、コーディネーターを育てなければならないし、使っていける場所を開拓しなければいけない。そ ます。秋田でやってくれって言われてもできないんです。だって、場所がないし、やってくれる人がいないし、もったいないなと 美術大学ができて5年経ち、大学院もできて1年経ちます。大学には作家がいっぱいいますが、秋田県外でばっかり展示してい 場所がもっと経験を重ねていかなければならない感じになってきていると思いますね。

どういうふうに次に積層を読んでいくのかということを、もっとやっていくような感じの仕組みが必要なんじゃないかと今、思っ をつくっていくのかということが大事だし、逆にどこをこじ開けていくのか、どういうふうに次の積層を作っていくのか、もしくは、 ていますが、他の地域で活動しなければならない。それはもったいないと思うし、どういう人達が、どういう形で活動できる状況 ね。みんなほかに行っちゃうんですよ。鳥取に行くし、僕は新潟の「水と土の芸術祭」に誘われ、コーディネ でいます。ところが、秋田でそのまま活動できればいいんだけど、活動する状況がないかもしれない。それはもったいないですよ ここで新しい活動をどうつくっていくのか。美大には、デザインも含めて、新しい価値をここでつくろうとしている人達が学ん ートすることになっ

り問わないままイベント化してしまったり、なにか一過性のものにしてしまったりというような弱みもあるのではないかなと思い ればならないのかというのは未だに宿題ですし、秋田市の問題としては、古い建築を壊してしまったり、古い伝統やルーツをあま の古い地名や、近代に塗り込められたものを掘り起こし開いていくという斬新なプロジェクトでした。非常に感銘を受けた展示で トプロジェクトで、「東北を開く神話」というたくさんの市民作家を集めた面白い展覧会をやっていました。これは、秋田県全域 **石倉:**僕は5年前、美大ができた年に秋田市に移住したのですが、その時に、鴻池朋子(こうのいけ ともこ)さんが秋田市のアー したが、会場となった旧県立美術館でできていたことが、新しい美術館ではできなくなってしまっています。何を開いていかなけ

態学)」をどんなふうに考えていらっしゃいますか? さんのお話の中にも、地域の社会的な生態系に関わるトピックがありました。芹沢さんは改めて現在の視点から、「エコロジー 藤さんから、生態学的地域計画というのは、非常に大事な概念じゃないかという話がありました(92頁18行目から参照)。高堂 笙



093

境と相互作用しながら、ゆらゆらと、だましあったり協調したりしながらここまでやってきました。私は生命の創発的な進化の歴 芹沢:エコロジーとか生態学、もっと広く言えば、生き物の視点はすごく重要です。地球に生命が生まれて38億年くらいでしょう 史に習うことが多いのですが、特に生態系の発生や進化、振る舞いは参考になります。いろんなプレイヤーが関わって、 生命は、今の私達のようになろうと最初から計画して進化してきたわけじゃない。いろんな生きものとか、

視座として、文態系という概念を彼は言っているんでしょう。 てもいいじゃないかと言っていました。中国人的だなあと思いましたが、そもそも、私達の営みを抜きにした生態系というのはな 蔡國強(ツァイ・グオチャン)という中国人のアーティストが、 私達も生態系の一員です。植物とか動物とか地下水だけじゃなくて、 生態系があるんだから、文化の態系、文態系という考えがあっ 人間の営みとか歴史とか働きかけとか全部ひっくるめた

生態系の一員です。同じ言葉でも、ものの見方によってずいぶん違うことになってしまうから、そこに十分な注意を払いさえすれ 言葉はともかく、 生態学的なアプローチというのは、 私達の営みと独立したものとして、 間違っていないんじゃないかと思います。 生態系を捉えるのは片手落ちだと思います。私達も生き物であり、当然

と思いますし、未来予測をする上で、欠かせないポイントだと思います。 きだと言っています。この複合的な三つのエコロジーという概念は、アートプロジェクトをやっていく上で、とても大事なことだ ガタリ自身は、とりわけ芸術に関わる問題として、新しい主観性、価値を創造していくのは、三つめの「精神のエコロジー」の働 つめが「精神のエコロジー」です。おそらく、精神の基礎体力をつくるというのは、自然や社会の秩序に関わってくると思います つのエコロジー」という本を書いているのですが、そのうちの一つめは「自然のエコロジー」、二つめは「社会のエコロジー」、三 石倉:「エコロジー トの世界を結ぶ非常に重要なラインとなっています。 (生態学)」という言葉を創造したのはドイツの生物学者エルンスト・ヘッケルですが、この概念は現代哲学や たとえばフェリックス・ガタリというフランスの哲学者が「三

という地域社会で、先住民と移民の問題に身近に触れていらっしゃると思いますが、異文化が混ざり合うことについてどのように 域から移民が到来したときにどうやって受け入れていくか、という問題も社会のエコロジーに関わります。原さんはバンクーバー 先ほど原さんの講演の中で「7世代先を予測する」というお話をされましたが(80頁4行目から参照)、こうしたアメリカ大陸 自然・社会・精神という三つのエコロジーが重なるところで受け継がれてきました。先住民の社会に、他の地

**原**:移住者は、どこの都市にもたくさんいると思うし、 は移住者が少ないとか言ったとしても、流れとして、人はいろんなところに動いていけるので、混ざっていってるわけですよね。 日本でも、世界的にも、実は大きな流れで人々は動いています。この地域



ます。それと秋田がどう関わるかは私にはわかりませんが、海外から秋田への移住者というのは、どんな感じなんですか。 人間は今より広く、今よりさらにいい場所を目指して動いていくわけです。今はかなり加速した動きが世界中に起こってると思い

ないそうです。3000人台の人口規模というと、秋田県内の一番小さな市町村がそのくらいです。逆に言えば、ギリギリ一つの 石倉:今年、美大の大学院生もリサ の特徴というのが見えてくると思いますし、実は複数の集団が共存しているということも一つの特徴だと思います。 自治体になるぐらいの外国人がいるということですね。バンクーバーとはだいぶ違うとは思うんですが、対比的に見た時に、 ーチしているのですが、秋田県の在留外国人は3800 人程度で、

民のグループと、俘囚(ふしゅう)と呼ばれる大和朝廷側に着いたグループとが、「斑(まだら)状」に存在していたと言われます。 このように、たくさんの違うグループが共存しているということ、それがもしかしたら秋田の特徴かなと思います。 ようです。秋田の先住民は何百年もかけて、 秋田の古代史を考えてみても、 狩猟採集生活を送るグループがすぐに稲作中心の定住生活になじんだかというと、そうではない 日本という国に組み込まれました。その時には、蝦夷(えみし)と呼ばれている先住

も三つもあったりして、「斑状」に混じり合わないところも面白いと思います。 現代の秋田にも、 - ト関係のグループがいくつか共存していて、 土方巽(ひじかた たつみ)の研究だけでもグループが二つ

ができるのは、そういう時なのかなと思ったりします。残念ながら民主主義になると大きな建物は建たなかったんではないかと思 いで同じ方向に向けば、たとえば江戸時代の初めのころみたいに立派な城下町ができたり、あるいはヨーロッパでものすごい建築 まりをつくったときに、同じ中に考え方の違う人や毛色の変わった人や、理解できない人がいても、一つの国の中にあるという連 **高堂:**いつの時代でも、どんなところでも、 矛盾を感じたりしてるんですけれども。 グループ感みたいなものを持ち得て、 初めて自治体が健全に動いていくんだろうと思っていました。それが、 一色になることはおそらくなかったと思います。違って当たり前ですし、一つのまと かなりの色合

か楽しくなれるのと同じです。 港に大きな船が着いて、外国人がまちの中に出てくると、なんとなく目線を合わせないようにするとか、後ろ向いて仕事する人も 秋田だと、別に外国から人が来なくても、明日の暮らしもまあいいかなと思ったりするところが、いまだ残っている気がします 流ちょうな中国語も知らなくても、 向こうは知りたいと思っているし、こっちだって仲良くなりたいなと思ってるわけだから語り合えばいい。 大昔でも同じようなことがきっとあったと思うんですが、それを乗り越えてきたわけです。 一向にかまいません。私なんか外国に行って、

に感じます。お祭りの記憶をたどっていくと、いまは消えてしまった様々な習慣がよみがえったり、 **石倉:**高堂さんのお話には、秋田を俯瞰的に見る視点と、その地域の内側から見る内在的な視点の二つが含まれているというよう 秋田の人々がどんなふうに感じていたのか、といった具体的な情景が目に浮かびます。 あるいは港から来た異人に対



思います。芸術を通じて何かを行えば社会のためになり、観客動員数や観光で役に立つとか、町おこしや人口を増やすみたいなこ ているグループを通して問われてきたし、これからも問われなければならないと思います。 と言われるんですが、それよりももう少し繊細なことが、例えば「踊る。秋田」を通して、 藤さんがおっしゃったのは、近代が埋めてしまったものをどうやってまたこじ開けたり、開いたりするのかということがあると あるいは、秋田でいろんなことをやっ

たりして、その中で抑圧を受けたり、その中で動かなければならない人達というのは、やっぱりいるわけです。 **藤:**よく話をするのが、結局、 いるので、その束縛を受けてきたような気がします。 地域の中にそういう強いものがあったり、ずっとつくってきた権威構造があっ この数年間秋田で暮らしてみて、 手かせ足かせという束縛ですね。近代美術という束縛からいかに解放するか。僕は美術大学を出て 可能性とか難しいポイントとか、どういうふうに感じていらっしゃるんでしょうか?

す。その辺の重石や束縛をどう解き放っていくのかがすごく重要です。そのような中、本当に力強く秋田で動いてる人達がいます これから何かをつくっていく時に、その一方で秋田は保守的で、なかなか自由になれないことが、たくさんあると感じていま そういったことが、ちゃんとつながっていくというのがいいと感じています。 秋田の美大に来て、なんと自由なのかと思いました。学生が何の束縛も受けてない気がするし、 自由であり、 悩んでいなが

ずつ広がっていく感じが、去年、一昨年と発酵し、醸造して、だんだんつながっていく感じが必要だという気がします。 秋田の駅前も、すごくいい景観デザインの先生達、学生達により、だんだんと良くなってきていますね。そういうポイントが少し ントが広がっていくとか、本当に大事な活動がちゃんとつくれていく現場が、小さい範囲でもいいので、いろいろできていくとか 社会のためにみたいなこと、作家とかアーティストはたぶん誰も考えていないんですが、新屋にある美術大学から少しずつポイ

周りと混ざるといろんな危険な状態になるので、頑なに守り続けていると感じています。ビール造ってたりとか、 のを行っていく。大事な活動をきちんとやってる人達が、「斑状」にいるというのがすごくいいですね。その人達は頑固で、多分 そういう意味で言うと、場所を見つけ、その積層を見ながら、 頑なに守り続けていきながら、 きちんとつながっていく土壌になっていくのかもしれません。 精霊や地霊の声を聞き、感じながら、 本当に大事な活動というも そこには可能性 おいしい日本酒

家をつくると危ないことになるということを、本能的に分かっていたからだと思います。 というところにあります。五大湖周辺のイロコイ連邦も連合はつくったけれど、王様は出さなかった。混ざらなかった。それは国 **石倉:**カナダから北米・南米にかけて広大な地域に暮らしていたインディアンの社会の特徴は、長い期間「国家を持たなかった」

プが共存していることで、たとえば先住民と植民者の和解政策とか、性的な少数者(LGBT)や民族的なマイノリティーの人達も、 彼らはある意味では「斑状」であり続けたわけです。ただ、カナダの面白いところは、たくさんの異なる価値観を持ったグル



きちんと暮らしていけるような政策が進んでいます。そのあたり、日本は少し見習わなければならない点ですね。

**原:いろんなものと根底的につながるネットワークって言葉がよく出てきますね。それと芸術祭や国際展が必要かという話とか。** 系的に文化圏を共有するものとか、そういった枠組みでアー 出して何かをやっていくという、 芸術祭を考えた時に、まさにそういった国をつくらないみたいなのとつながりませんか。秋田市や秋田県という自治体が、お金を 一つの文化の構造や枠組みだと思うんですけど、秋田というものをはずして、東北学とか、 トの在り方を考えると、それはすごくやりにくいと思います。

然違う考え方にいくんじゃないかなと、皆さんのお話を聞いていて思いました。 とつなげていく考え方とかできるんじゃないかなと。土着的な問題と飛躍的な視点というものが、一緒にパラレルにあったら、 えたネットワークが、ありうるんではないかと。オーガニックな、地球生態的な構造として、芸術というもののありかたを、 秋田公立美術大学とか、皆さんそれぞれのネットワー · クが、ここにボンとできたことで、もしかしたら、日本社会とかを飛び越 全

とつながった時代があったり、 **石倉:**すばらしいヒントだと思います。秋田市では、何でも「秋田」という行政区の括りでまとめたり、閉じたりしてしまいがち 実は東北の古い文化は国境を越えて互いに影響をあたえあってきました。秋田市という地域だけを考えても、 他の地域と北前船でつながっていたりしました。 実は渤海国

域が位置づけられてきたという歴史とも関係しています。 東南アジアとも国際的な交流を行おうとしています。これは、環日本海・環太平洋の広大なネットワ 僕は秋田市のメンタリティーは開かれていると思うし、だからこそ、美術大学でもカナダのバンクーバーや台湾、ヨーロッパや -クの中に、 もともとこの地

**藤:**実際にいろんな地域をつなげるという芸術祭も出てきてますし、国を越えてっていうのも、 方っていうのはあるんだろうと思いますね。 としてその延長の中にあって、お祭り的なことをやることが必要なのかどうかもあるけれど、そうやって何年かに1回つながりな な拠点を結んでいくみたいな感じの。日常的に本来やっていくべき、秋田市の一つの文化政策として、もしくは、 もしくは地域に縛られるというのから外れて、精神のエコロジーみたいなものとかが一つのテーマになって、それはそれでいろん やっていこうという一つの機会をつくって、それに向かって地道にいろんな活動がされている、そういうフレームのつくり もちろんあります。地域に縛る、

たりする。もう一つの問題点は、先ほどから何度も言ってきてますけれども、 **石倉**: たしかに、お祭りって言うとそれに向けてやらなければならないことがあります。 お金をためて散在して、消費モ して、どれくらいお金が使われ、どれくらい人が来たのか、という数値の縛りが必ず出てきてしまうと思うんです。それについて いろんなことが言われていると思いますが、基本的には「数えられないもの」の質を担保する、ということを忘れてはいけな 土地の精霊って数えられないですよね。目に見えないものだから。 観客数というものに縛られたり、目に見える指標と



**藤:**目に見えないから、圧力が感じられ、なんか精霊が濃いぞ、みたいな濃度で測ったりして。そういう意味では、別の指標をつ

プロジェクトや長期滞在型の制作プロジェクトもそうですし、 多いのも事実です。「地域芸術祭」というお決まりのフォーマットの次を考えるという意味では、芹沢さんが紹介したツアー型の **石倉:**芸術祭はたいてい民族的な祭事が衰退しつつある地域に導入されていますが、代替を目指すかぎり、失敗してしまうことが 新しい形の芸術体験も導入する余地があるのかなと。

誰も来ないと寂しいんですよ。これは、本当に。 たとか、そういう指標の出し方が、最近はいろいろと研究もされているし、そういう見方もあるんじゃないかと思います。 収入が増えるんだけど、本当にそういうサイクルでやっていいのかということです。そうじゃなくて、実績に何がつながっていっ すけど、実態の予算より、はるかに多い予算をかけてやらないと、実際にお客さんが来ません。お客さんがたくさん来ると、入場 人が来るかという人員の問題は、 広報費にどれだけお金をかけるかみたいな話なんです。

だみたいな。島がどれぐらいの規模を求めているのかということは、コントロールしなきゃいけないと思います。 を豊島で開催したときに、何万人ぐらいのときはよかったんだけど、何十万人と来てしまい、島に観客があふれて島がどうなるん も興味や関心をそそられなかったらつぶれていきます。ところが、水が大量に来はじめると洪水になります。「瀬戸内国際芸術祭」 ています。どんなにつまんない活動でも、横で「面白いなあ」と言ってくれる人がいると活動が続くし、誰も見向きしない、 僕は,水の人,という言い方をよくしています。何かが育つためには適正な水分が必要で、それが興味関心だという言い方をし

が必要になってくるでしょう。 きていますけれども、新しいモ ないかと思います。何か体験をする上で、どういう環境をつくるのかというエコロジカルプランニング、生態的な地域計画が、 たは地域のにぎわいづくりや見世物的な体験だけではない、多くの可能性に開かれているということがわかっていただけたのでは **石倉:**今回の講演とディスカッションを聞いて、参加者の皆さんはアートの世界というものが単なる作品の鑑賞に留まらない、 トにとってとても大事だということが、今日の流れを通じて見えてきたような気がします。芸術祭というテーマが浮上して ードをつくるには、おそらくそういった思想的な突破口から地域を普遍性に向けて開いていくこと

ゲストに対する質問でも構いませんので、会場のほうから質問があれば、お受けしたいと思います。 それでは、そろそろ残り時間が少なくなってまいりましたので、後は会場とのコミュニケーションに当てたいと思います。どの

世界で活躍している人を呼んできて、 う形があるんだろうと問うときに、実は失敗談というものはすごく得るものがあると思っています。海外のグローバルなア **会場からの質問者:**秋田市が芸術祭みたいなものをやろうとしている前提があって、本当にそれでいいのか、やるとしたらどうい いわゆる国際展みたいなものだったり、あるいは、地域の文化や、地域の持ってるものを掘



ますが、そうではない在り方、あるいは、その先の在り方がないものかと。 り起こした、地域の価値みたいなものにフォ ーカスしたアートプロジェクトみたいなものに、なんとなく二分化される印象があり

もいい勉強になりま **芹沢:**芸術祭というのは多層的なもので、アー な芸術祭じゃない芸術祭のヒントってどういうところにあるんだということを、お聞きかせいただければうれしいなと思います。 芹沢さん、原さん、今日紹介されたプロジェクトじゃなくても、ここがこうできたらよかったみたいなことと、あとは、典型的 ある段階で噛み合わなくなったときにどういうことが起こるのか、この歳になって、 トの中身だけでことはすみません。さいたまの話ですが、政治、あるいは行政のダ 現場で見られたのは、

ます。国とか県とか市という行政区分だけで芸術祭を考えていいのかどうか。そうじゃないとお金がついて来なかったりというの それから、さっきから生態学の話が出てきていますが、芸術祭をどういう範囲で考えるのかということも重要ではないかと思い もっとエコロジカルな地理的ユニットで考えてみる必要もあるのではないでしょうか。

堂さんがやってらっしゃる「踊る。秋田」なども、多分そういう知恵を使って、ここでは一応結果を出すけど、 **原**:構造上、アーティストは、 はもっと違う大きな構造のところにあると思っているんじゃないでしょうか。 るかみたいなことを優先させていると思うんですが、 辻褄を無理やり合わせたり、 の仕方は、行政の経済構造上つくっている枠組みと本質的に噛み合わないのです。オー 長期のプロジェクトにしたりしながら、思考とか精神のアイデアが一番いい形でどのように実現でき 年度内で結果を出すとか、あるいはそこで成果を出すふうに考えていません。アーティストの思考 それには非常にアクロバティックな技が必要だと思うんです。 -ガナイザ -の芹沢さんもかなり努力されて、 本当に見せたいの

りを打つみたいなことを企画したり、 -トの一番の醍醐味は、どれだけ無責任なことができるかにあり、それをどれだけ辻褄を合わせられるかというか、 お金を出したりしている人達との間で、なんとかそれを説得する技量でしょう

すよ、と逆に言いたいですね。常にある種のフラストレーションはあるけれども、ある種の達成感はあるみたいなところで、 秋田市がやりたいと言っているアー Ė 実は型にはまらないものもあるので、そういうものだと思って関わったほうがいいで

という感じで、スタッフの人達は本当に大難儀し、死ぬ思いだったと思います。こういうのが、もう少し頻繁にあれば逆に面白い スティバルでやれば楽だったなと思います。応募は19か国から300人近くきて、その中から選んで行ったのが今回のコンクール **高堂:**踊りをやるということの一番の失敗というのは、人間という生ものを持ってこなきゃいけなかったことですね。フィルムフェ 皆さん思っているかもしれません。そのギャップを、アドレナリンだけで説明していいものだろうかと思うんですが、 100人近い外国の人達が参加しましたが、これを動かす 力技というか、その大変さにはあきれ返った



達が増えてきてくださればいいと思ってます。これはダンスに限らず、2~3人で、けだるい日常からハレの日に切り替えるもの メントみたいなものに、少しでも力になり、先ほど申し上げた通り、未来の記憶として断固として継続し、楽しみたいなという人 を、1年で1回とか2回とか、楽しむことから始まってもいっこうにかまわないです。 竿燈の祭りでもなんでもそうですけど、昔も今も、祭りって持ち出しの方が多いもんですよ。新しく自分達でやっているムーブ

のものもあればっていう、旬がそれぞれあるだろうと思います。 当はそうじゃなくて、いろいろあって、5年物もあれば、3年物もあれば、1か月ものもあれば、1日で終わるものもあれば5秒 うし、それを恒常的に残す必要もないけれども、作品っていうのは、それぞれ旬があると思っています。永久設置か一時的か。本 **滕:いわゆる芸術祭的な仕組みができることによって、空き家だったり、砂浜であったり、森であったり、いろんな空間を使いな** すごくいい状態で、いろんな活動がつくっていける状態があるのではないかと思いますが、やはりイベント的になってしま

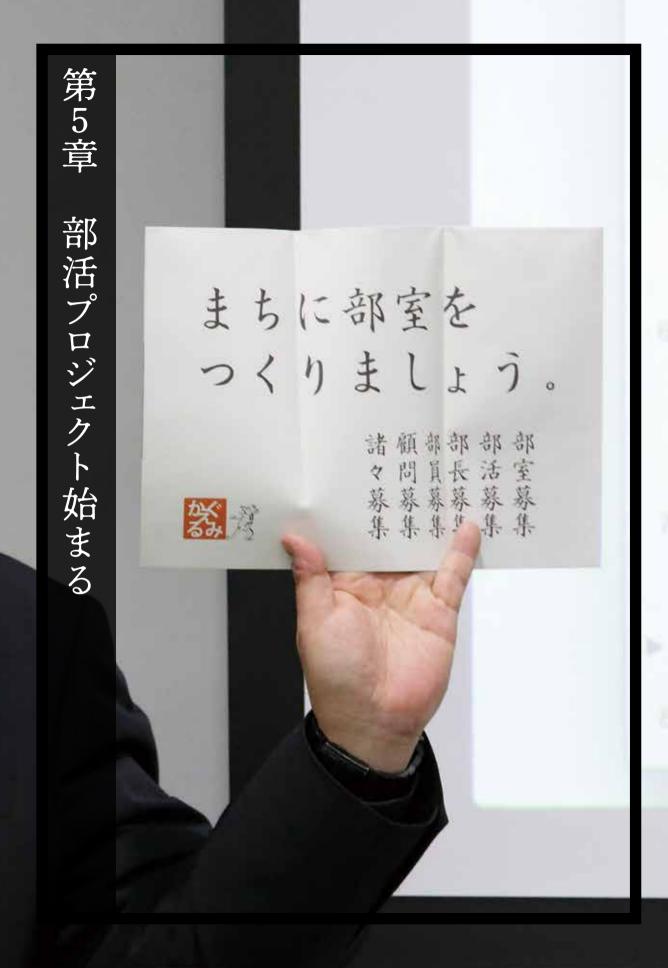
をつくっていかなければならないし、それをコーディネートしていく人がいて、それをやっていく拠点があるとすれば、美術館か てあるものの中には、持っていてもしかたがない、邪魔になっているものも実際にあります。そういうのは、それぞれに展示時期 それは地域によってもちがいます。ずっとまちの中に立っているものも、入れ替えてもいいものもあります。空港なんかにおい

ことをしっかりできる環境やある種の現場を、どうやったらつくっていけるのかというのは、すごく重要だと思っています。 今、美術館の領域では、コミュニケーターっていう言い方があって、作品をきちんとつないでいく役割の人がいます。そういう

光と鑑賞体験がセットになった定型的な芸術祭ブームが終わった後にどんなアート体験の可能性が残されるだろうか、という宿題 つくり方、世代を超えた文化の設計と責任の意識といった話題にもふれることができました。 **石倉:**ありがとうございました。今日のシンポジウムは「地域芸術祭を超えて」という副題のとおり、いわゆる観客動員型の、 に対するヒントをいただけたように思います。一連の対談を通じて、秋田の地域資源のとらえ方や地域の開き方、ネットワークの

世代の展望が見えてくるのではないかと思います。引き続き、今年度に行われる「夜楽」でも、日常生活に根差した美術政策から ハレの文化、あるいは、「超日常」のプロジェクトのあり方を議論していきたいと思います。 今日はどうもありがとうございました。 また、最後の質問にあったように、これまでできなかったことや失敗したことで、困難な体験のポイントを共有することで、次





102

『部活をつくる』第1回 説明会・ワークショップ」

平成30年2月7日(水) 氏(美術家・プロジェクトディレクター) 18時30分~20時30分 エリアなかいち にぎわい交流館AU 4 階 研修室1

#### 田 市 に楽 1 「部活」 をつくろう

ていきたいと思っています。 藤浩志(以下、 シには「部活募集」「部室も募集」って書いていますね。この経緯を話したり、雑談もしながら、 **藤)**:いよいよ「部活をつくる」プロジェクトが始まります。まだ、どうなるかわからない点もありますが、チラ 面白い部活のイメージをつくっ

なって、 所で育つ。そういう土壌があって、そこで何かやるうちに面白い活動ができていって、そういうのがないとつまらない美術館に 館が面白くなるには面白い作品がないといけないし、そのためには、面白い作家が育たないといけない。面白い作家は面白い場 美術館など発表する場所をつくろうとするけど、中身がないと何にもなりません。美術館に勤めていたころ思ったのは、美術 人も来ません。

たね。部活募集をしていますが、僕は部室をつくることを狙っています。まちの中に、 いろんな数の部活・部室があればいいなあと思っています。 学生時代にはいろんな部活がありましたが、面白いのは部室だったと気づきました。そこに行くといろんなものが許されてい 高校時代、教室や家では勉強しなければなりませんでしたが、部室は同じ興味・関心を持った仲間が集まる許される場でし いろんな場所に、いろんな人達が集まる、

活動のように楽しんでいることがわかりました。カフェが拠点になっていたり、お店の一角だったり、自分達で場所をつくって いたりするなど、いろんなことが見えてきました。一番重要なのは、興味・関心を持った人達がちゃんと集まっていて、開かれ な部活・部室に代わるものがあるのか探し出してみたら、結構、全国いろんなところでいろんな活動をしている人達がいて、 活動には、まず名前を付けるところから始めますが、ヒットするのは3割ぐらいです。はずれるものも多いです。全国にどん





※92頁を参照 藤 浩志/美術家・プロジェ

ていることなんだという気がしています。

ていくことで、面白いことが連鎖していくんじゃないかと思っています。 やっているいろんな活動をネットワークしていくことで、ミックスされていったり、変化していったり、新しい人が入ってき んな些細なことでも、何か面白いことをつくっていく、それが、自分だけでやるんじゃなくて、周りの人達とつながりをつくっ 秋田で、部活をつくる一つの方向性ですが、実は皆さんはすでにいろんな部活動的な活動をしていると思います。皆さんが 思いもよらない方向に展開していったり、そういうことが、まちを楽しくしていくんじゃないかなと思っています。ど

所や人が違う面白さがあって、それがつながっていくことで、楽しいことが起こるんじゃないかと思っています。 いろんなタイプがあればあるほど面白いし、 全然違うチャンネルがあって、 全然違う人達が集まると、

のかは、これからの課題です。それぞれの活動がどういう風につながっていくのか、どうしたら深まっていくのか、部室にで ばなるのかなと。そのためには、もっとはみ出ていかなければならないんじゃないかと。部活って言っても、活動がこぢんま 定の中でやっていることじゃなくて、こうなるといいなと思いながらも、えっ、こんなことになるの、という状態にどうやれ きるのか。いずれにしても、今日集まった人達で、どんな活動があると面白いか考えていきたいと思います。これから妄想の りするというよりも、何かあふれ出ていっている感じ、周辺にあふれ出ていっているものがすごく面白いと思っています。 今日、ここに来ている人は、こういうのがやりたいなというイメージを持っていると思います。そういう部活をつくって欲 活動を続けていくと、予期せぬことが起こるというのが面白いと思っていて、自分がこうやるとこうなるだろう、という予 それをこの先秋田市がどういうふうにフォローするかとか、全然違う部活動がこれからどういう風につながっていく

先生がいない、でも、部活の部室だけがあるという、僕からすると理想の学校です。美術の学校をつくって、気軽にお申込み ルでした。参考まで、どのような部活があったかを、お知らせします。 くださいということで募集しました。藤森八十郎という架空の人が校長で、校長が承認すれば部活として認められるというルー 僕が以前いた、十和田市現代美術館で冬季間、「超訳びじゅつの学校」という企画をやりました。学校なのに授業がない、 部活を考えてください。

「ものがたり部」原稿用紙を置いているだけで、 ひたすら物語を書いています。

「観察部」まち歩きのようなもの

「被服部」ひたすら縫物をする。

「わら部」わらを使って人形とかをつくる。

「ちいさな美術部」アーティストの奈良美智が部長の、 実は豪華な美術部。



「たてばんこ部」「変音部」「薪ストーブ」「よいどれ」などなど……。「おおおどる部」コンテンポラリーダンス。美術館内で踊ることが許されていた。

### 席替えして、隣の人と話し合い

して、隣の人の活動を紹介してもらいますので、お互いを取材してください。 活動していることや、 こんなことをやってみたいという妄想を、隣の人と二人一組となって紹介し合ってください。そ

ていく活動を行っているそうです。 県民会館とかに15名から30名集まって、千秋公園のお堀を語るだけではなく、 で水質を良くしようとか、千秋公園の再整備計画へのパブリックコメントをするなど、 か中心市街地について話し合い、例えば、千秋公園は夏草がたくさん生えているので蚊が多いとか、お堀の水質が良くないの **Aさん:隣のBさんは、「堀を語る会」という活動を去年の8月から行っているそうです。月1回、** 自分達で草刈りができないかとか、千秋公園と お堀を軸に中心市街地の魅力を発見し ねぶり流し館、

藤:ロゴマークってあるんですか

Bさん: ちゃんとしたものではありませんが、それっぽいものはあります。

藤:ジャケットつくったり、Tシャツつくったりは。

Bさん:そこまでは……。

線図を考えたり、ここを通るのは何号線とか考えながら散歩しているそうです。 **Cさん**:隣のDさんは大学生の方で「地下鉄部」の話をしてくれました。秋田市に地下鉄ができればどうなるかを夢見て、路

**Dさん:**小学生のころ、鉄道とか交通が好きで、紙に国道に沿ってこういう線路があれば住んでる人達もっと使えるのになあ 妄想しながら描いていました。

で遊びとしては最高なので、ぜひ路線図をつくりましょう。秋田地下鉄。出口だけでもつくりましょう。まずはロゴマーク **藤:**僕の知っている鹿児島の人ですが、完全に架空のまちの地図を完璧につくってるんですよ、相当大規模に。鉄道の延長





封鎖されているビルの屋上を管理会社に交渉して許可を得る「屋-を歩いている人に気付いてもらう仕組みだそうです。 かまくらづくり、雪合戦などを企画する「屋上企画部」もつくり、音楽や垂れ幕などで、屋上で何かやってるということを下 **Eさん:**「屋上開拓部」だそうです。秋田市はビルの屋上に行ける場所があまりないけど、もうちょっと空に近づきたいと考えて、 上管理部」をつくり、 屋上でパーティや写真を撮影したり、

**藤:**屋上って解放された感じになるよね。福岡で取り壊されるビルで若者が遊びはじめたら、その建物をもっと活用しようと いう活動が生まれた、ということがありました。

**Fさん:**「なべっこ遠足部」です。太平山とかに行くんじゃなくて、まちなかで、市民市場とかで買い物して千秋公園で食べ るとか。いろりをつくってもらい、そこで食べるとかしたいそうです

**藤:食べるだけとか、幽霊部員もいたりして。毎回、どこ行こうかとか、市民市場から始まっているのがいいですね。僕、なべっ** こ遠足やったことないんで、やりたいですね。

## 二度目の席替え、違う人にヒアリング

**藤:**まだ発表してない人に発表して欲しいのですが、皆さん、違う人に話すことで伝え方が変わったりしたのを感じまし

そして実際に写真を撮ったりしたいそうです。 の場所だったらどんなカオハメがいいかとか、逆にカオハメを先につくって、このカオハメが生きる場所はどこだろうとか。 **Gさん:**「カオハメ部」だそうです。観光地にあるカオハメ(顔を入れて写真を撮るための絵入り立看板)をつくる部で、あ

藤・カオハメって、 僕ははまらない(笑)。カオハメ選手権やって、カオハメの最も似合う人決めは楽しいね

皆さんにいろいろ話し合ってもらいましたが、残念ながら、今、話し合ったものがそのまま部活にはなりません。来年度(平 市の体制が整ったら部活募集をしますので、何らかの形で皆さんに活動して欲しいと思っています。

出てくるんじゃないかと思っていて、それがまた、いろんなコラボレーションとか、 していくんじゃないかと思うんですね。誰とつくるか、これが一番大事。企画の大原則です。誰とつくるかで変わってくる。 今日は楽しい話でした。このノリで応募してください。こういう活動が育っていくと、地域に面白い市民の活動が いろんな人とつながると、違う形で展開 いっぱい



でやるか決めれば活動は始まります 何がやりたいかというより、誰とつくるか。ネーミングを魅力的に。小さいことから、無理しないで持続的に。あといつどこ

状況がつくれると、もっとまちを楽しむことができるんじゃないかと思っています。ぜひ、 表しあえるような感じにできればいいと考えています。 秋田市への要望としては、そういうのを取材して開いていって、そういうのがまちの中にあふれ、はみ出てきているような 小さく始めて、ネットワ









「『部活をつくる』 第2回 説明会・ワークショップ」

平成30年3月14日(水) 18時30分~20時30分 エリアなかいち にぎわい交流館AU4階 研修室1・2

滕 浩志 氏(美術家・プロジェクトディレクター)

発表してもらいました。その後、四人一組に再編成して、部活イメージをブラッシュアップ。人と話し合う、 のように人との関係を広げることにより、イメージが豊かになることを期待してのことでした。その成果発表は……。 2回目の説明会とワークショップが開催されました。藤さんの説明の後、二人一組の組み合わせでお互いにヒアリングを行い 人の話を聞く、

**Aグループ:**秋田市の名所・旧跡に、お弁当を持って自転車で回る「自転車部」です。弁当を持って行ったり、そこに名物のお いう部活です。 いしいものがあれば、おにぎりだけ持って行ってピクニックしたりする活動です。汗をかくので、帰りに温泉に寄ってもいいと

を走ったら気持ちよかったですね。

**藤:**楽しそうですね。うちの美大にも「ゆるゆるサイクリング部」があって、私もママチャリで一度参加しました。雄物川沿い

孫からおばあちゃんまで参加してもらうほか、 なりました。 Bグループ:うちのグループは、ぬいぐるみっぽい服をつくってファッションショーをやる「手づくり部」です。 ミュージカルをやろうとしている人もいたので、その衣装にもしたいという話に

藤:「手づくり部」いいですね。ある事情があって、僕はすごい数のぬいぐるみを持っているので、よかったら相談してください。

けるかもしれないので、まずは、「きっかけ部」が必要ということになりました。 やったり、県外のお祭りを秋田でやったりしての交流をしたいという人。その場所でしか体験できないことを子ども達に体験し て欲しいという人がいました。そのように、何かをやりたいときに、一人ではできないかもしれないけど、きっかけがあれば動 **Cグループ:**子ども時代の懐かしいまち並みが好きなので、秋田は都会を目指す必要がないという人。秋田のお祭りを県外で

**藤:**「きっかけ部」いいですね。役割があって、それが発展していけば楽しいですね。

**Dグループ:**二人の人から「歩く部活」が出ました。まち歩きからトレッキングなどありますが、近所の文化を学びながら歩き

107



106

た。お母さんが作ったカレーを持ち寄って、互いのカレーを食べあい味を楽しむ部活です。 やる手芸の「オカンアー たいという話でした。もう一人の人は、スパイスを取り寄せるほどカレー好きで「カレー部」をやりたい。さらに、お母さんが が気になっている人がいましたので、すべて掛け合わせて「オカンカレー部」にしたいとなりまし

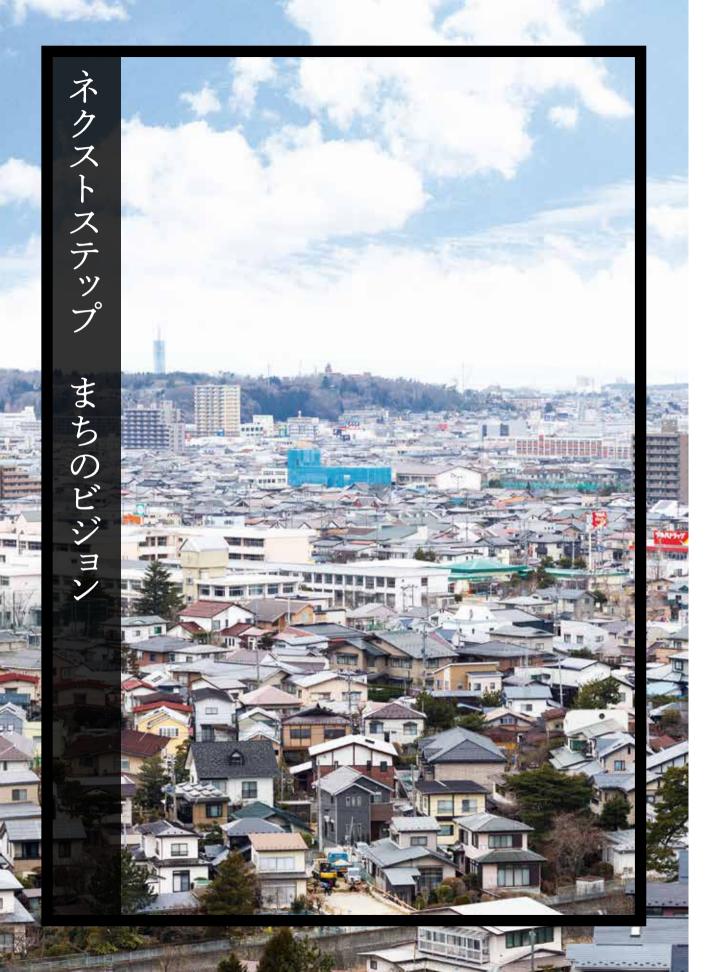
藤:オカンアートですが、舞台デザイナーで、オカンアー り、お母さんと会社までつくっています。「オカンカレー部」いいですね。 トを舞台衣装に付ける村上亮太という作家がいます。それが評判にな

さて、プロジェクト「アーツ秋田」とあわせて、平成30年度はどんな展開になるのか? また、説明会終了後、帰り際にお互いの連絡先を交換しあったり、一緒に帰ったりと、新たな「つながり」の予感がありました。 まちに部活をつくるプロジェクト、説明会では、参加した皆さんのイキイキと話し合う姿が印象的でした。 まちに関わる、まちを楽しむ、どんな活動ができるのか?

楽しみです。







#### まちのビジョン

る」ことにつながるのではないでしょうか。 手を生み、住み続けたいまちにしていくことで、これからも「ともに生き 方」「まちの使い方」を提示する。そして、新たな文化や産業とその担い せる」ことで、交流が始まり、生み出された知恵が新しい「まちの楽しみ る(創る)」ことに関わり、創造の連鎖を触発するため。つくることを「見 位置付けます。様々なアー 「(仮称)芸術祭?」は、「夜楽」で学び、シンポジウムで気付かされた -ドから、 「創造的な都市」を目指す「アー トを切り口に、このまちに暮らす私達が「つく

の方々の創造性を育み、まちに反映するための基盤づくりを目指していま 家・アーティストや商店街、民間事業者だけではなく、まちに関わる全て 現在、秋田市が中心市街地で取り組んでいる「芸術文化ゾーン」も、

そんな「人」が中心のまちを思い描いています。 がっていくことで、つくり手の姿が見え、まちにグラデーションができる。 このまちを舞台に、様々な人が多様な活動を楽しみ、つながり、輪が広

がったり、そんなふうに人がつながり暮らしが整っていくきっかけとなる こと。その先には、仕事が生まれ、秋田を訪れ、まちに関わる人が増え、 者が入って、まちとつながったり、ものづくりの若い担い手の移住につな ツ秋田」が、例えばまち中の空き店舗に新たな活動

を生み出す力があります。こうした切り口から、文化による「創造的な都 「文化」には、人が興味・関心を持ち、関わることを通じて「当事者性」

市」という未来の姿を見据えて取り組んで行くプロジェクトをスタートさ

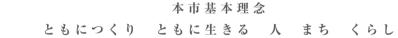
での「芸術・文化によるまちおこし」をさらに進め、文化による「創造的 まち・くらし」。「ともにつくる(創る)」のは私達が暮らすまち。これま 秋田市総合計画に掲げる基本理念「ともにつくり 「あきた豊醸化計画」「(仮称)あきた芸術祭?」など、仮の名前で検討

を目指すためのプロジェクトという姿が見え、次の一歩を踏み出すところ を進めてきたこの取り組みは、ようやく方向性がまとまり、「創造的な都市」 「地域芸術祭」のその先を考えることを意識し、私達が暮らすこのまち

が私達のまちへの愛着と誇りにつながり、次の新しい文化をつくっていく、 秋田の将来の姿を考える機会になることを念頭に進めていきます。文化の という、創造的な循環を目指します。 力を生かすことで、まちの創造性を高める。新たな価値を見い出し、それ

ちの将来像を見据えて、プロジェクトの検討を深めていきます 方向性や名称が固まると何かを理解したように感じてしまいますが、こ

「to be continued·····」



#### 創造的な都市へ 文化的。

Project Arts Akita プロジェクト「アーツ秋田」

#### EN CARBELL SECTION OF BEAUTY

総合計画	新・県都『あきた』成長プラン
	芸術文化・スポーツ・観光による都市の魅力向上
重点プログラム I	芸術・文化によるまちおこし



#### ドキュメント アーツ秋田構想 Document for Arts Akita

2018年3月29日発行

企画·発行: 秋田市企画財政部 企画調整課

〒010-8560

秋田市山王一丁目1番1号 TEL: 018-888-5462 FAX: 018-888-5463

http://www.akita-hojoka.com/ E-mail:ro-plmn@city.akita.lg.jp

アドバイザー 藤 浩志 (美術家・プロジェクトディレクター)

石倉 敏明(人類学者·秋田公立美術大学准教授)

制作 NPO法人あきた地域資源ネットワーク

編集 鐙 啓記 (NPO法人あきた地域資源ネットワーク)

渡邊 由紀子 (NPO法人あきた地域資源ネットワーク)

チーフデザイナー 石井 明日香 (ノリット・ジャポン株式会社) デザイナー 三浦 裕介 (ノリット・ジャポン株式会社)

写真 小阪 満夫(小阪写真事務所)

鄭 伽倻(撮影と映像制作)

三輪 卓護 (Otan/Photography)

校正 永井 登志樹 (NPO法人あきた地域資源ネットワーク)